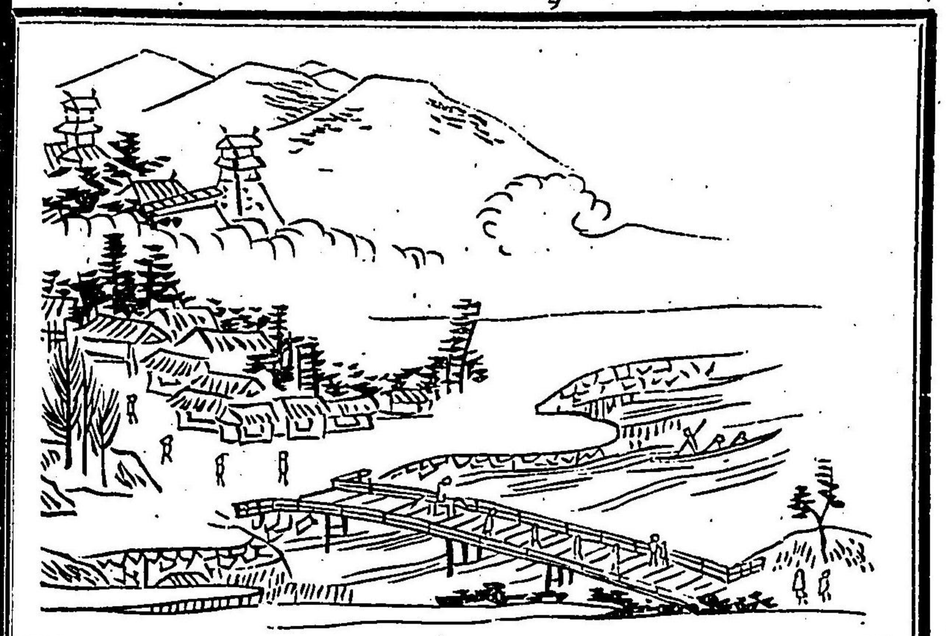
○北八三文ノ智慧叩レテ底ヲ而出ル



こちらのうづら焼はいくらだ亭主夫も三文北八イヤ是は三文では高ひようだ。ナント御亭主こうしなせへ。是を二文にまけてくんなせへ。其替りそちの丸ゐ餅は四文に買やせう（亭主こいつはへんちきなことを云と思へどどちらにしてもそんのいかぬ事故）亭主ハイよう御座り升お取おされませ（北八烟草入から銭貳文取出して）四文あらば。丸いのを買ふと思つたが二文有から此うづら焼にしやせう（ト鶉焼きを取りて打喰らひ乍ら行く）彌次ハヽこいつは北八出かしたっさすがの亭主も肝ばかりつぶして居やァがつた北八ナントちゑはすさまじかろう彌次へヽべら棒め。おれも其位ゐなことを仕兼るものかハヽ〳〵〳〵

わづかでも欲よは耽る鶉焼き。三文程のちゑをふるいて

かく興じ笑ひ連て西田海道より半里斗北の方よ名よしあふ八橋の舊跡を思ひて

八橋の古跡を讃もわれ〳〵が。およばぬ恥を杜若ゐれ

程なく池鯉鮒の驛に至る　馬士宮で泊ろうかお龜にしやうかナァ。但しや岡崎能女郎衆ナヤドウ〳〵彌次いめへましい草鞋で足をいためた。ちつとの間だ草履で行ふ。モシ〳〵此藁草履は。いくらだね亭主アイ〳〵十六文でお升彌次こいつは安い（こゝの亭主伊勢者にて商ゐひは功者なり）亭主アイお安うおますはひな。わたし所のぞうりは。しゆつと丈夫で。ねからきりや致しませぬ北八根からァ切めへが。先のほうから切るだろふ亭主イヤおはきおされてはたまらまいが。しまつて置なさると。いつ迄もおますわいな彌次そうだろふそして手前への所のぞうりは鼻緒が有て重寶だ北八鼻猪のねへぞうりが何所に有物だ　彌次何にしろ。安ひ物だ（トつるして有ぞうりを引切取て見て）イや此草履は。ちんばだはへかさ〳〵は大さくつて。こつちはちいさいようだ。コリャ八文宛にしちやァ大きな方は安ひが。ちいさい方は高ひ物だ。ナント御亭主片つぽの大きなほうは九文に買やせうから。こちらを七文にまけてくんゐせ

へ亭主アイようお升お召なされ彌次南無さん銭がたりない。一足買ふと思つたが。だつた七文計きやァねへから。アノこつちらの片々の方をバかり。買やせう北八ハヽ〳〵こいつは大笑ひだ。おいらがま糸をしようと思つても併ならいヽがぞうり片々が何になるものだ亭主お左様でお升一足お召なさりませ。どうも片々はなしては上げられませんわいな彌次ナニ片方はうらねへか。さすがは田舎丈。物が不自由だ北八エヽ江戸だとつてナニぞうりを片々賣る物が有もんか亭主何なら是になされませ。是じやと一足で七文ゑして上ませうわいな彌次エヽ馬のくつがはかれるものか人じらしな北八一足買ゑお目へ片ッ方買て。どうするつもりだ彌次又先に行て片方買ふ亭主ハヽ〳〵十四文に致しませう一足お召あされ彌次貴様とつくゑそう云ばいヽ（トやうようのとゑてぞうりをとヽのへ草鞋をぬさすてヽはき替ゆく）斯て此宿を打過早くも八丁縄手左名毛明神をふしおがゑ。今岡村の建場に至る。此所は。妹川と云面類の名物いたつて風味よしと聞て

名物のしるしなりけり往來の。客をもつなぐ妹かわの蕎麥

夫より穴生村。落合村を過行て。有松に至り見れば名にしあふ絞りの名物色〳〵の染地家

毎につゝし。かざり立て商き賣ふ。両側の見世より旅人を見掛てお這入〳〵あなたお這入。名物有松絞りお召なされサアサア是へ〳〵お這入〳〵彌次エヽやかましひやつらだわしいもの有松染よ人の身の。汕絞りし金に替ても

北八ナント彌次さん浴衣でも買はねへか彌次おも入。見たをして。やろふじやァねへか北八よかろふ。たんと買う顔をして。なぐさんでやろう（トあちこちを見廻す内。此町のどつぱづれに。小見世なれ共染地色々表よつるしある内へ這入）彌次コレ此絞はいくらしまます（ト云に此内の亭主と見へて將棊を差て）亭主サアしまつた時にお手は何じやいな彌次コレサ。こりャアいくらだと云に（トすこしこは肝をつぶして）ハィ〳〵夫かな彌次いくら〳〵亭主（高に云と亭主）コウトあなたいくらだとおつしやる。そこでかやうよ致すかい彌次エヽ小じれつてへ。コレ賣らねへのか。直段はいくらだと云に亭主ハァ偖やかましい人じや。そちらの方へ引替して符牒を見せなされ。たヽしれる物じやないわいの彌次こいつはとんだ。商人だ符牒にウのジとエの字が書て有亭主ヲヽそうじやあろ。コウト三分五厘切じや彌次高ひ〳〵まけおせへ亭主ナニ。まけいイヤならまい。此手下將棊に（將棊の合手）治兵さんマァ商ゐいをしよまいか。あゐた方が待て御座らつせる亭

○亭主眼光照得兩個之囊中

主好はいの迎も敵等はよう買やしよまいハテ買いたうても金銀はあらまい。あい箸じや。わしが手におはしますじやて彌次何だべら棒め金銀が有まい人を見くびつたことを云ァがる有から買ふ是ハふんどし丈で幾等だへ亭主何じやふんどし買ふ。イヤぶしつけせんばんな彌次こいつはおいらを。てうしやァがる。賣物買物に無躾も何もいる物か鼻つたらしめが（ト大きな聲する。亭主いつと心付そう〳〵將棋をやめて出で）ヘイ〳〵是は組相申ました。何なとまけて上ませずにお召下されませ北八そう云ゐさりやァ。してまた買つて上ずに。彌次さんお前へお袋や。かみ樣への土產にハ。あれがよかろふ。いくらだの亭主ヘイ十四文八分でお升彌次ソレそちらのは亭主是は十五文彌次もつといゝのはねへか亭主あり升共ヘイ是がなァ廿壹文づゝこつちらが廿貳文。下のがナ十九文宛でお坐り升彌次もつと是よりいゝのゐほしい亭主イヤ最う皆かような物でお坐り升彌次ム、そんなら大事にしまつて置な誰ぞか買ひやしやうわつちやァいつち初手に見ておゐた。此三分切を手拭丈切てくんなせへ亭主ヘイ左樣かゐ（ト肝を潰し二尺五寸切て出す彌次郎此代を拂てゐゝを出立）とんだやつらだすでよいひ三太郎にしようとしやァがつた。肝をつぶしゐハゝゝ時に大分道くさをした。ちと急ゐでやり掛よう（ト是

より道を早め行程よ早く）も鳴海の宿に着けれバ

旅人のいそげば汗よ鳴海潟。こゝも絞りの名物なれば

斯よと興じて田ばた橋を打渡り笠寺觀音堂に至る。笠をいたゞき賜ふ木像なる故に此名有とかや

執着の涙の雨にぬれじとや。笠をめしたる觀音の像

夫より戸部村山崎橋仙人塚を打過。やうやく宮の宿に到りし頃は。早日暮前にて。棒鼻より家毎に客をとゞむる出女の聲姦し。あなた方ァれ泊じやおませんか。お湯もちんと涌ておます。お合客はおません。お泊りなされませ〳〵彌次泊は何方にしよう。錢屋か。瓢たん屋か北八向ふの内い何だ鍵屋か女モシお泊りかな北八ヤイ泊やせう旅籠はいくらだ女ヲホゝ〳〵〳〵ようおます。お泊なさんせ北八何だいひか。只で泊るか彌次虫のいゝ（ト笠を取て這入る）お湯をあげうず。お足のよごれて。なけらにや有よお風呂へお召なされませ（荷物を坐敷へ運ぶ此内彌次郎北八も草鞋をぬぎ奥へ通る女茶を持來り）お茶あがりませ按摩お療治をなされませぬか北八療治もして〳〵が。マァ腹が〳〵つた彌次うどんでも喰てきや。こゝの名物だあんまさ左樣なら後

に來ませ（ト立て行跡より二三人連にて弓張提燈をともして）ハイお泊でお坐り升か是い當驛の御ば子樣。手水鉢建立お心ざしをお頼み申升。彌次ハイ北八。そけへ上てくりや北八是い少しあがら（ト錢八文出してやると帳に記して行入替て坊樣が一人せへて下されませ彌次何だ石塔の施主に附。いめいましね事を云て來る。ソレ持て行なせ）ハイ私は六十六部で石碑を建升。お心持次第お施主に。つかつべ（ト同八文ほうり出してやる。入替り）彌次エヽ又八文か貴樣は何の建立だ亭主イヤ明て此内の亭主ひよくり顔を出せば日いお船でお坐り升か。又佐屋廻をなされ升か北八直に爰から船にしやせう彌次船は好が。おいらア。どうも舩ではなぜか小便をするがこはくて。そしてねつから出ねへにはこまる七里乘と云もんだから。おらへては居られずどうした物だろう。佐屋へ廻ろふかノウ北八亭主イヤ夫にはよい物をあげうず。左樣のお方には私しがいつも竹の筒を切て上升から。夫でお小便なされるのようお坐ります彌次そんなら夫をお頼み申やす亭主ハイ〳〵先御膳をあげう（ト立て行。此内女膳を持て來る。こゝにても色〳〵）旦那方致ましよあれ共略す頓て膳も濟たる所此程のあんまよもませる。此内隣坐敷にかいな彌次サアやらかしてくんなせへ（ト是より彌次郎あんまよもませる。三味線を出して泊合せしでせ二人がなぐさみに伊勢音頭を歌ふ踊する）北もうつろふ仇人のうはきも戀と岩代の結び服紗のときを解（ハリサ コリヤサ）能

〳〵能となア（チレ〳〵）北八イヤ。こいつ。いゝ聲だナントあんまさんわしは。踊が上手だお前へ目が見えるとあの唄で。一ッ踊ッてみせてへもんだがなア あんまわしもすきだがなア。おどらッせる。音をきかアず。一ッやらつしやらまいか北八。やるは。やろふが。ほめて貰はにやア張やいがねへから。こうしやせう。わしが踊りしまつた所でれ前への頭りをちよいと。撫ようから。夫をきつ掛に。やんやアとほめてくんな由か〳〵ソレ踊ぞ隣の歌解ぬ思ひは二ッ箱三ッ四ッいつも泊船夫が苦界ひの行違ひ（ハリサ コリヤサ）（ト三味線に合せて北八手をたゝき踊るまねをして）北八能〳〵〳〵能ヤサア（ト踊仕舞坐頭の頭をちよいと足にて撫るとあんまハヽ〳〵〳〵北八何と面白ろうも一ッやろうか（又隣の歌）差手引手よ私何所迄も涙の浮寢の掘枕北八能々々よいやなア（ト又足で坐頭の頭を撫る）按摩ヤンヤ北八ハヽア面白へ〳〵（ト此内宿の女）お湯よお召なされ升北八彌次さん最ふしめへか。しめへから。湯に入あせへ。按摩さんが踊をほめて呉た替りよ。是からわつちも。もんでもらをふ彌次ドレそんなら這入てまよふ（ト彌次郎ゝ湯に入に行。跡にてあんまは北八をもみに掛り）あんま時に旦那方いちと當宿のお鶴でもお呼なされ北八イヤ夫よりかア。隣りの三味ゝこゝの娘か何人だのあんまあれは二三日前から爰の内に

泊りて居る瞽女でお升が。能聲だなもし。しかしまんだわしがじんくを旦那方へ聞せたい北八コリャ善ろふ。やらかしねへ。あんまそのかはり其替わしもほめてがなからにや。張合がない。歌ひしまつたら旦那ほめて下さるかな北八ヲツト承知〳〵あんまドレやりからかさう（ト北八がつむりをもみながら柏子を取て頭をぴしや〳〵）あんまジャン〳〵ヱヽ〳〵酔た〳〵〳〵五勺の酒に壹合呑だら樣またよかろ（ト歌ひさして北八が耳のがさい前。我が頭を足げにひろいた。はつヽけ（中ゑぐつと指をつヽこみ）といつ野郎め。かつたい野郎め。うぬがよな野郎わろくでヽ行まい揚くの果には首でも鉤じやろ（ト云さして耳の穴よりゆび）あんまやとさの（をぬけば耳ヽポントなる）

百八十六

○色無レ眼両個ノ瞽女何ソ擇ン

○是レ豆盗人

せ〳〵（北八耳の穴をふさがれてうぬが事を悪く云れたをも知らず）北八ヤンヤ〳〵あんまジャ〳〵ジャン〳〵（ト拍子に係つて北八が頭をぴしや〳〵と叩く北八顔をしかめて）面白へ〳〵あんま最一ッやろうかいな北八イヤもう御免だ頭がたまらぬあんまハヽ〳〵ゑろふ面白かつた（此内彌次郎風呂より揚り此の樣子ちらと見て）彌次和尚もつとやらかしねへ北八イヤおいらはもう湯に這入て。おようあんまさん。最ういひによ（トいひすて風呂場へ行。あんまは暇乞して歸ると。宿の女床を取に來り布團を敷て勝手へ行彌次郎は早其盡ねかける此内北八風呂場より歸り來て）ヨヤ彌次さんもう寢掛たの。時よお前隣り坐敷のしろ物を見たかとんだうつくしい瞽女だぜ彌次瞽女なら眼があるめへ北八眼はねへが。まんざらじやァねへ。今湯から揚つてくる時。一人の瞽女めが手水場にまごついて居たから小當りにあたつて置た。中〳〵やぼでねへしろ物よ彌次ドレ〳〵（ト這起て乘出し襖の間からさし覗き）ハヽヽ後ろ姿は中〳〵いきな風俗だコリャア。此まヽでいふかれぬはへ北八イヤそうはならぬ（トいヽつヽ夜着を引かぶり心の内には。おのれ今に這掛てやろうし。わざとねるふりにて横よ成と直に空ねびきをかく。此内隣坐敷も二人の瞽女もねた樣子夜もしん〳〵と更渡り後夜の鐘）ゴヨン〳〵（彌次郎そつとおき上りに成て入し樣子してやつたりとそろ〳〵這掛。襖をそつと明て隣坐敷へ這入見れば北八は本と二人は前後もしらずね入べい。彌次郎ごぜのところへ這入らんとせしに。さすがは眼のみゑぬ物とて用心さびしく風呂敷包を両手にしつかり抱てねて居るもゑ是がじやまに成て這入にくヽ彌次郎そろ〳〵此風呂敷包を取のけようとすると瞽女目を覺し片手に包を抱

百八十七

へ片手にて彌次が手をくつと掴へてうざらしと暫女の手をたゝきはなして早々にこなたの座敷へ歸り。夜着をかぶりそしらぬふりしてねて入。北八はとくより目を覺しくつ〳〵と笑て居ると此内勝手より亭主かけつけて（暫女様どうさつせ〳〵ましたぞ　わしが此抱て居る包をいんま。たれやらとろふとしておりました。雨戸でも明て有か見てくれなされ　亭主　イヤ何所明てハいおりませぬ　夫でもいんまの客人は何所から來おりましたろうな　亭主　ハヽア　襖が明て有モシ〳〵　お歸のお客様方およつて御坐らつせるか　彌次　アヽウヽムニヤ〳〵　亭主　ハヽアこゝゝゝ落て有は何じや。イヤふんどしじやそうな。モシお客様方是はあなた方のではお座りませんの（大きな蛙するに。彌次郎はハつと思ひ。とつと頭を上て見れば。わがふんどしが暫女の枕元から敷居越に我枕元迄長く成て落て居る故おかしさもおかしくさずがおれがのだ其云はれずもヒ〳〵して居ると北八　何だ〳〵そうぐうしいふんどしが落て有とはドレ〳〵。夫かコ八態といお悪くおき上り）リヤ彌次さんお前へのふんどしじやァねへか　彌次　エヽなさけないとをぬかしやァがる（ト北八が夜着の袖を引。亭主もさては）と承知し心の内におかしく思ひながら）イヤ最ふ旅のとでおさり升から。おたがひゑみお氣を付て御中心おさるがよい。暫女様。もうお休なされ　ごぜきみがわるくてねつかれませぬ。よんべて行て下さりませ　亭主　左様なら（トそこら立廻して出て行。彌次郎をつと手をのばしてふんどしをたぐり寄す北八おかしく

吹出しなおら）

暫女どのに思ひ込しは是もまた戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更渡れば皆〳〵ようやく一すゐの夢を結ぶあかつきの風樹水をならし涙の書枕に響て。つき出す鎚におどろき目覺て見れば。早明方の烏カァ〳〵（馬のいない）ヒイン（長持人足の唄）坂ハあァ照々ナァエ鈴鹿はくもる（ナァレエ）どつこひ〳〵（出船を呼ぶ聲）船が出るやアイ〳〵（此時宿屋の女おこしに來たり）モシいんま一番舟でお升。御膳を上ケましよ。彌次ヲイ〳〵北八サァおきや（ト二人いおき出て手水遣ふ内膳も出喰しまひ。彼是する内。宿の亭主）お支度ハようおざりますか。船場へ御案内致しましよ　北八　夫は御苦勞サァ彌次さん出掛やせう（トそこ〳〵に支度して表の方へ出掛る宿の女房。女）御樋姉よう又お下りに　彌次　アイお世話に成やしたく亭主ゑ迄送り來り）船頭衆お二人様とや頼み升ぞ　彌次時に忘た御亭主さん夕べお約束の彼小便の竹の筒ハ亭主　ホンニちんときらして置ましたに。ドリヤ取て參ましよかい（ト亭主ハ彼竹の筒を取に歸る此渡し舟七里の海上一人前四十五文宛凡外駄荷乘物皆夫それに賃錢を排ひ船に乘る此時亭主（お客様そけ〳〵おげ升ぞ　北八　何だ火吹竹の　彌次　是をあ主竹の筒を取て來たりサァ〳〵）てがつてナどうやらかすのだ好〳〵イヤ御亭主さん大きにれ世話サァ是で大丈夫だハヽ

○狂歌以テ換ニ笑評ニ

をほ水の出るはづ彌次のうnばみがのたくりいでし此渡し舟

〳〵

おのづから祈らず迎め神ゐます。宮の渡しは涙風もなし

斯く祝しけれバ乗合皆〳〵勇み立やがて舩を乗出して順風に帆を揚げ海上を走る事矢の如くされど。涙平かなれば。舩中思ひ〳〵の雑談にあごの掛けがゐもはづるゝ斗り高聲に笑ひのゝしり行程に商賣舩。いくそうとなく漕違ひて酒。のまつせんかいゐ名物蒲焼の焼立。團子よひかゐ。なら漬で飯くわつせんかいゐ〳〵彌次アゝ能ゐたい。いつの間にやらごうぎに來たぞ。時に小便がもるようだ（ト宿屋の亭主がくれたる竹の筒をだし爰でこそ前へあてがい小便をする。此竹の筒は火吹竹の如く先の方ゝ穴を明たるなれば舟のふちにもたせ掛て小便をするつもりの所。彌次郎の心には穴の明て有には心付ずしゆびんの儀に思ひ。竹の筒へ小便をしこみて跡で打明る事と心得舟の中にて直に竹の筒へしこみければ先の穴よりゝ小便が流れて舩中小便だらけとゐり乗合皆々肝をつぶし）コリヤ〳〵何じやひな。水がゐろう流れる乗合たれか土瓶を打。こかゐたそうゐ。ソレ〳〵煙草入も紙入も。ぴつしよりじや。コリヤたまらんハ。ヤアお前小便じやな（トとがめられて彌次郎竹の筒をかくし所にうろたへてまで〳〵する）北八エゝ彌次さんどうした物だ。れ目へ小便をするなら。そけへ揚つて竹の筒の先のほうを。海へ出して仕込のだnナめつそうな。舟の中が小便だらけになつた。エゝきたゐへ〳〵

彌次おれは又ゐゝでし込で跡でぶちまけるのかと思つた乗合イヤ早と得うもない。コリヤア。くさくてならんわい。船頭衆〳〵遠ふ遠物は外にはゐいか舩頭だれじやぞい。小便をしたのは。舟玉様がけがれる早ふコレふかつせいな北八エゝ氣のきか糸へ人だ船頭エゝソレまだ竹の筒から落る。夫も投してしまはつせへな彌次イヤ是はそつちへやろふ。火吹竹になろふから北八エゝお前へが小便した物をナニ火吹竹に成物だ。早く拭なせへ。らちのあかぬ（トいぢめられて彌次郎ふんどしはづしそこらをふく内。北八はうきべりをひつくり返して引直し）サア〳〵是でいゝどなたもおそはりなせへ彌次コリヤ皆様御免なせへとんだばんくるはせを致しやした（トつゐになひしよげかへりて。そこら取かた付ける。乗合皆〳〵みが）乗合笑ひてだんまりで居る。此内早くも舟は桑名の岸に至るきたぞ〳〵小便にこそ。ぬきたれ。舩はつゝがゐく桑名へきた目出たい〳〵（ト皆〳〵是より上りて此宿によろまびの酒汲かわしぬ）

○五編

宮重大根の。太しく建し宮柱は。風呂吹の熱田の神の慈眼す。七里の渡し涙ゆたかにして來往の渡舟。なんゐく桑名に着たる。悦びの餘り。名物の燐蛤に酒汲替して。かの彌次郎兵衛喜多八なるもの頓て爰を立出。たどり行程に。此頃旅人のうたふを聞げば流行歌時雨蛤

土産にさんせ。宮のお亟か情所ヤレコリヤよヲシ〳〵よし馬士コレ旦那衆戻り馬。のらんせんか彌次よヲしよし馬士安ひに。たんだ百五十でやらまんか彌次よヲしよし北八せうろく四文で乘べいか馬士其樣よヲせよせ馬ヒイン〳〵長持人足舟はナア追手に帆掛て走るナアンエ早くサア熱田に泊りたやナアン。アエ八兵衛どうした馬でも呑だか。何だかわらねアどつてゐ〳〵北八何と彌次さん何もあくさみだよ。こうしようじやアおいか。おめへの荷物とわしがのを一ッ所にして一人が。引かついで。半日者りに旦那と家來の。しうちはどうだろう彌次コリヤ面白へ夫よかろふ先己らから旦那を苦めるぞ北八そりやアいゝが今日ハ最ふ八ッだから七ッ替りにしやせう。勿論旦那と供のあしらひは。たがひに番くるはせなしよやらかしやせうぜ彌次しれたとよ（ト云つゝあたりに竹壹本をさいかくし。彌次郎が荷物を北八が包みを両方に縛り付て）北八先づ年役にお前へ旦那よ。おいちゐ上下と云ものを出掛よふ。ナントよつぽど氣がきひて居るだらう（ト跡から荷を引かたげて）北八モシ旦那へ彌次何だ北八能天氣で御坐り升彌次ヲヽサ風がなぎで暖たかだ北八左樣で御坐り升（ト かりに主じうの。如く打あたりつゝ行程に早くも大福村。安中村を打過て。町屋川に差かゝれば。彌次郎兵衛取あへず）

○彌次之白粉好今不始温飽粉尚愛之

旅人を茶屋の暖簾に招かせて
登り下りを待屋川かな

斯打興じて。名尾村おふけ村にたどり着。此邊りも蛤の名物旅人を見掛て火鉢の灰をあふ沢。立〳〵女お這入なさりまアせ。諸白もお飯も御座りまアす。お支度なさりまアせ〳〵駕やかゝ駕いかまひかいな。是から二里半の長丁場じや。安うして召ぬかい彌次イヤ駕は入らぬ駕跡の親方旦那を乘せ申して下んせ。戻りじや。やすめに北八旦那いおひろゐがおすきだ駕そふ云ずとモシ旦那安うしてやらまゐかひな彌次安くていやだ。高くやるゐら乘やせう駕そしたら高うして三百いただきましよかいな彌次いやだ〳〵もちッと

高くやらねへか駕ハアまんだ安ゐなら三百五十で彌次壹貫五百斗なら乘てやろふか駕エ、めつそふあわしども、商賣冥利。そなゐよ。やつとい。いたゝかれませぬ。せめて五百で召て下んせんかゐ彌次夫でも安いからいやだ駕ナアニ安ゐこんではあらまい。そしたら別れに七百くだんせ彌次イヤ〳〵面倒だ。何かなし壹貫五百よりまからぬ〳〵駕はて偖てまつたもんじや。夫よりちつともまからまいか彌次まからぬ〳〵駕エ、何の事じや。駕かきの方から。直下ると云はめつらしい。まゝよ棒組壹貫五百でやらまゐかい。サア旦那召ませ〳〵彌次夫で好か高く乘でやる替りに酒手をあつちへ貰はにやならぬが。合點か駕上ませずとも彌次そんなら先へ行て壹貫四百五十文こつちへ酒手よ差引て殘五十の駕賃だが夫で承知かどうだ駕エ、そんあこんで。あらず。とひやうもない彌次そこで先緣切だハゝ、北八こいつは旦那が出來たく〳〵

旅人を乘るつもりで駕かきの。高ゐ直段にかつがれに計利

斯て朝飼川松寺を打過。富田の建場に至りゐるよ。爰は殊に燒蛤の名物。兩側よ茶屋軒を並べ往來を呼立る聲に引れて。茶屋に立寄腰を掛ると女お早やう御坐りまし(ト茶を二ツ汲

○此邊ノ女房皆ナ嫉妬何

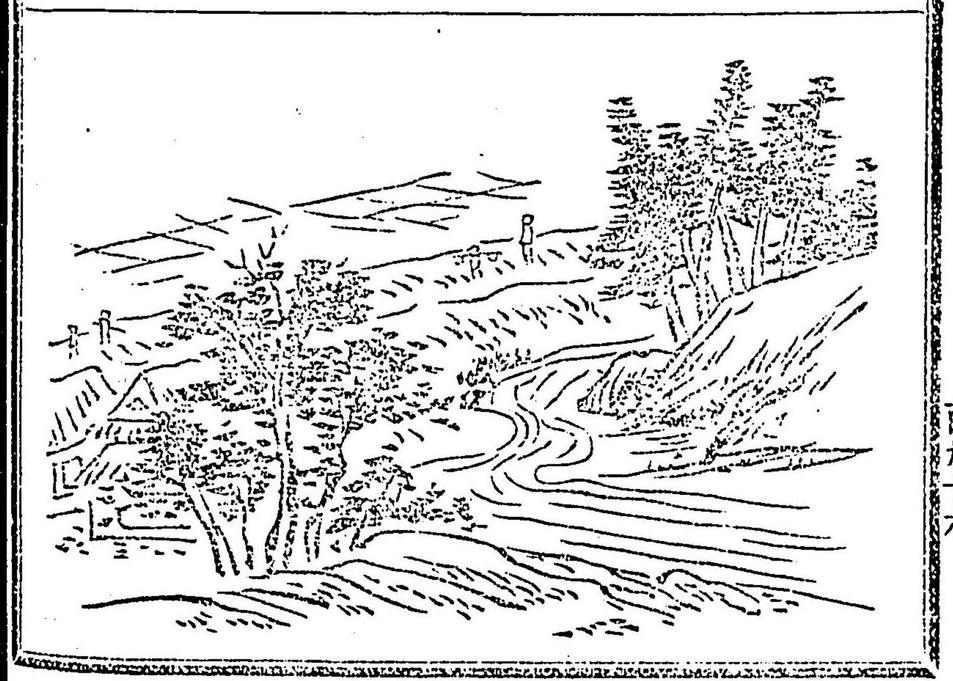
百九十四

て來る。彌次郎へ差出す。彌次郎ハ旦那のつもりゆゐ草鞋のまゝ茶屋の板の間にあぐらをかきて)北八支度は好か(北八も約束あれば)宜しう御坐りませう。コレ女中お飯を二膳出してくんあ女ハイ〳〵(供の氣どりにて蛤でお上りあされやそか彌次イヤ箸で喰やせう女ヲホゝ〳〵(ト箱にした。いろりの樣な物の上に。蛤を並へ松笠をつかみ込あをぎ立て燒く内)彌次コヤ酒ハ好のが有かの。玄かし諸白でハなくて片白にはこまるそして江戸じやァ厚味へ物の喰飽して居る體だから。道中の物は。ねつから喰ぬ馬よ乘バ浮雲し駕ハ頭がつかへる。店の者共がお宿の駕をお連らせあさるがよふ。御坐り舛と。言居たが。成程そうすれバよかつた。ぶせうして乘ば乘ものゝもふ〳〵道中駕にハ。わさはてた北八是からあるゐて行ふ善草履があらば買てくりや。ハさつけぬ草鞋でコレ見や。足中が豆だらけに成た北八ほんにあァ今日初て草鞋をおはきあさつたから古ひあかぎれが再發した彌次とんだを云是ハあんまり足が。やはらかだがら草鞋の紐が陰へ込だのだヤ。時に。蛤ハ女ハイ只今上ケ升(ト大皿よ燒蛤をつみかさねて出し飯を二膳持來てすえる)北八コウ彌次さん見ゐせへ色男ハ違つたもんだろう。コレ〳〵こゝの娘かお前への飯は些と盛ておゐらがのは此通り山盛。餓鬼道の一里塚と。云もんだ。アゝ厚味〳〵彌次へゝべらぼうめアノ娘が杓子當りの能のを。ほれたの

燒蛤也

事見ニ老子一

だとうれしがるもおかしい。ソリャア手めへをやすくするのだは北八なぜ〳〵彌次すべて此街道では上下の者や供の者へは飯を山盛にして出すと云とだ。夫だから他が目よりもれれい旦那手めへいお供と見へるから北八ハアそうかいめへましい彌次ハヽヽ蛤をもつとくんなせへ女ハイ〳〵（ト又燒立の蛤大皿ゑ盛て出す）彌次れ前の蛤ならなほ味かろふ（ト女の尻をちよいとあたる）女ヲホヽヽ旦那様は。ようかたへてじや北八おれもはたへよふ（ト同く尻をつめ）女コレよさりにかゝれば んせすかぬ人さんじや北八どうでもかいらを〻安くしやアがる（ト ぶつ〳〵こゞと云ふ内あたりの寺の鐘がゴヲン〳〵）北八女中あれは何時だへ女最ふ七ッで



御座り升北八しめた〳〵約束の通り。是からおれが旦那様だコリャ〳〵彌次郎兵衛おれは最ふ馬にも駕にも乘あきた。是からそろ〳〵ひろあるせう。いゝ草履を買て來やれ。はき付ぬ草鞋でコレ見や。豆中が足だらけだ彌次馬鹿を云成程手めへは。足だらけだ。一つの足がいくつにも割て居るから北八イヤ旦那に向つて手前へとは何の事だ。此荷物もそつちにやろふ彌次ハテ現金な男だ。ヤアそつちに置やれ北八イヤそういなら ぬ（ト つきけるを。彌次郎兵衛突屁す。はづみに蛤を盛てある皿とひつくり翻を拍子ゑ。燒蛤が彌次郎兵衛のふところへひよいとはいると 蛤の汁が翻てアッヽ〳〵北八ドレ〳〵（ト懷中へ手を入て蛤を押へ）北八アッヽ（ト取落せバ。蛤膏の下へ落る北八狼狽て彌次郎が股引の上から金玉と蛤を一所に掴む）彌次アヽアッヽヽコリャどうする。金玉がこげらア（ト云うち股引の前の合せ目を潰げると蛤いばつたりと落る）北八ハヽ〳〵先は御安産でお目でたい彌次しやれ所じやアねへ。とんだめにあつた女おけがい御坐りませぬか彌次けがハせぬが。まだ腹の内がぴりぴりする北八ハヽ〳〵〳〵

膏藥はまだ入らねども蛤の。燒どに附てよむたばれ歌

夫より此所を立出。初村八幡を打過。七ッ宗あくら川に至りし頃。四日市の宿引出向ひて

○自二蛤一方一入二于懷一彌次雖モ貝ト悅可知ル

是はおはよう御坐り升私しお宿をお頼み申上升彌次わつちらァ帶屋へ行やす宿引イヤ今夕はお大名樣。お二頭お泊で帶屋は両家共。お差合ひで御坐り升から。私方にお泊下さりませ（ト云はうそ也御小身樣のお泊で下宿は。わづかなれ共夫を云たて宿）彌次そんなら引我方へ泊んとの計略あり。二人共ぽんくらなればまとと思ふて貴樣の所いくらで泊る宿引ハイ夫はいかやう共彌次夕へは宮の斧屋に泊つたが。とんだ叮寧にした。百五十で燭臺を附て飯を喰せるが。そして酒も菓子も出したから。コリヤアだまつても居られめへと別に茶代を二百遣るつもりの所やつ張やらんだから大きに安かつた貴樣の所も其つもりで馳走するがいゝ宿引かしてまりました（ト段々咄ながら打連て行ともなしに四日市の棒鼻にいたれば宿引かけだして）サア是で御坐り升。コレお泊樣じや（宿の女房）おはやうお着なさいまし（ト挨拶の内二人は草鞋をときながら見廻せばいたつてむさぐろ敷宿にて入口）亭主今よすゝけかへつて横にいがみたる膳棚とこわれ掛りしへッついのある内なり）晩は私し方も込合ましたお氣の毒ながら與のお客と御一所よなされて下さりませ彌次ずいぶんよしさ女房左樣なら是へ（ト案内して奥の間へ連）彌次御免なさい田舍者お早う御坐らつせへた北八アゝ草臥た。ねいとあな宿女直にお風呂に召ませ御案内致しませう北八ドリヤお先へ參ろふ（ト手拭を提て湯に行く此内十四五の前髪風呂敷包の箱を提て）お烟草を入ませぬか。楊枝はみがきお鼻紙は宜しう御坐り升か田舍者久しぶりて吉田の大竹へ。のたり込でお出に淺柄の烟草貰ひおつたが。皆吸て玄もふた（今一人田舍者）四文粉はあらまいか商人ヤイ夫は御坐りませぬ。是をあがつて御らうじませ田舍ドレ〳〵パッ〳〵〳〵ありやねつからたわいがない。こつちらのは。どうじやい（トさせるにつめてすつぽ〳〵）商人夫がよふ御坐りませう田舍イヤ是もねから火の附ぬ見やんせ吸てゐる内消らかいた商人ソレあなたの膝ゑもえており升田舍ヤアコリヤ〳〵大事の着物を燃らかいたブッ〳〵イヤこなひよ膝の焦る烟草はいらない持いかんせ商人ハイ左樣なら（ト小言云ながら出て）北八サア彌次さん湯に這入らねへか宿女あなたお召なさりませ彌次イヤ大分あだあやつらがちらつくぜ（北八小聲に）今のやつを風呂場で。ちよひと契つて置は早かろふ彌次ソリヤほんとうにか。どうして〳〵北八おれが湯に入て居る所へおぬるくは御坐りませぬかと。云てうせおつたから。直にそこて約束した。まだ一人いゝ年増が見へるからおめへ湯に入て待て居あせへ。大方そこへ來るにい違へはねへからそこで口を掛るがいゝ彌次承知〳〵ドレ入て來やせう（ト彌次郎は湯に入及壹人り商人）ハイ燒酎は入ませぬか。白酒あがりませぬか北八ヲット其燒酎を少し〳〵くんな。ヲト

ゝ〳〵よし〳〵（ト禁院につがせて銭を拂ひの撓間を足に吹き）よし〳〵是で草履が安さるだろう。どなたも御免なさい。ヤアゑいとこな（ト横に寝掛る北八彌次郎の湯に入て女のくるめを待てども一向にこず。手足のゆびを一本〳〵に洗ひてしばらくの内。待ぼうけと成り餘り長湯をして湯げよ上り。風呂場のはめにもたれて。ぐにゃりと成居る。北八は余りに彌次郎が長湯あるゆへ風呂場へ聊さに來たり此体を見て（ヤアヤ〳〵彌次さんどふした〳〵コリヤ大へんだ（ト彌次郎が顔へ水をそゝき）彌次さん〳〵彌次ヲヽ〳〵〳〵〳〵北八能か〳〵どうしたのだ〳〵彌次どうした所か手めへおれを。ゑらいめに合した北八なぜ〳〵彌次湯に入ながら最ふ女が來るか〳〵と思てあんまり長湯をしたから北八夫で湯氣よ揚つたかハヽ〳〵ちゑのねへ咄しだ彌次手めへのおかげでまだ足がひよろ〳〵する北八ハヽ〳〵〳〵こいつはおゑしいっサア立な（トやう〳〵に着物に引掛け坐敷に遁て歸ると。其彌次アヽ〳〵今少しはつきりしだ北八おめへもとんだまゝたをれてさも力なさそうよ）者だいゝかげんにあがればいゝに彌次イヤおれも手めへの云たとほり大方女めが。來るだろふと待た程よ向ふの流しに彼年增らしいやつが。何か洗つて居るから。コレ背中を流して下せへと云たら。ハイト云て六十ばかりの婆ゝアめがったわしを持て來やアがつておる背中を洗ひませうかと。ぬかしやアがる北八こいつもいゝ（ト夢中になりねはらばつていながら。足のゆびにて跡の方

よねころんで居る田舍者の耳を引張たり向かしこ。もちやそびにする此田舍者とんだ氣のいゝ男にてそつと脇のほう（顔をよけると）北八夫からどうした彌次聞てくれ。おれもあんまりごう腹だから。いまく〳〵しい婆ゝアめだ。たわしを持てどうしやアがると云たら。ハイ〳〵とぬかして引込だが。頓て又廊下の折たのを持てうしやアがつた。是でお背中の垢をこそげおとして上げませうかと。おれを鍋か釜のように思つていやアがるそうな。いまく〳〵しい北八ハヽ〳〵こいつはでかした〳〵（ト夢中になつて又田舍者の頭を足にてさがし廻し耳をいぢり掛ると。こちらへ來て北八が足を取て）田舍コレ〳〵最前からだまつておれば。なんぜ此足でわしが耳をなぶり者にさつせへた（ト云はれて北八心付て）ハイ是は御免なせへ田舍インニヤ偖御免では承知ならまいわい。夫もこなさんが夢中にならせへて咄しさつせる。手そぶりにやアあらまいとでもないが。こつちで頭を除ようとすると。又足でさく回いては。なぶりものにさつせる。なんぜ人の頭ア土足に。つゝ掛さつせへた。すまおいく〳〵彌次ンリヤお氣の毒のとだ御免なせへ。此ようにお合宿するも他生の緣とやら。どうぞ了簡してやつて下さりませ田舍あんたが。そふ云はつせりやア。聞かまい者でもないが。あんまり人を馬鹿よさつしやるから北八イヤ最ふ生酔だから。堪ゑしてくんなせへ田舍イヤまんだ。おゑさん

○一休問答ニ曰ク上ル足ヲ曰フ二下戸ノ足ニト如何ン

はわしどもを馬鹿よさつせる。最前から見てをるに酒も呑ないで生酔ひとい猶しやうちならまいわい北八はてわつちは。酒ん呑やせぬが。此足が生酔だから田舎ナニ足が酒を呑もんか馬鹿アつくさつせるな北八おめへ大分あつく成の。足が酔たと云い先刻燒酎を吹掛たから。夫に此足めが酔くさつて。ソレ御らうじろ。ひよろり〳〵。アレまだお前への頭にからかをふとする。コリャ〳〵田舎水よこなさんの足は悪い酒じや北八左樣さ足い下戸の足が能う御坐りやをわつちはまとにこまりはてる田舎そんなら能ふ御坐る。最ふ寢まらかいか。女中〳〵寢床ろを頼升（ト此内女きたり夫〳〵に床を取ぬかすと田舎者二人い。そこへころげるや否や。前後も知らず。）そう〳〵と高いびき。彌次郎北八此女共に小當る文句も樣々有ど。此所と飯時の酒落いぐつとはしよる女共は床を取てしまい勝手へ行と彌次郎小聲に成て）北八〳〵實に手めへ先刻の女と約束をしたか北八しれたとよ然してつちへい來ぬつもりだ。此つぎの間の壁をつたわつて行と。いき當つた所の襖をあけろ。そこに寢て居ると云居たから。今に行ねばならぬ彌次おれが先へ行てやろう北八そねまをと。早くねあせへ（ト後ろを振向てね入ま）ねずる。彌次郎も北八がじやまをしてやらんと。ね入し振して考へてゐる内二人共。旅ずかれにや思はずそや〳〵と一ト寢入し。しばらくすると。彌次郎ふと目を覺し見ればあんどう消て眞くらがり。あたりもひつそり。しづまりたるよ。自分はよしとぬけがけし北八に鼻あかせんと。そつを起き立。さし足にて次の間に出。兼て聞置たる通。さぐり〳〵壁を

つたひて行内。彌次郎兵衛余りに手を上へのばしたるにや。釣たる棚板よ手がつかへると。だうしたはづみやら。がたりといつて棚が（ト両手を棚よはずをたると見て彌治郎大きよ肝をつぶし）おいつはへんちきだ。あんまりおれが手をのばしたから棚板がはづれたそうな。手をはなしたら。落るであろふし。何かがらくたが。しこ玉あげてゐる樣子落たら皆なが目を覺すだろふこいつい難義ゐ目に合た（ト両手を棚よつゝばつて立てゐても孫からつまらず。手をはなせば棚が落る襦袢一ッで寒くは成るしコリャなさけゐい目に合たどうぞ仕樣い無いかと。立はだかつて考て居内。斯く共知ぞ北八も目ゐ覺しおき出。是も段々壁をつたひくる樣す）北八かく〳〵北八誰だ彌次さんだの彌次コリャ靜に〳〵早くこゝへ來てくれ北八何だ〳〵彌次是を島渡持てくれこゝだ〳〵北八ドレ〳〵（ト手

を延して。何かはしらを落かゝつた棚の下をおさへると、彌次郎ハ（コリヤ）彌次さんどそつと手をはなし北八に持せて脇へはづしたるに北八おどろき（ヤアヤア）コリヤ情ないめに合せる（コレ）彌うするのだ（ト手をハなしそうにする）北八（ヤアヤア）

次さん何所へ行ア、手がだるく成コリヤ最ふどうする〳〵（トうろ〳〵して居る。彌次郎はくらまされそろ〳〵と先の方へ。ゆきこし壁をつたひて勝手の方へ出るに。庭の向に見ゆる有明の火影ほのかに透して。見れば、ばかの行當の襖の傍に一人ねてゐる者あるゆゑ。偖こそ北八が約束の代物しめこの兎といきおりに手を進てさぐりみれば。こはいかに石の如くのへこをりし人たをれ居たり。さあがら生たる者共見へず。是れふしぎと。こは〳〵撫廻せば荒ごもにくるみて有ゆゑ彌次郎ハつとおどろきにはかゑきみが悪く成て。がた〳〵とふ彌次北八まだそこるゐ出しやう〳〵に。北八が居る所（這戻りはの根も合ぬ探へ處にて）

ゑか北八ヲヽ彌次さんふめへ何所へ行た。コウ島渡こゝへ彌次イヤそこ所ろでは、ないゐそこに死だ者へ蓆が掛て有から最う〳〵うそ氣をの悪るひ内だ北八ヤヽとんだとを云ふ彌次ナニサ本とうよ。アレあそこよア、とんだ内ゑ泊り合せたおそろしや〳〵（トそう〳〵ゑ這出し）北八是々〳〵おれをこゝに置てどうするエヽ夫にとんだとを云アがつて。どうやにげ行）ら氣みが悪く成たコリヤたまらぬ〳〵（トがた〳〵振ゐる柏子に。手がゆるみて上の棚がぐゐら〳〵。こりやかなわぬと。北八逃出せしが。うろたへて戸まどひをし。一向わからぬまごつく内。此物音に勝手よりは亭主の聲としてあんどう提て出くる樣子。奥の間よりは田舍者が出てくるていゆゑ。愈々うろたへ。見せの方へ這出る。手元に蓆一枚有しとさいはい引かぶりて）ヤアヤア〳〵コリヤなんぜ棚息をころしかゞみいゐると。亭主あかりを持出てきもをつぶし）

が落た。膳箱も何もらりこくたいに成た（トそこら取片付る内。何事やらん）ヤレあらい音がせると思ふた。道理こそコリヤ地藏樣の傍に迄箱共が飛ちつてゐるが。ヤアヤア〳〵お鼻が打かけてしもうた今一人の田舍ものドリヤ〳〵〳〵本に地藏樣の鼻ア。なくならかひた。そこらにやないか。イヤこゝに寐て居るい。だれじやい（ト蓆をまくれば北八ははつはこもに包し石地藏有り偖い彌次郎が死だ者の有しと）ヤアこゐさんは。こちへ泊らせへ云しは此地藏ならんと思ひ居る内。亭主北八を見て斗り顔を上て見にそばにたゐ客じやないか。夫に今時分。なんぜ此樣な所ろよ。コリヤ合點がいかんわい。どうじややら。おなさんたちの。おりそぶり。うさん臭いと思ひおつたが。もしや護摩の灰じやないか。何ぞまだ。しよしめるつもりか。有樣に云つせへ田舍イヤ夫斗しじや御座らない。大方こなさんが。此棚を落したもんで。なんぜ地藏樣のお鼻ア打かいたコリヤわしともが村で今度建立せる。地藏樣じや。きんのふ石屋殿から請取て翌日は早々長澤寺樣へ納めにやならぬがお鼻が打かけては持て行れぬ。元の通りまとめつせへ（是は近在の人々村のお寺へ納むる地藏也石屋より持て歸る所おそなわりしゆゑ。今宵い爰に泊）お地藏樣のお鼻もお鼻じやが。お前方のお荷物ると見へたり亭主彌々やつきとなり）何ぞなくなりはせおいか。どうでもがてんのいかぬやつらじや。有樣に云おりまいか北八

○石佛ニ持込ム色氣ヲ所レ謂地藏馬スル者

イヤわしらはそんな。者じやアねへ。めつたゐとを云なさんなしらきてうめんの旅人だ田舍インチ。そうじやあらまい。又夫でなけらにやア。なけぜ今時分そこゐねて居さつせへた北八イヤ是はのウ手水に行とつて亭主蹴けたとをつくさまい。手水場ハ座敷の樣先にある物を定めし。宵にもいたであろゐ。そおれな間似合は喰せんヨい北八　そう云れちやアわつちも面目なねが恥を云ゐやア。理が聞へぬ。有体ゐ云やせう亭主ヲヽサ。云いでどうせるもんじや北八イヤどうもおはづかしいが。今頃わつちがこゝにまで附ておつさと云ふわけは。ツイ夜這にさて此棚の落たに。うろたへたので御座りやす　田舍ナニ夜這ゐきた。イヤ早こなさんはたわけ者じや。何所の國にか石地藏樣の所へ夜這ゐ來てどうせる積りじや亭主云へば云程ろくなとはぬかしおらぬ北八コリヤとんだ災難に合とだ彌次三〈（ト呼び立

る。先刻より彌次郎を立聞して。腹すぢをよりねたりげるが最ふい、時と立出）コリヤア何方もお氣の毒ゐ。ありやアわつちが請合。うろんな者じやア御座りやせぬ。了簡して遣てくんなせへ。又地藏樣の鼻どやらがかけたと云ゐさるが。どうぞわつちに面じて跡では何共致しやせう（ト色〈茶らくらと斷を云ちらし。亭主も今は詮方なくさながら惡者共見へぬ手合一ト通は云た者の今はなつとくして遣しければ）

這かけし地藏の顔も三度笠。またかぶりたる首尾のわるさよ

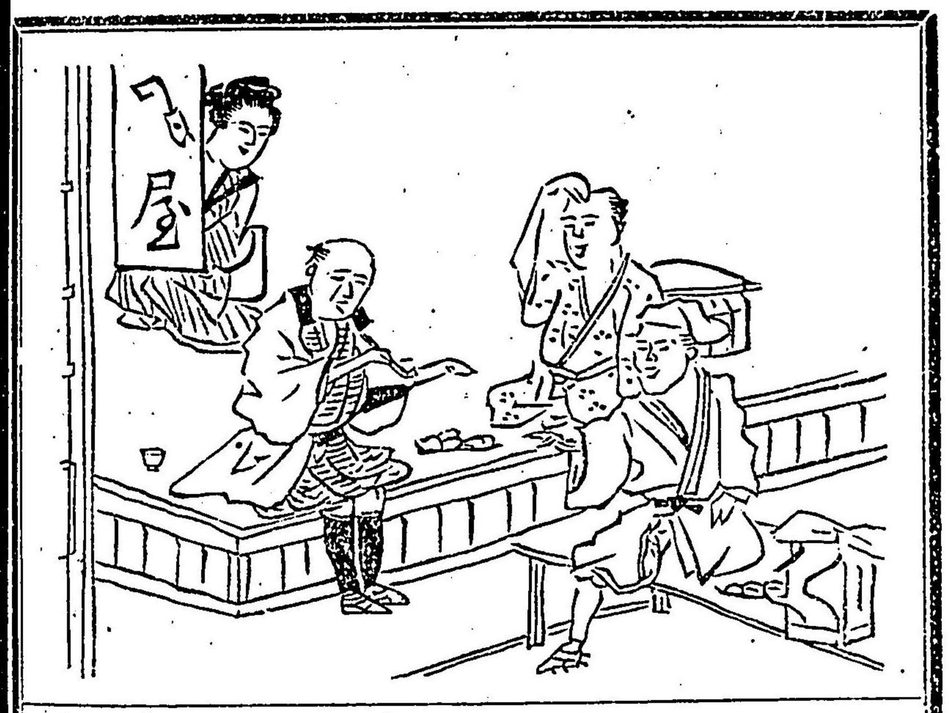
斯即吟の彌次郎兵衛が。狂哥に各々どつと笑ひを催ふし。やう〈いさくさ納まりけるにぞ。いまだ夜の明るゐハ程もあらんと。各々寢所に這入りたるが。しばらく有て早一番鶏の告げ渡る聲々馬のいななき。表に聞へ彌次郎北八急ぎおき出で支度調へ頓て此宿を立出るとて

やう〈と東海道も是からは。花の都に四日市なり

夫より。濱田村を打過。赤坂に差掛りたるに。往來殊に賑はしく。男女大勢こゝかしこにつどゐ集まりたるは何とにやと彌次郎兵衛北八も片寄り行つゝある親仁ゐ向ひて彌次モシ〈何で御座りやす　親父あれ見さつせへ　北八喧嘩でも御座りやすか　親父インチ天蓋寺の

蛸藥師樣が桑名へ開帳に行しやるので。今こゝを通らせるから　彌次ハヽァなるほど向へ見へる〳〵（ト此内段々人足繁くあり。講中とおぼしく眞先に村の名を染たるのぼりをおし立。何れも大聲にて）講中　おァまァだァ〳〵　北八蛸藥師樣ァ湯でたのじやァ　講中　なァまァだァ　彌次のぼりを持て行くやつの面ァ見さつし知惠の糸を面だぜ　講中　お賽錢は是へ〳〵是い海中よゝ芋畑へ出現ん し給ふ所の天蓋寺蛸藥師如來御信心の方いお心持次第上さつしやりませう。サァ〳〵お心持は能ふ御座り升かな　北八今朝程は中がさで三膳程たべました　彌次ソリャ蛸殿が御坐つた（ト此内みづしに入たる。藥師如來大勢にてかつぎ通。跡より天蓋寺の和尚。）若侍　お乘物まて來るとこゝかしこにあつまりいる婆々嬶共十念をねがいけるに（ト云と乘物をおろす。若侍駕の戸を。引あげれば和尚は湯で鮒の如き）なむあみ十念〳〵（ト云と乘物をおろす。赤ら顔にて。大あばた髭だらけのでつくり和尚さもしかつべらしく）皆々　南無阿彌　和尚　南無阿彌　皆々　南無阿彌（和尚南無阿彌と段々となへ。十念の仕舞にどうしたはづみから鼻の穴がむづ〳〵とし）和尚ハァくつしやみ（ト云と皆々十念の跡ゆゑ）皆々ハァくつしやみ（和尚小聲よて）糞をくらへ　彌次ハヽヽどんた十念だ。アノ和尚ハ。くつ沙彌から長老だ。ハヽヽ　講中　なァまァだァ〳〵（ト さゝめき立て行過る彌次郎北八ハ　おかしく跡見送りながら）十念をもふしあがらの口慰は。有たち口に風を引せじ

斯よみ捨て打興じ行程よ。早くも道分に至る。此所の茶屋まんぢうの名物あり茶や女お休みなさりまァせ。名物まんぢうの。ぬくといのを上りまァせ。おぞう煮も御坐りまァす　北八右側の娘が美しいの　彌次鯉屋の小ぢよくめらも相きやうらしい（ト茶屋に這入腰を掛る）女　お茶上りませ　彌次まん中もやらかして見よふ　女今上ませう（ト頓て盆に盛て來る此内金比羅參りと見へて布子の上よ白き單の半天を引張たる男同く此茶屋に休み煎餅を喰掛る彌次郎まん中を喰仕舞ひ）もつと這ろふか。幾位でも這入やうだ　北八イヤお前へも雨風どうらんに能かげんにしなせへし　金比羅あなた方ァお江戸かあ　北八左樣さ　金比羅私しもお江戸へ行た時。本町の鳥飼のまんぢうを掛とくして廿八喰たまとが御坐りましたが。又格別の物じや　彌次鳥飼ハ。わつちらが町内だから。前日茶受に五六拾宛ば喰やす　金比羅夫ハ。ゑらいおすきじや。私しも餅ずきで御らうじませ。此ぞう煮をいき無し五膳たべました　彌次わつちやァ今こゝのまんぢうを十四五も喰たろうか。まだ其位はいけるだろふ。ねつから喰たらぬ樣だへ　金比羅イヤ然し悪あまひ物は最う其樣には上られ升まい。十四五もあがりやァ關の山だ　彌次ナニまだ喰やそ　金比羅どうしてくあるた口ではそうふつしやるが其樣まは喰ぬ物じやて　彌次ナニ喰ぬとが有ものだ。しかし貧だか



ら喰やせぬが誰ぞ喰せると。まだ〳〵いくらでも這入やす　金比羅　コレハ面白いモシ無躾乍ら何と私しがお振舞申ませう。もう大丈上つて御ろうじませぬか　彌次　喰やせう共　金比羅　若し上らぬと。あなたのふたをれじやが能ふ御座り升か　彌次　そりやしれたとさ（トかつよ乘てまんぢうを取寄て喰掛りしが十斗り喰て跡はもふおくびに出る位なれどおのれ金比羅鼻明せてやらんと）むりに押込み皆喰て仕舞ふ金比羅參）　コリャたまらぬゑらい〳〵もう〳〵私しは。かあいませぬ　彌次　おめへもやらのしてをあせへ。こんなちいさな。物はいくらでも喰れる　金比羅　イヤそうは參りませぬ。然し私しも餘り殘念な。十を斗り喰て見ませう　彌次ナ

二十ヲ位二十喰おせへ。其替り一ッも殘さず喰あすつたならば。まんぢうの代は勿論外よ百文金比羅様へお初穂を上やせう　金比羅そりゃ有難てんぽの皮。遣て見ませう（ト饅頭廿取寄せ只もじ〳〵と見て斗りゐたりけるが頓て喰掛るとぽつり〳〵十を斗喰て仕舞跡はいやそうな顔付にてやう〳〵と殘らず喰て仕舞ふ彌次あてが違ひ）コリャ恐れる〳〵　金比羅　お約束の通饅頭代は差引てお初穂の百文下さりませ　彌次　今上やせう。然しあんまり見ごとだから。もう二十喰なせへ。今度はお初穂の三百文あげやせう其替り喰ねへと。こつちへ三百取つこだがどうた〳〵　金比羅　面白い〳〵何も欲徳服のさける迄遣て見ませう　彌次　サア〳〵今度ハ現錢だ。御前へも貳百そけへ出して置さな（ト彌次郎三百文をとられたお初穂の百文に利を附て取氣ゐなり。よもや。もう喰はれめへと思ひ込で。饅頭をまた〳〵二十取り寄せ金比羅へすゝめるやいなや。此度ハ何のくもなくたちまち二十喰て仕舞ひ早くかの）　金比羅　是は有難い饅頭の代も宜しくお納中升。ハヽヽヽ思ひ掛なき三百文を着ぶくして）ね御ざうさゐ預りました。ハイゆるりと是に（トお神酒箱を脇なにふひ。跡をも見ぞして）北八　ハヽヽ大方こんなとになろうと思つた　彌次　いま〳〵しい。目に合しやアがつた。初めの百がおしく成て上乘をした。ぞう腹な（ト此内下の方より駕かきぶら〳〵と來り）旦那方はお駕ハいらしやりませぬか　彌次　駕所じやアねへ。ゑらいめに合た饅頭の喰でつてをして。錢三百只取ら

○伊勢参り預ニ金比羅ノ利生ニ

れた駕かきハヽア今の金比羅めじやな。てきめはあないか。ふうをしてあるさをるが。ア
リヤ大津の釜七と云ふらい手づま遣ひじやげな。今中も坂のしたで餅の喰くらで。七十八
どやら喰たと見せて銭は人に排はせ餅をば皆な袂へさらひ込でうせおつたと云こんだが
旦那も一盃はめられさつせへたのハヽ（此咄の内伊勢参りの子供二人饅頭を三ッ四ッヽ手に持て喰ながら此門口に来り）ハイ旦
那様ぬけ参に御ばうしや北八コレ手めへたちやア其饅頭を能に貰た伊勢参ハイコリヤ此
跡で金比羅参の人が袂から出してくれました　彌次エヽそんゐらあいつめが。喰らつたと
見せやアがつて。おいらをだまくらかしやアがつたか。いまくしい。おつかけて。打の
めさふか北八能いなをいらも神参りだ。かんにして遣りなせへ。皆なこつちが間ぬけだか
らよ。ハヽく彌次夫だとつて。あんまり業が煮へかへる北八夕べの泊でをれをゐらいめ
に合した其報いだと思ひなせへ。ほんよ能ごうさらしだ
盗人に追分なれや饅頭の。あんの外なる初穂とられて
彌次エヽ面白くもねへ。酒浴やんゐ。もしくまんぢうの代はいくらだね女ハイく殘ら
ずくて貳百三十三文で御座り升彌次せうとがねへ（トふせうくゐ銭を拂ふと駕かき）旦那まん直しに安

く召て下さりませ彌次いやく駕かき酒手で参りませう彌次貴様酒を呑の駕かきハイ酒
いすきで一升酒を下さり升彌次又酒の呑くらしようと思つてか。もういやだくサア北
八出掛よふ（トこれより伊勢参宮道へ這入）○神風や伊勢と都の分れ道なる。道分の建場より左りの方の
町をはなれて。野道をたどり行程に。向ふより来る農業の馬ゑ横乗したる男肝張農にて頃
見てもぬくとそふなヨお方と寐たりや。ナア手織布子一枚ねつまにつんぬけた（アヽヽエ）
彌次コウ見さつしアノ向から乗て来る馬士をゐろして見せよふか（トこれより横）晩ゑ
袖を前の方へ折て刀の柄に持添たるていゑ見出して差し。合羽の又向より横乗の馬士
掛て行と。馬士頓て馬よりちやつと下て行彌次ナントどうだく
泊りにヨ。いことてやめたナアなんぜ行やらぬ裸でお方に逢りよかへナアエヽ彌次てい
つもおろしてやろうエヘン馬士シツく（トにいかにうろたゐ下て行過る）彌次北八どうだ奇妙か北八二
本差を見ると乗打の出来ねへこたア皆しつて居らア彌次夫だからおれを侍だと思ひおつ
て北八馬鹿ア云ぜ跡を見なせへ侍が二人り来るから彌次エヽゐんにか（トふりかへる拍
たり）彌次ハイ是は御免なさいやし。神戸へは最ふとれ間ゞ御座りやすな（此侍衆は此邊の郷士と見へて。）
ソレ向ふの堤からずつと空へあがらせると。もう半道もあらずになる彌次ハイ有難御座り

やす北八堤から空へ上れたァ。何のおとだ蝮が天じやう。しやァしめへし。ハヽヽ時に此川は何と云川だ橋番ハイ橋錢が貳文宛出ます。此川は宇都部川と云升彌次ソレ貳文宛。四文よ

扨參りおらばぶさをも宇都部川。渡しの錢も假橋にして

夫より高岡川を打渡り。早くも神戸の宿に至る。入口ゝ寶珠山火除地藏堂有り

安穩に火除地藏の守るらん。爰のあつさも冬の神戸も

斯て此宿端れある茶見せゝ寄て休居たるに馬士モシお前方ァおまに乘て下んせんか彌次

いか樣戻りなら乘べい馬士上野迄戻る。おまじやわい。荷を付けて貳百五十下んせ北八二

方荒神で百五十遣るべい馬士今日は枠を持てこんわいの。爰から上野迄三里の所じや。白

子へ壹里半替りやつて乘ていかんせ彌次二人乘れにやァ。いやだァ馬士そしたらお二人

り共。おまの鞍へくゝし付けていこまいか。此繩でしめりや氣遣ひはないがな北八とんだ

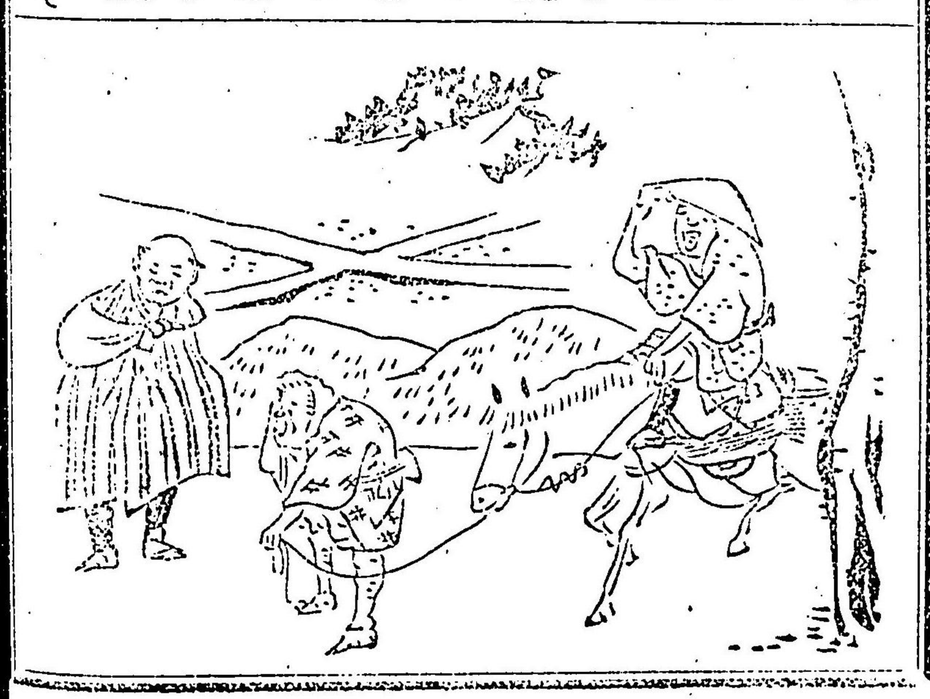
をを云。夫じやァ煙草も呑れぬ彌次そんなら替りくゝ乘ふ百五十でやるか馬士まゝよか

し。やらかしましよ（ト馬のそうだん出來て二人りの荷を付け此所より先北八乘て出掛る）彌次ふらァそろくゝ先へ行ぞ。ソ

○馬士奈ニ此ノ鬼鹿毛ノ

レ北八右の方へかしぐ樣だ（馬ヒイン鈴の音しやん〳〵〳〵）（此内向よりきたる男。細縞のせんたくしたる引廻しを着て錢壹貫斗差子の古き風呂敷に包を肩ゝ引掛け草履掛にて來り此馬士を見附て主がとこへ行た戻りじや。えいとこで行合た（馬方長太）ハァ權平治樣かいな。コリャ扨わしや面目がゐいがな權平あろまん〳〵。あろ筈がないわい。嘸日〳〵に戻ら筈を。まんだ。びたせん壹文もいおさんがな。どふーさるのじや。ソレ聞はい馬長マァくこちへ來て下んせ（此馬士借金のとわりと見へて。かの男を日當りの能きさ所へ伴ない。おのれも土手の上にゆうくゝと腰打掛だんすゐ。マァ爰へ腰掛けさんせ。イヤそこのねきには。犬の糞がある今日おいでると。しり居つたら。そうぢして。おこものコリャくゝ權平樣へ茶など上んか。酒かふてこいと云所じやゞ。おゝは大道中で夫もできぬくい北八ヨリャどうする早くやらぬか馬士ハテせはしない。些またんせ。いんま大事のお客がある。偖マァ聞いて下んせ。去年の冬から内の嘸めが病氣を煩らひおつて。がき共ゝは。せちがはれる。雜役にさへ出やせん者を何じやろと。こうしてくだんせ。四五日の内ゝい。ひゆつとこちからもて參がる權平イヤしやうちならんわい。そないゝ云ふても能ふ戻しやしよまいがな。大事無くくゝ最ゝ三年越と云も

の貸た錢じや利に利が喰て二十貫餘りと云ふもんじやもの。いこすな、〳〵その替りあのかまを。取いのかい。ハテおさかの時は。のしがおまを渡すと証文書たじやないか。そしたら云ひ分ありやしよまいがな。サア〳〵おさの上な旦那様いんま開んす通りじや借錢の替りよ。受け取つたおまじや。どうぞこゝからおりさんせ氣の毒ながら北八ハアおいらも先刻にから。じれつ度てならなんだ。ひよんな馬に乘合せたは。こつちの不仕合然し、まだ錢は遣らず。是迄乘たを徳にしてドレおりて行やしやうか（トかの權平よ口を取らせて馬からおりると馬士かけよつて）セシ旦那お前がおりては此お馬を取れる。マア乘て



居て下んせ權平イヤならんわい馬士ハテどないにもするわいの。旦那をおろしては氣の毒な。サアサア召て下んせ北八又乘のかしつかり頼むぞ（ト北八又馬に乘ば）コリヤ〳〵長太どうしさるのじや旦那おりて下んせ北八エヽ又おろすのか。イヤ貴様たちやアおれをいゝちやうさい坊にする。下したり。のせたり。足も腰も草臥はてた權平夫じやて。わしがおまじや。どふぞかし。おりて下んせ北八エヽ面どうだ（ト小じれがきて〳〵つと飛おりる）馬士長はて偖下さんせずと能がな。コレ權平様おうして下さんせ。わしも途中じや。よしことがなる。せめて内へいぬまで待て下んせ。其替り。こゝで此布子を渡すに權平そしたらいんでわけつけるか馬士長もう能はいサア旦那召ぬかい北八ナニ又乘かもふ堪忍してくれ。おらア是から歩行て行ふ。何ぼら少々は錢を出しても乘とアいやだ馬士長其云んせずと乘て下んせもう能がなサア〳〵（ト馬の口を取てすゝむるゆゑ北八又仕方なく馬よ乘ば）權平サア約束の布子脱まいか馬士長イヤそゐいには云たもの是も内へいぬまで待て下んせ權平イヤおのれ。もう了簡ならんわい。サア〳〵旦那又おりて下んせ北八エヽ此唐人めらア。又下りろとぬかしアがる。もういやだ。サア早くやらねへか。どうしやアがるのだ馬士長旦那そうはやく。おりずと

いゝに權平イヤおりずとゐいとは何でぬかす（ト眞黑になり馬に取つきかける所を馬士つきのけて。馬の尻を思ふさまたゝき立ると。馬は一さんに掛出せば北八上ゑて眞青ゑなり大聲揚げ）ヤアイ〳〵たすけてくれ。コリヤどうする〳〵權平馬をにがしてはならんヲゝイ〳〵（トおつかけるでしやう大事に馬の鞍ゑ取付ても馬はやくもに走るゆゑ北八飛おり樣として鞍の繩に足が引掛りまつ逆さまに落て腰の骨を打かけ付）ア、いたゐ。だれぞ來てくれ（アイタ、〳〵〳〵〳〵）（ト一人もがきてくるしむでいるに。馬方一さんにモシ旦那おけがはあゐか（ドリヤ〳〵〳〵）（ト手を取て引おます内。權平は馬をとらゑんとかけぬける馬方是を見てそふ來りはさせぬと。北八にか）北八ヲゝイまちやアがれ。おれをばひどいめに合しやアがつた（ト小まはずかけ出して行言を云ひながらおきあがり。腹は立ども。詮方なく。おつかけんには足腰がいたみ。やう〳〵の事にて踏しめ〳〵そろ〳〵とたどり行きッゝ）

借錢をおふたる馬に乘合せ。ひんそりやどんとおとされにけり

行程あく矢塲瀬村と云ゑ至る。彌次郎兵衛は神戸の宿端れより先へ來たるが。かの馬のいさくさをば。露しらず余程先へなつたるを。ふしぎに思ひこゝに待合はせたりけるが。夫と見るより彌次ヲイ〳〵北八其形いどうしたのだ北八イヤもう咄にもならぬ飛だめに合た（ト さいぜんよりの一五一十を咄せば。彌次郎おかしく。さいはい）

（此頃い鎌倉の權五郎が古跡ありと聞て彌次郎兵衛とりあへず權五郎あらねど馬士のいつさんに。おつ掛てゆく掛取の海

夫より玉垣を打過。白子の町に至り。福德天王をふし拜みつゝ。子安觀音の。わかれ道にて風を孕む沖の白帆は觀音の加護にやす〳〵海渡るらん

此宿を過て磯山と云るゑ着。此所に。吹矢の色々飾り付けたる。小見世の親父往來を見掛てサア〳〵おなぐさまにやてかんせ。外題は忠臣藏十一段つゞき。ソレ吹んせ。ヤレふかんせお當なさるとたちまち着る。新板の上細工は是じや〳〵北八ハゝア何だ勘平おかる。魂膽夢のまくら。イヤこいつは。やらかをて見よう（ト吹矢筒に吹矢入）ッウゝ引（カチリガツタリ）彌次何だゐらい松茸が出たゴリヤおかしい。ハゝゝゝ興布兵衛子ゆゑの闇の夜は。何が出だろう（フツ〳〵引（ガチリガツタリ〳〵）ヒヤア見越入道ハゝゝゝ。向ふのゝ何だ。北八彼方へ寄やト引のける拍子に足元に寢て居る犬の足を踏む）（犬キヤアン）彌次此畜生め（ト吹矢の筒にてくらはし逃掛る犬ハワント云て咬つく）彌次アイタゝ。うぬ打ころすぞ（トおつかくるはづみに。どつさりとふろげたそばゑ落て有は煙草入）彌次ころんでも損はいかぬ。ゑゝゑ烟草入が（トひろゐゑ掛るゑ向側に居る子供が）ヱゝいま〳〵しい一番はぐらかしやアがつた子供あはうよッハゝゝ北八ゑいつは能業晒しだ。サア行やせう（ト吹矢の錢を拂ひ出掛る向に又きせるが一本落て有ゆゑ）北八夫彌次さん又拾いねへか彌次イヤもふ其手は喰ぬ。アレ跡から

くる親父がひろゐ居るだろふ。（ト行過てふり歸り見れば跡よりくる親父。かのさせるを拾ゐて）彌次ハァふところゑ押込さつ〳〵と行過る）だましでもなかつたそうな北八ハヽヽお目へごうぎゑ間が惡いぜ（ト打笑ひ筒。行程に。頃て上野の宿に至る爰に此邊の人と見へ羽織ぱつちにて小野郎を伴に連たる男跡より來たりて彌次郎兵衛にか付け）卒爾ながらあなた方ァお江戸で御座り升か彌次ァイ左樣さかの男私しい白子の先からあなた方のお跡に付て參じたが道々の御狂詠を承りまして及ばず乍ら感心致ました面白いとで御座り升彌次ナニサ皆出放題で御坐りやす男イヤ驚き入ました。先達てお江戸の尚左堂俊滿先生など當地へおいでゝ御坐りました彌次ハァ成程左樣〳〵男あなたの御狂名い彌次わちゃァ十返舍一九と申しやす男ハヽァ。御高名受賜はり及びました。十返舍先生で御座り升か。私しは南爪の胡麻汁と申升。扨〳〵よい所でお目ゑ掛りました。此度は御參宮で御坐り升か彌次左樣さ彼の膝栗毛と申著述の事について態々出掛ました胡麻汁いか樣あれい御妙作で御坐り升。是へお越なさる道そがらも。吉田岡崎名古屋邊御連中方。御出會で御座りましたろゑ彌次イヤ東海道は。宿々殘らず立寄所が御坐れ共參ると引留られまして。饗應にあひまするが氣の毒で御坐るから。皆すぐ通りに致しました夫ゆゑ御らんの通り態と麁服を着く致して。やはり同者の旅行同樣に心安く何でも氣まかせに。風雅を第一と出掛ました胡麻汁夫はお樂みで御坐り升。私し宅は雲津で御坐り升がどうぞお供致したい彌次おぼし召有がたい胡麻汁まとに御珍客近所の社中共へお引合せ申たい。何れ御一宿をお願ひ申ませう。ァァ〳〵ふしぎの御緣でよい所で御目に掛た。時にこゝが小川と申ところ饅頭の名物一ぷく上りませんか彌次イヤ饅頭にはありはてた直に參りませう（ト打連て此所を行過る迚）から尻の味い名代ゑ旅人に。喰附せんと賣れる饅頭

是から行程なく。津の町に至る前ゑ高田の御堂右の方に見ゆる石井殿といふ是あり

おまな板直しゑ鯉のひれ振い。これ住用姫の石井殿かや

津の入口左りの方の。如意輪観音堂あり。又かうの阿彌陀といへるもあり此所は上方筋より参宮の人。落合ふ所にて往來殊に賑はしく中にも都方の若き人々。小袖の上ゑ揃への浴衣をひつぱり藍者めきたる男女打交りて飾り立たるつゝら馬をひきながら唄（チヽヽチンチンエヽヽ）御座れ都の名どころ見せん。ぎをん清水やれ音羽山ヤアヽとてなア。ヨウいやさア。ありやゝこりやゝ。コノ何んでもせエ引。（チヽヽチン〳〵）エヽヽ引。ぢしゆの櫻にまく打廻し霞がくれにものおもはそる。ヤアとあなア。ヨウいやさア。ありやゝこりやゝコノ何んでもせエ引彌次コウ北八見やごうぎゑ美くしひたばが見ゑる胡麻汁アリヤ皆京都の衆者あおいに。りつぱにしておでやつても。ねつから錢ハつかやせんがな　京人御無心ながら火一ッ貸ておくれんか胡麻汁サア〳〵おつけなさい（トくはへたきせるを差し）京人パッ〳〵〳〵胡麻汁まんだ附んかいな京人パッ〳〵〳〵〳〵胡麻汁何じやお前のきせるにや。烟草がついてないかな。ハヽアきこへた。吸ひ付る振して。人の烟草をのむのじやあ。

モウよさんせ〳〵。ノウお江戸の先生京の衆はあないに。吝ひのねつあじやわい。（ハヽヽ）時ゑ先生もう一ぷく下さりませ彌次京の者を。しはひと云ふがおめへも先刻ゑから。わしが烟草斗り呑で居るでゑ汁イヤ私しは烟草入を持やせんもの彌次忘て出ゐさつたのか胡麻汁ナニわをれもせんが。有樣い全体が。あいのじやわいな其わけは。私しい。ゑらい烟草ずき。一日ゑ拾匁ではたらぬ位じやゆゑ。コリヤ自分でかふて呑ではたまらんと思ふて夫から烟草入はやわて。きせる斗り。もて歩行さおり升彌次そこで人の斗り呑なさるのだな胡麻汁さよじやわい彌次そりや京の人へ。幅輪掛けておめへが。あだじけねへと云もんだ胡麻汁ハアそうかいな（ハヽヽヽ）時に餘程おそなつた。ちと急ぎましよか（ト足を早めて行程なく。月本に至り此邊より烏の宮へ参る道あると聞て）

照渡る秋の月本ならばいき。うかれ参らん烏御前に

斯て雲津に至り南瓜胡麻汁。おのが家に案内するに是もはたご屋と見ゆれど折ふし相客もおく。奥の間に詩じいれ彼れ是ともてあしければ。彌次郎兵衛はあらぬ名をいつわり斯る目にあふも一興ゆりと北八もろとも心の内におかしく。頓て湯にも入仕舞ひゆう〳〵

と座し居たるに。亭主胡麻汁出てコレハお草臥で御坐りましよ。よふこそ。お入り下されました 然し折悪敢此頃は。しけで何もお肴がござりません。夫ゆゑ何も御馳走がでけぬくひが。當所は至つてこんにやくがよ御座升から。マア是でも上ましよと存て申付置ました 彌次 もうおかまひなされるなイヤ御主人此者はいまだおちか付にならぬげゑ 胡麻汁いか様あゑたは北八 私しは十返舎の秘藏弟子一片舎南鐐と申升。ふしぎな御縁でこやつかいに預かり升でゞ汁ナニサどつとぬから。おかまひは申さんじやて。イヤ先生ちトおくつろぎあされまいか 女御膳がよ御坐り升でゞ汁早う上んかん。御ゆるりと召上りませ（ト亭主は勝手へ立て行女膳を持て彌次郎へすへて行）彌次 まんざらでもねへの北八アお前へも先生かぶだ。おとなしくせざアなるめへ（ト此内又十一二斗りの小ぢよく膳を持。北八にすへる。兩人箸を取りて喰

掛り見るに。膳の向よ平めなる皿の中よ大福餅の大きさの如き黒き物のせて出せり。平にはこんにやくを盛。味噌は別に小皿に有り彌次郎小聲よて（ト箸にてつゝき見るに至てかたく。はさめ共うごかず。よく〳〵此皿にある丸ゐ物は何だろう北八 されば何であろふか見れバ石で有るゆゑ肝をつぶし）北八 コリャ石だ〳〵 彌次ナニ石なものか。ノウ女中 女夫は石で御坐り升北八 夫見なせへ 女こんにやくをお替なさりませ 彌次 いか様もう少し（ト ひらを出して女の立て行を待かね）彌次 コウ何と馬鹿〳〵しい。どうして石が喰れるものか 北八 イヤ夫でも喰れる仕法がありやアこそ。出したであろふ。先刻さ當所の名物を上ませうと云たア何でも此石の事だ 彌次 夫だとつてついぞ。咄しにも聞ねへ 北八 イヤ待なよ。江戸で團子のとを石〳〵と云から。大方コリア團子であろう 彌次 ハゝア成程そこもあるよもや本とうの石じやア有まい（ト箸をもつてつゝき見るに。やはり石也是をふしぎと烟管のがん首にてたゝき見ればかつちり〳〵）彌次 どうでも石だ〳〵コリヤどうして喰物だと聞もごうはらだが。どうもねつから合点がいかぬ（此内亭主勝手より出て）是ハ何も御坐りません。宜しう召上りませ。イヤ石がさめい致しませんか。コリヤ〳〵ぬくとゐ石を替て上申せ（ト云れて二人共吃驚せしか如何にして此石の喰様を知らぬと云はれんも。ごつゝらと彌次郎兵衛是を喰たる顔さるな石ももばや宜しう御坐る。偖々珍らしい物を賞翫致しました。江戸表ゐどで折ふ

○喰ニ美味一賞翫曰ニ於石一語始ニ于此一

○石喰報ヒ掻ヲ痒ヲ恥ヲ

し小砂利を唐がらし醤油で煎つけるか又は煮豆などの様に致してたべるとが御坐り升。夫に又石搭ゐども嫁をいじる。しうと婆あどよ。喰せたが纏だと申してたべ升るが。私も隨分好物で御坐り升。今度府中で逗留致した時。馬蹄石を泥鰌煮にして。振るまはれましたが。ッイ私し四ッ五ッたべました所にお聞あさい腹がおもく成て起ふとした所が一向たゝれず。仕方なしに兩方の手を棒しばりの様に致してかついで。貰つてやう〳〵と手水よ行やした。御當所の石ころは。かくべつ風味も能ふ御坐りやすから又たべ過たらば御やつかいに成るだろふと存じてお氣の毒で御坐りやすごま汁ナニ其石を上りましたか彌次たべました段かごま汁ヤイ夫はめつそふかいな。石を喰ると云はけしからんお齒のお達者あとで御坐り升。然し燒どはなさりませんかいな彌次夫はなせゐごま汁イヤあの石は燒石で御坐り升。すべてこんにやくといふ物は。水氣の取れぬ物で御坐り升から。あの燒け石にて。ふたゝきなさると水氣がとれてかくべつ風味がよござり升。其爲の燒石で御坐り升。あがるのでは御坐りませんわいな彌次ハヽァ成程〳〵聞へましたごま汁マアそうしてあがつて御覽なされ。コレお鍋よ石がぬくとなつたら持ておんかい早う〳〵（ト此内皿に石

○此一句九一不レ出

の燒たるを乘て女持出ひき替て行く彌次郎北八亭主が言葉の如くしてかのこんにやくを件んの石に打つけ見るにシウ引と云て水氣取れたる處を味噌を付てくらふ風味かくべつかろくしていはん方なし）彌次まことに珍らしひお料理御仕法かんしん致しました。そしてかやうに同じ樣な石が早速よ能く揃ひましたごま汁イヤ夫は兼てたくわへ置升お目にかけ升せう（ト膝手にかけ入吸物碗を入る樣な箱を持出て）御らん下されませ。こないに二十人前は所持致しております升と（かの箱を見るふたはおかしく其箱の横の方に何か書付てあるゆゑよんで見れ）（ばおんにやくのたゝき石二十人前と書付たり此内近所の狂歌よみおひ〳〵來りて）御免下さりませごま汁ヤ是は小髮長兀成樣サア〳〵。どあたも是へ〳〵ハイ〳〵是は十返舍先生。始てお目に掛り升た。私しは。富田茶賀丸と申升。次は反菌日屋呂。水鼻垂安。金玉の嘉雪。何れもお見しり下さりませごま汁時に先生おやかましう御坐りませうが（おむしかろふといふをおやか）扇面短冊などお願ひ申たいが何成共お持合せのお噺をお認めましうといふ國言葉あり）扇面短冊をつき付られ彌次郎しかつべらしくとりあげて何の出放体やら下さりませ（ト扇子短冊をつき付られ彌次郎しかつべらしくとりあげて何の出放体やら付もなければ是まで聞おぼへ居たりし人の歌を書て差出せばごま汁是をいたゞき見て）是は有難う御坐り升お歌は時鳥自由自在にきく里は。酒屋へ三里豆腐屋へ二里ハヽァなるほど。どうか聞た樣なお歌だ。きぬ〳〵のなさけをしらば今一つ。うそをもつけやあけ六ッの鐘。イヤ是は千秋花大人のお歌では御

○吐ニ無六語ヲ又喰レ八ヲ北八之九可レ想フ

座りませんか彌次ナニ私がよみ歌。然も江戸中大評判の歌。たれ去らぬ者は御座らぬでま汁イヤさよじやあろうが。先年私しお江戸へ參じたとき。三陀羅大人芍藥亭大人などにも。お目に掛りまして。すなはちお短冊もいただゐて歸りましたお御らんなされ其屏風ユ張て御坐り升（トいふゆゑ彌次郎ふりかへりて見れバ成程屏風に三陀羅と書て右の歌あり北八かしく氣の毒なれば）イヤ私しの先生は。そゝつかしひが。くせで人の歌だの我歌だのと云しやべつは一向御坐りやせぬ。コウ彌次さんイヤ先生是迄道中節でよみあさつた。お前の歌を書なされば能に（ト氣を付られて彌次郎面目なけれど。押のつよゐ男なれバ。いけしやァ〳〵として跡の短冊へは道中節の歌をかき此内北八も手持なければ張交ぜの屏風を見）ハゝァ戀川春町の書が有る。モシあの書の上にある賛は何でお坐り升ごま汁イヤあれは詩で御坐り升北八こちらの布袋の書の上に有ゝ詩と見へ升が誰が致したので御坐り升ごま汁イヤあれゝ語て御坐り升。澤

庵和尚の（トいふゆゑ北八心の内にこいつ。いまゝしひやつだ。さんかと云へバ。詩だと云。詩かと云ば語だと云。何でも此度は一ッよけゐに云て胡麻つかせてやろふとそこら見廻し）北八モシお掛物の書の上に書て有は大方六で御坐りませうなごま汁六か何かしりませんが。あれは質ゑ取たので御坐り升（ト此内勝手より女立出て）ハイ髭顔樣から。お手紙が參と升たごま汁ドレ〳〵何じや有る（ト此手紙をひらきて高々とよみて見れバ）手紙鳥渡申上候只今東都十返舍一九先生。私宅へ御着有之候。勿論名古屋連中並に。吉田大竹ゟも書狀參り申候。早速貴公御噂も致置候ゆゑ追付貴宅へ。同道參上。可致候間。御案内申入置候以上ごま汁コリヤどうじやいな。とんと。合點のいかぬ。ノウ先生只今朋友共からかやうゑ申越ましたが。定めてあやつ尊公のお名前をかたつて參つた者と見へるさいはゐ。追付是へ參るとあれば。ナントお逢あさられて。なぐさんでやろうじや御坐りませぬか彌次偖々。大變なとだ。いや早横着なやつも。あれば。有ものだ。然し私しは。あひますさいごま汁なんせ〳〵彌次イヤどうか先刻から持病の疝氣がおこりました。左樣でなくば其にせ者。致し方が御坐る者を。偖〳〵こまつた物だ（ト思ひがけ無く。此仕儀に及びさすがの彌次郎しよげ返りてゆかずと思ひし所扨はと心付こいつ。先刻より彌次郎が振舞ひ合點あらはしてくれんとたがひゑ袖を引あふて茶が丸何と先生コリヤ面白いとが出けま

した御不快で御坐りませうが。是非共其似せ者にはおわひなるが能ふ御坐りませう彌次ハテ扨おまつたとをおつしやる亜れ安イヤ時に先生のお宅い江戸表では何所で御坐り升な彌次されば何所でか御坐つた。ヲヽ夫〳〵鳥羽か伏見か淀竹田かゆきやまざき山崎の渡しを越て興市兵衛とお尋あれかおきやアがれハヽヽ。ごま汁イヤ慥あなた方のお笠に江戸神田八丁堀彌次郎兵衛と書付て有りふつたが。其彌次郎兵衛様と云は、たれさんのことじやいな彌次ハア聞た様な名だか誰でかあつた。ヲヽ聞た筈だ。わしが實名を彌次郎兵衛と云やすごま汁ハヽア常にや參らぬ鳥々渡參らぬ彌次郎兵衛で御坐ると云はあなたのとで有たかア彌次左様〳〵茶が丸時に彌次郎兵衛先生其似せ者の一丸をいんま連てこまゐかい彌次イヤわしはもう出立致そふごま汁何ぜ今頃何時じやと思ふて最ふ四ッじやげな彌次さればのことわしが痴氣いかはつたことで此様よかしこまつて斗りおると段〳〵悪く成。いつも夜分外を歩行て冷さへすりや。直に能くなるからごま汁ハヽア夫で今立ふと云のか。そうさんせ〳〵喩こおさんが。居ようと云ても爰にやもう置やせんのじや。早う出ていかんせ。ようも人の名をかたつて。だまさんしたの彌次ナニかたつたとはごま汁ハテかたつたわいな。ほんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から狀が着てきてありや。ちがひいなゐがなたれ安初めからおなさんの不都合だらく。こゐゐなとであろと思ふた。こちからはからこのし出されぬ内に。ちやつ〳〵と出ていかんせ彌次何だほかしだすユリヤ面白い北八コレサ彌次さん。りきんでもはじまらぬへ全体お前へ乃思ひ付きが悪ゐサア爰を出て何所ぞ木賃にても泊りやせう（コリヤア）何方たも眞平御免なさりやし（ト北八が段々のわびとに亭主い腹は立どもおかしさも半分。皆々此二人がやう〳〵の体にてそこ〳〵に支度し出行なりを見送り家内の者共手を打たゝきどつと笑ふ彌次郎はしじうふくれ顔をして。りきみかへり出行く）

おかしさ北八跡よしたがひ

いとはまし通り一遍旅の恥。書捨てゆく扇子短冊

斯よみて跡は笑ひを催ふし出かけたれど。最早亥の刻過たると見へ。家幷に戸を閉てひそまりかへり。何れを旅籠屋とも。見へ分たず泊るべき方も無してうか〳〵と。たどり行程にあはや軒下の犬共がおき立て吠掛れば彌次郎兵衛きよろ〳〵してエヽ此畜生めらア悪くふざきやアがる（ト石ころを拾ひて打ちつくれば猶々犬はおおんより立て取まく）北八かまいなさんな犬迄が馬鹿にしやアがる。ヲヤ彌次さんおつな手付をしてお前へ何をする彌次イヤ犬に取巻れた時い宙へ

寅と云ふ文字を書て見せると犬が退げると云とだから先刻から書て居るがねつから退げやァがらぬ。此奴らァ皆な無筆の犬だそうな（トシツシ〳〵トどうやらこうやら追はなして行共無しに思ハず此町を出れて）彌次コリャつまらぬ〳〵者だ。まゝよ北八夜通し歩行こじやァねへか。きついあたァねへ。やらかせ〳〵　北八お前とんだとを云まだ九ッにやァ成めへ又何所ぞへ泊りて〳〵者だ　彌次夫だとつて今頃におきて居る内はなし。イヤ有ぞ〳〵遥向ふに火が見へる。アノ火を目當ふ行て宿を頼まふ　北八ヲヽサ。夫ぞの能〳〵。然し提灯の火じやァねへか　彌次とんだとをいふ。戸の隙間よりもれる火

だ物を北八ほんに家の内で焚火だ何でも是非ものそこを頼んで泊やしやう（ト足近にまかせて急ぎ行く）彌次ヤァ〳〵〳〵あの家がどうか歩頓てそこに付たるにかの目當の火いふのれと）段々先へあゆを出して行く体ふ。をどろき　行て行様だ　北八ほんになァ。ていつはおかしい　彌次イヤをかしくない氣みが悪い何所の國にか家が歩行と云ふは只事じやァねへ　北八ナニサ是も赤坂の泊りぐらいで皆な狐めがする事だろふ。よはみを見せると直附け上りがする。かまう事はねへ。さつ〳〵と歩行をなせへ（とわざとりきみかへつて足早に件の火にをひつきくらまぎれふ。すかし見ればいざりの車あり。小屋の内にて火を焚。茶をわかしながら。車を押て行の也。ふたりいかしくこゝをすぎ行に。折節月は出たれども草木もねむる真夜中のうす淋しさ。跡にも先にも只二人。上はべいがまんにつよ張ても心は至てのおくびやう者こわ〳〵たどり行跡より一人來る者あり彌次振返り見れば小山の如き大男長脇差を腰ふ）彌次　コウ跡かり横たへ來るは只者ならず我々を目掛け附來るならんと北八にさいやきて）北八待なよ呑口がらをかしな奴が附て來る。ちと急ぎてやらかそう（ト足はやに走れば）跡の男も又はしる）はづれそうだ（ト小便をすれば其男も立留り）モシを前は今頃何所へお出ゆさる（トこは〳〵云ゞ彼の男存の外や）ハイ〳〵私しは松坂へ。もどりをる者じやがな。夜さら一人りこはさしき物云ひにて）ふて〳〵モウどうしよいなと思ひおつたとこへ。お前方が通らんすゆふ。コリャ能連じやと跡からお二人を心便りに参じたわいな　北八イヤおめへ。なりには似合ぬよはい音を出

しなさる。そしてそんな長いやつを差て居ながら彼の男ハヽァ是かいな。コリャ跡で拾ふて來た。竹切じやわいな（ト腰からぬいて杖よつきて行く）彌次ハヽヽ〳〵脇差ではねへの。わつちらァ又お前へがこわくつて〳〵先刻にからコリャひよんな奴に見こまれたと思つたが。マァお前へおくびやう者でわつちらも落ついた北八もう〳〵是から三人と云もんだから大丈夫だ男イヤ〳〵此先まどつとゑらい事が有がな彌次何がゑらい男間んせ。わしや今日江戸橋迄いて。歸りにさつう遲なつてな。いんまの先此松原にさおつたとこが。何じややら向ふに大きな白い物が立てゐをつて。夫が何方へいたり。こつちやへ來たり。ぶうらり〳〵もう〳〵わしやてはふて。コリャ死ぬかと思つたわいな。そじやものどうして向ふへ。いかれる者でコリャならんわいと跡戻りして。どうぞよい連がはしいと思ひおつた所へお前方に行合たのじやわいな彌次エヽ其白い大氣な者が居たと云い何所らに男イヤたつきに此先じやわいな北八エヽ何が出る者だ。おいらが先へ行ふ。をれよ附て來な（ト打連て此松原を一丁斗り行きたる時）彼男アレ〳〵向ふよ（アヽコリャ）たまらぬ〳〵（ト かたく〳〵しくはるか向ふを月明りよ透し見れば何共分らぬ白き物のおよそ一丈斗りも高く街道一ぱいに廣がり立て居る樣子之い何だろうと先へも。すヽまず立留り見れば又さゆるようにぶつたり無くなるかと見れば又そつくりと立大きく成たり小さく成たり其形ちわからず）彌次マァ何だろふ北八裾のねへから亡魂に違へねへ男（アヽアレ）あれじや物どうして先へ行れましよいな彌次性体がわからにやァ。猶氣をが悪ねコリャ行れぬ跡へ戻ふ。男わしもお前方を使りよ又參じたが。どうもあはふて行きんわい跡へ戻つて又迎の人が出來おつたら又爰迄こうわいな。二三度もそあねに。いたり戻たりしおつたら丁度夜がおけふわいな彌次何でも白裝束だから何ぞの亡魂に違へはねへ北八アレ〳〵青い火が見へる男エヽどうかこつちへさおるようじや彌次コリャどうしよふ迎も先へは行れぬ〳〵（ト三人柄ら色青ざめてがた〳〵ふるふ折から向ふより人の來るとみへ）唄戀の重荷をナ。いんだら。お馬にへ。いく馱あろやらしれぬくひ（ナアアンアエ）（ト唄ひながら來る）（助郷の人足四五人）彌次モシ〳〵お前方ア何所から來なさつた人足ハァわしらァ此近在じやが。役に當り居て津迄行おるのじやわいな彌次ソリャァ能がこヽへはどうしてきゐさつた人足ハテこな人い其役で津へ行のじやと云のに彌次ただしいお前方も幽靈じやァねへの。どうも人間なら爰迄生てゐよふ筈がない人足何云んすやらねからはからわからんわい北八イヤ向よ化者が居のにどうしておめへ方ァ其前を通つて來なさつたと云事さ人足コリャこなさん達は三渡りの藤九

郎狐が。いごいたのじやな（ハヽ〳〵）北八ナニヤ向を見せへ人足むこに何か居ぞい　北八アノ白い物が（アレ〳〵）人足白い物とはあれか〳〵ありや道中で。おきの靴や草鞋がもゑてゐるが。其煙が月にうつゝて白なつて見へるのじやわいな　彌次ハヽァそうか（ハヽハヽ）コリヤ有難御座りやす（ト人足に別れて三人共ほつとため息をつき打笑ひつゝ頓て其所にたどりつき見るに成程草鞋靴などを積かさぬて火を付もしたるにて其煙白く立ち登り見へたるなり此所を過て松坂に至りさだ夜更なれば道連の彼の男を頼み寝る斗りのとなれバあたりまへのはたごを出すもつひへ成と町の入口に水賃宿を世話して貰ひそこに泊り（て一夜をあそぼ明かしける）斯て。月落烏啼て時の鐘明六ツを告渡るに彌次郎北八。早くもふき出。此所を立出るとて

蹄も輪よ成て舞ふ日ぞ旅人の。踊り出たる松坂の宿

右の方小山の藥師を打過ぎ櫛田と云に至るこゝにお掛け紋と云る二軒の茶屋あり餅の名物なり

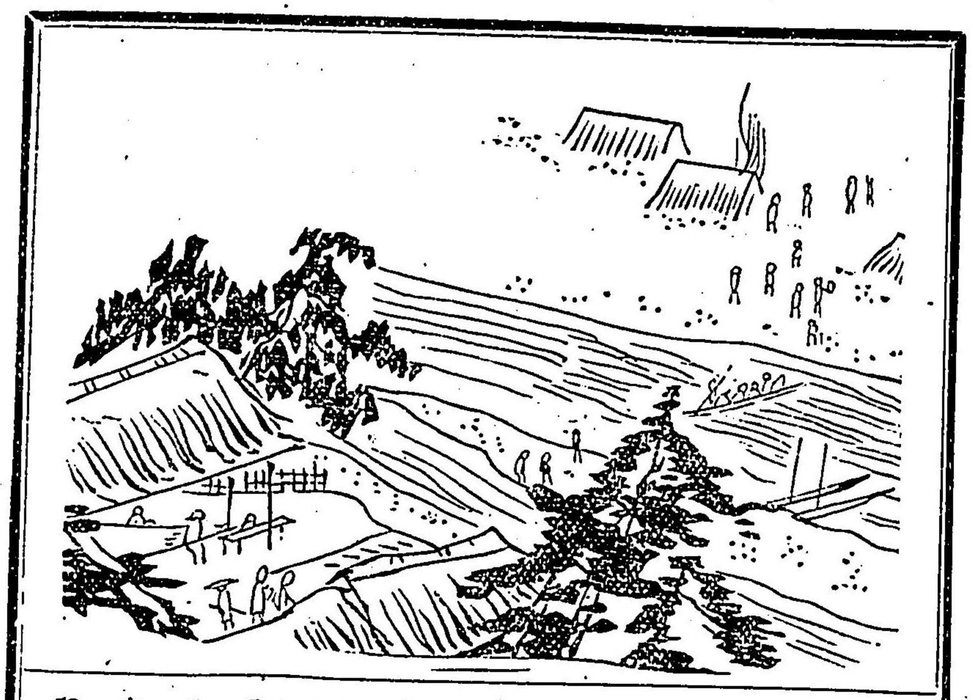
旅人ハいづれに心うつるやど。お紋おのんが賣れる燒餅

夫より被川を打渡り。齋宮を過て明星が茶屋に休みたる時（あゝに上方ものと見へてはでな大縞の引廻しを着て帳面と風呂敷包を脊おひたる男馬のねを付て居たりけるが馬士に乘らんせんかいゐ　上方者お前方も大方參宮じやあろ。わしも古市迄掛取に行さかい。一所に乘りなされ咄しもてもこわいな　彌次いか樣夕べの夜道で大つのれだ北八おらァ乘て行ぞ　北八そんなら此荷を附て貰ふ（ト此所にて馬のそう談ができ上方者と彌次郎と二方荒神で出掛る）馬ヒイン〳〵　上方れ前方ァお江戸衆じやあろな　彌次左樣さ　上方江戸は。ゑいとおじやなァ。わしや去年いて。ふらい目にあふたがなァ江戸に似合はん。何所へいても手水場が。どつともうゑらいむさくろしふて〳〵。私や百日程おる内。どんと手水にいたことがないがな。夫から江戸を立て。鈴ケ森たら云とこへ來て。ヤレ嬉しやちゝでこそ小用してこまぞと。海のなかへ溜〳〵た。小用と一きよ三斗八升計り。しかつたがゑらふよかつた。あしこは奇麗でゑらい大きな小用たごであつたわいな（ハヽ）彌次京でハ小便と榮と。とつけへあゐもると云事だから。小便も大切なもんだにおめへ海の中へおしい事をした。其三斗八升で取替たら榮が馬よ五駄や六駄は。くるだろふよ夫だから京では。屁をひるにも出そうに成とちやつと。裏の畑へかけて行て。むねてある。大根や菜の上へ屁をひり掛ると云事だが成程是もこや

○非ニ鈴ケ森ニ而尿、々漏

○彌次不レ說ニカ解語花ヲ取ニテ江戸ッ兒ノ身ニ遺憾多ッ矣

しに成だろふ 上方 そうじやわいな。其屁をひり掛た薬を。能ふ刻で土に交て壁を塗おるがな。京では其土を。へな土と云わいな 彌次 そう体京と云ふ所はあだじけぬへ所よ。前度わつちが行た時分は三月で花見のさい中。てん〳〵に幕を打てけつこうな。高時絵の重詰おんどを取りちらした所は能が其重の内ゑ何が有と思へば。かくやの香の物に。さらずの煮た奴つはおそれる〳〵 上方 イヤ夫よりかお江戸の衆が吉原の櫻はゑらいと。いこう自慢せらるゝさかいで。わしやわざ〳〵吉原へいて見たが。何の櫻はありませんがな 彌次 そりやおめへいつ頃いきなすつた 上方 わしがいたはたしか十月時分 彌次 おんの十月櫻か。有てたまるものか 上方 ハァそうかいおゝ夫でも京の小室や嵐山ゑは年中櫻がちやんとあるがな 彌次 そりやァ水斗りだろふ。花は年中有やァしめへ 上方 さよぢやわいな。イヤ又江戸衆は長唄をよう歌でじやが。京の宮園や國太夫は又格別おもんじやわいな 彌次 國太夫と云い。どの樣に歌やす 上方 國太はこうじやわいな（張上げて國太夫） 上方 頓てわたしが年明て。お前と夫婦に成あらば肩を襟（はまだな事足を耳にかけて成共そひませう（チン〳〵〳〵チンチリツン〳〵） 彌次 イヨ〳〵面白〳〵ナント私に一くさりおしへて。くんなさらねへか 上方 そりや安い事じやわいな。わしよついてやりなされ（ト此内北八は細長き竹一本を拾ひて。上方者が。あまりにかうまんくさい事をいふゆゑ。つゝき落してやらんと馬の跡から）上方（チンチリツン〳〵チンチン）ほんに女ねらつて來事をば知ず上方者は夢中にあり又國太夫ふし子はしうねんの深と。云はうそじやおい死でも呵賣の夜叉羅刹の杖振あげて丁と打（トいふ所にて北八手を延しかの竹にて）上方（ヤア コリア）どやつじやい。人の頭へ礫うちおるがな 彌次 上方ものゝあたまをぴしやり ハゝゝもう一ッぺん今の文句を 上方 わんに女子ゝしうねんの深と云はうそじやなゐ死でもかしやくの夜叉羅刹杖振上て（北八後ろより）上方（アイタタゝゝ）どやつじやい。どめつそうな。ゑちゑ礫。うちくさるがな（トふりかへり見れば北八はちやつと彌次郎が乘たる方の馬の影よかくれて一向見へず）彌次 而白いがどうも。ふしが六ケしいもう一遍やつてくんなせへ 上方 ソリャ何ぼでもやるゝ。やるが又つひりをうちやしよまいか 彌次 ナニサわつちが見て居よふ 上方 そんなら。ま一度やりましよかい。死でもかしやくの夜叉羅刹杖振上て丁とうつ（ト此度は北八うろたへて彌次郎があたまゝぴしやゝゝ）彌次（アタタゝゝ）北八 おれだ。コリャどうする 上方 ハァ先刻から私がつひりをうたんとしたのも。こおさんじやお何として打んした 北八 私は打た覺はない 上方 ナニ無とい云しやせんわいな 北八 ハテおいらァしらぬ〳〵。いけしつこい。野郎めだは 上方 野郎とは何じや



ひな。こなさんはゑらい。おとがひたゝかんすな北八何だ此べらぼうめさつきから。そうてへ氣よ喰ねへ野郎めだ。あんまりたゝ言つきやァがると引ぱり下すぞ上方面白いサァおろして見やんせ北八ムゝまつ逆樣よおつことしてやろう（ト馬の尻をぴつしやり）上方（ヤァコリヤ）たまらん何するのじや彌次おれもたまらん（コリヤアく〳〵）どうする〳〵馬士エゝ畜生ドウく（ト此内新茶屋わけの原を打過小幡につく此所より馬をおりて三人共茶屋に休む上方者北八に向ひて）コレ。おまひい何として。私がつむりをうたんした彌次もう能にしなせへ。おたげへに旅じやァ色々ゐ事が有もんだ了簡しなせへ。わつちが一盃買やせう。モシ女中何ぞ

肴があらば爰へ一盃出してくんな（ト是より酒盛となりて上方ものも一つなる口ゆゑだん〳〵酔がまはりて）コリヤゑらふ酔たわいな。コレ彌次さんとやら。どしやれまいがゑろふすきじやが。此わろいかんぞや。とんといかんけれど。お前の連じやしよ事がない。かうしよじやなゐかいな。是から山田の妙見町に一所に泊つて古市をおごろかいな。わしやあこでは。ゑろうきれるがな千束屋の皷の間。柏屋の松の間。私が案内するさかい。いかんせんか。どうじやいゐ（トやたらに斗りいふゆゑ彌次郎。こいつおだてあげ）寄妙〳〵どうぞお供致てへの。上方是から世古て遊ぶつもりにむなさんようして彌次（大そうなと）の松坂屋で支度して妙見町の藤屋としよちやないかいなサァ〳〵。もういまはいな彌次ドリヤ出掛やせう（トあゝの酒代ゝ拂ひ立出る此町のでは）

宮川や神に奇縁を結ばんと、そくえる水の影のしらゆふ

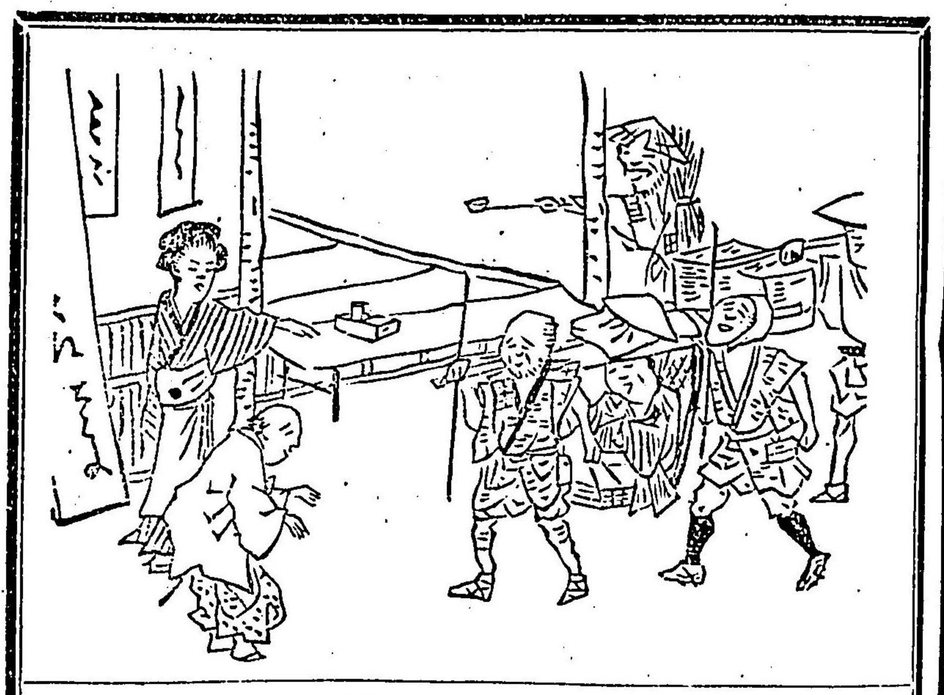
是より中河原を打過。堤世古を打越て山田の町よぞ差し掛りける

○追加

川崎音頭に。伊勢の山田を歌ひしを。和名抄の陽田と云るより出たるにや此所十二楷有て人家九千軒斗り商賈ゐらかを並べ各々質素の莊嚴濃よして神都の風俗自から備り柔和悉

○啞子不レ能レ言ヲ故ニ出シ看板ニ示レ之ヲ者カ歟呵々

鎮の光景は。余國に異なり參宮の旅人絶間無く。繁昌さらにいふ斗りなし彌次郎兵衛北八ハ彼の上方者と打連此入口に至ると兩側家毎に御師の名を板に書附用立所と云へる。看板竹葦の如く。爰に袴羽織引掛たる侍。何人となく馳違て往來の旅人の御師に至るを迎ふと見へて一人の侍彌次郎兵衛に近附きお師の手代モシあなた方は何れへお越で御坐り升な彌次しれたと太神宮樣へ參ります手代イヤ太夫ハどれへ彌次太夫ハ竹本義太夫殿さ手代ハア義太夫と申そハ何所元じやいな彌次其義太と云はゐ。大坂にては道頓堀北八京ハ四條お江戸は。葺屋町川岸に於て永とく御評判に預りましたる手代かたは者ハお前方で有たかいな北八たハあとぬかすとひつぱたくぞ手代ゑらいあこじやな（ハ、、、）上方ちと休んでいこかいな北八爰らゞ。きたねへ所だ皆御師の雪隱と見へて用立所と書て有る彌次おきやアがれハ、く（ト三人共或る茶屋へ這入。暫く休む此内向ふより）唄御座れ上方同者大勢そろひのなりで女交りに壁張上げ夜見世は順慶町の通り筋からソレひやうたん町をヤアとこさア。よいやさア（チン〳〵チン）すけんぞめきは阿波座の烏。ソリヤサかわひ〳〵ゐ。ヤアレ格子先ヤアとこさ。ヨウいとなア。ありやゝコノなんでもせ（チヽンチヽンチン）（〳〵〳〵）（ト此一群通り過たる跡から太々講とみへて廿人斗り何れも御師より向ひ



の駕よ打乘り來るが）サアヽ〳〵是じや〳〵御師の手代先よ立て先どなた樣も是で御休足なさりませ（ト駕は殘らず茶屋の門に下す此太々講ハ江戸と見へて何れも小袖ぐるみに短いお太刀をきめた手合銘々駕を出て座敷に通る此内）イヤ是はどうだ彌一人の男彌次郎を見附て次殿〳〵貴樣も參宮か（ト壁をかけれて彌次郎びつくりし見れバ町内の米屋大郎兵衛なり江戸をたつ時此米屋の拂ひをせず立たる事あれば何とあく彌次郎しよげかへりて）ハア太郎兵衛樣か能お出掛なさいました然し爰であなたに。お目よ掛てい面目無太郎ナニサ〳〵わしも仲間の太々講で其くせ講親と云者だから。よんどころなく出掛ましたがゝいひ所で逐た旅へ出ば兎角同國がるつかしい奥へ來て一盃やらつし彌次ありがたう御坐いやす太郎連ハ誰だハヽアまんざらし

らぬ顔でもあるナント貴様たち。さいはひのことだ太々講おがまぬか。夫も飛入と云アちつと斗り金が出から失敬ながら。私が供にあるど一文も入らす。大分馳走にあつておがまれると。云ものだから。どうだろう彌次夫は願つてもない有難ことで御坐いやす。然し夫ができやせうかね太郎ハテもしが講親だ者。どうでもなる。マア何にしろ奥へ來さつー彌次ハイた様ならモシ上方の。ちとあゝに待てくんなせへ（連の上方者）能はいの。いてでんせ太郎サア〳〵ふたり共きさつし〳〵（ト此太郎兵衛に誘なわれ彌次郎も北八も草鞋を取て奥へ行と。上方者はひとり見世先に酒など呑で待て居るうち奥は太々講のとあれば御師々の馳走にて。さいつむれの駕十四五丁斗り是駕かきは上方の太々講と見えて御師の手代。先に立て）駕かきさえつ大さはの最中又表に一ト

○此則チ太郎兵衛駕籠

ホウよい〳〵。ゑつこらさつさ〳〵（ト是も同じく此茶屋に這入る）（おしの手代）サア〳〵御案内〳〵（茶屋の女）お早う御坐ります奥へお通りあさんせいあ（ト此内皆々駕より下りて奥へ通ると直に敷の酒落色々有共余りくだ〳〵しけれゞ略す頓て奥の酒盛も終てサアれ立と云と二タ組の太々講が一ッ所になりどさくさして奥より出と江戸組の御師の手代一はゐ立て奥より出で）サア〳〵お駕の乘是へ〳〵何方もサアお召なされませ（ト乘る此内上方組の御師の手代も同じく駈廻りて）こちらのお駕い是へ〳〵（ト横づけにして皆々を載る米屋の太郎兵衛あま酔となり彌次郎が手を取りて）太郎コウ彌次公。貴様已が駕ゑ乘て行ねへか彌次イヤとんだことをおつしやる太郎ハテわしゃ是から歩行いなぐさみだ。貴様酒落ゑ乘て行かつし彌次左様あらへ〳〵こりや。奇妙〳〵（ト駕に乘ばサアお立じやと両方の駕が一度にかゝ上げこんざつして。彌次郎が乘たる駕の人足。とんだ間抜と見へて上方組の駕の中へまぎれ込たるに氣も附ずさつさとかついて行掛るどさくさ紛れに人も夫と心附ねゞ段々と急ぎ行程に出田のゑん中すじかゞといふ所にて江戸方の一ト組ハ内宮の御師なるゆゑ左りの方へ別れ行上方組ハ外宮の御師にて此所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方に着く。門前の箒き目盛砂に水打清め玄關にまく打廻して馳走の役々羽織袴に出向へば講中皆々駕をかりて玄關より打通る。此時彌次郎兵衛も駕かきのそゝうにて上方組の中へ紛れ込み爰に來たれど十四五丁も有る駕どれがどれやらわからぬ彌次郎駕を出て同じく座敷に打通りそこらをうろ〳〵見廻せ共皆しらぬ顔斗りなれば彌次ハテ合默のいのぬモシ〳〵米屋の太郎兵衛様は何れにお出なさり升（そに居た男）何じやいな。太郎兵衛さんとはこちや。しらんわいな。そしておまいい。ねから見

ん顔じやが誰さんじやいな　彌次　ハイわつちい。ソレ太郎兵衛さんの町内の者じやがハテどうか違つた樣ぢ。北八　いどうしか知らん（トむしやうにうろ〳〵さよろ〳〵とまでつきあるけバ。皆々さもをつぶし。たがひに袖引合て荷物などかたよせさゝやき合ふ内此講中の内二三人立向ひて）　コレ〳〵こなさんはみなれぬ人じやが誰じやいな　彌次　ハイ〳〵　講中　ハテこなわろは何をきよろ〳〵さんすぞいな　詞じやと云のに　彌次　イヤわつちい米屋の太郎兵衛さんよふ目にかゝればわかりやも　講中　ハテそないぢ人は。こちの講の内には無もせぬもの。何じややら氣みたの惡ぢ人じやわいな　御師の手代　ハアこぢ人ゝあなた方のお連では御坐りませんかいぢ　講中　さよじやわいな　手代　イヤ夫はどした者じやどつと、出て行んせ。ゑらい。へげたれじやな　講中　道中じらであろぞいな。ほり出してやらんせ。あたけたいな　彌次　エ、そんなよ云なさるとアねへ。ほり出とは何のあつた。途方もねへ　講中　ハゝアお前のものいひはお江戸じやる夫でよめたわいのいんきのさきた江戸の太々講と一つ所で。落合ふたが其時お前の乘らんした。鶴がこちらの中へ紛れ込で御坐んしたのじやぢ　彌次　なるほど左樣そんならわつちのいく御師殿は何所で御坐いやすぢ　手代　ナニお前のいくことを誰がしろぞいな　彌次　めん〳〵のいく御師殿をしらんと云事があろかいな。コリヤ我さまい。態とあちの仲間へずり込で太々講を喰たをし。しようでな（講中皆々）エ、けたいな奴じや。のうてん。どやいてこなぞかい　彌次　イヤ惡く酒落ラア手めへたちの太々講。丸ッきり喰倒したところが。たかがしれてある。あんまり。安くしやアがるな江戸ッ子だは。おれひとりで太々講打て見せよう（トどつさりすはれば御師の手代きもをつぶして）ナニお前がおひとりでかいぢ。こりや。どけた〳〵みんをお前が彌次しれたことよ。多少にやア依めへ。是で賴み升（トうちかへの錢二百文紙ょ包み出せバおしの手代二度びつくり）ハゝゝ太々講は安うて金拾五両もださんせんけりや。でけんわいな　彌次　ナニ是ではなりやせんか　手代　さよじや〳〵　彌次　太々講がならずば是で蜜柑講でも賴み升　講中　ハゝゝべつか講にさんせ。ハゝゝ手代　イヤおどけたお方じや。ハヤよめたお前のいくとこは慥に内宮の山莊夫太殿じやわいの。先刻の手代があこのじや程に是から妙見町を直に古市の先へいて尋ねさんせ　彌次　ハアそうか。コリャありがてへ。ほんにおやかましう御坐いやした（講中皆々）ゑらいあほうじやハゝゝ（ト手を打笑ふ彌次郎はらたてどもせんかたなくしほ〳〵此所を立出るとて）

鉢植のだい〳〵講にあらぬ共。宙にぶらりとなりし間違

夫より彌次郎兵衛は元の筋道に出て妙見町を差て行く道すがら北八はいかゞせしや米屋太郎兵衛と打連て御師の方へ行しか但しは上方者と妙見町に泊りしかと思ひわびつゝ。たどり行程ゑ廣小路に至ると（此所の宿屋）若か泊かいな宿を取ていかんせ　彌次　コレ妙見町と云は未よつぽど御坐いやそかね（宿屋の女）イエいんま少し此先じやわいな　彌次　ソノ妙見町にアノ何屋とか云た道連の上方者が泊ると云たはア、夫よ（ト色〳〵に考ても藤屋と云を）わすれてさつぱり思ひ出さず）ハテ口へ出るような何でも柵からぶら下つたような名であつた若々妙見町にぶらさがつてゐる宿屋は御坐いやせんか（そこにゐた人）ナニぶら下つてゐる宿屋はこちやしらんわいのそないゐと云てはしれやせんがな　彌次　成る程こゝらでたづねてはしれめへ。最ふちつと先へ行てたづねやせう（ト夫よりこゝを過て急ぎたどり行程にこゝに萬金丹のかんばん妙見町山原七右衛門と云るを見て偖こそ。爰が妙見町ならんと思ひ往來の人を呼留て）彌次　モシて、らに何でもぶらさがつてゐる樣な名の内ゝ御坐いやせんか（往來の人ふしぎそうに）なんじやいな。ぶらさがつて居る内とは何屋じやいな　彌次　宿屋さ　往來人　其家名わいな　彌次　家名を忘れたからのとさ　往來人　イヤ夫いふて。かんせにやアしれぬくひわいの。何じろやと。ぶらさがつた内と云てはハゝ、ァむこの門に人の立てをる。内へいてとふて見

やんせ。あこゝ去年首縊りがあつてぶらさがつた内じやさかい　彌次　イヤそんな者の。ぶらさがつたのじやァ御座いやせん　往來人　ハテまアいてとふてかんせ。あこも宿屋じやあろわい　彌次　ハイ左樣なら（ト走り行くうち。彼家の門に立て居た人もどこへか。ついと行て仕舞ひ。さつぱりしれなくなりまで〳〵して。ある内の前に立て）彌次　モシ〳〵ちとものがたづねたう御坐いやす。去年首をおくゝりなさつたハ。あなたで御坐いやすか（此内の亭主居合せきもを潰しとんで出で）イヤ私ヤ首つゥたとはなゐがな　彌次　そんならどこで御坐いやす　亭主　こゝらに首つゥた内はしらんがな　此二三軒先に柵から落た牡丹餅喰て。咽とつめて死だ内が有が。若夫じやなゐかな　彌次　いか樣ゐァ何でも柵からぶらさがつた樣な内で有た（ト又二三軒先へ行きある内の門にて）モシ柵から落た内ゝお前へじやァ御坐いやせんか（事ひふ此内の女房）イゝエナわたしが内は。元から爰でと見へて　つゐしか柵へ揚て置たとはをまへせんわいな

彌次ハア外よは御坐りやせんか女房コリヤお前きゝちがひじやあろそいな。山から落た内じやおませんかいな夫じやと杓の山の。與次郎の小屋が此間の風で谷へ吹落されたと云とでお升がな。大方それじやあろいな彌次イヤ夫でもねへが（コリヤア）困つた者だ何だかかだか。さつぱり分らなく成て。もともこもうしなつた樣だわつちも先刻から尋ねわぐんで。もう〳〵がつかりと。くたびれやしたどうだ。一ぷく呑して下さりやせ（ト此見世さきに腰を掛る亭主氣の毒そうに煙草盆を提て奥より立出）亭主サア一ぷくあがらんせ。一休お前ハ。何處を尋ねさんすのじやねあ。參宮じやあろがおひとりか。但しお連でもお升かいな彌次左樣さ道連ともゑ三人の處ろ。わつちは其連れはぐれてこんるこまつたとア御坐やせん亭主イヤ其をふたりのを連いおひとりはお江戸らしいが今おひとりゝ京のお人で目の上にこのくらいな疵痕のあるお方じやおませんかいな彌次さやう〳〵亭主それじやとこちの内にお泊りあされゑさかい直よお前樣へのお向ひをだしましたわいあ彌次そりやほんとうにか（ヤレ〳〵）うれしやそしてお前のとまは何屋と云やす亭主アレ御覽なされ掛札に藤屋と書てお升がな彌次ホンニ夫々。棚からぶら下つた樣だと思つたが其藤屋よ。そうして連のやつらゝどこにゐやす亭主ソレ奥よお連樣がお出だと。云てかんせ（ト此聲を聞くより奥から出る）道づれの上方者とんできたり）コリヤようごんした定めて。そこらうち尋ねさんしたで有まらめゑらう尋糸まふた事ちやなゐゑいのマア〳〵奥へ彌次是は。お世話に成やす（ト直に奥へゆく上方者と北八は江戸組のへざるゆゑしらぬ人ゞかりにて手もちなく色々間合せても。わからずせんかたなく其御師の方をいで。尋度も當どなく兼て妙見町の藤屋へ泊らんと云たることも承知のことなれば大かた尋てゐるであらふ扨ふそ此所に泊りて待受しをり彌次郎は太々講の鶴の間逆ひたる一五一十を物語り大笑ひと也ける北八は髮結を呼に來り髭をそりて居りけるがまア〳〵おたげへに別條無て目出たひ〳〵彌次イヤもうとんだ目ゑ逢たと云ふは已が事よ時に髮結さん其跡でわつちも一ッやらかしてくんなせへ北八お前マア湯に這入てきなせへ彌次そんならそうよ（ト彌次郎は湯に入に行く北八髭をそり掛りて）時に髮結さんおいらが髮はぐつと根を詰ていつてくんな。なんだかあつちのはうの髮はたぼが出て衝がおつに長くてとんだ氣の氣かねへあたまつきだそして女の髮もどうせへに大きに結てなんのことはねへ筑摩の鍋かぶりといふものだ髮結そのかはりお女子はとつときれひでおゑしよがな北八奇麗はいゝが立て小便するには訳る髮結イヤお江戸の女中も大きな口をあかんして欠びさつすにはねから色氣がさめるがゐ北八それでも女郎は又江戸めとだ江戸はいきはりが有

から面白い此方のは誰がいつても同じことでねつからふると云ふ事がねへから信仰がうそひ様だ髪結イヤ此方のはうではお面の様なお方が行んしても。ふらんさかい夫でゑいじやおまはんかいな北八貴様はれを安く云ふコレやんの事だが髪結ヨットあをのかんすときれ升がゑ北八イヤちらなくつてもどうせへに痛へ髪剃だ髪結痛ひはづじやわいゑ此髪剃いいつやち。研だまゝじゃさかい北八ニヽめつそうゑ。なぜ剃たびことに研ぬへの髪結

イヤそなゐに研と髪剃が。へるさかいハア人さんの頭まの痛のは。こちや三年もこちへるがゑ北八どうりこそ痛て〳〵。一本宛ぬく様だ髪結なんぼいたいとて。たかゞ命にさはるとは。無がな北八エヽそりやアしれたとよもう〳〵月代は能かげんにしてくんな髪結おまへ逆ぞりはゑきらひかな北八ニヽ其剃刀で逆剃にやられてたまるものか

頭の皮がむけるだろう。もうそこは。いひからぐつと髪とつめて結てくんな髪結（ハイ〳〵コリヤ）ゑらいふけじや此ふけのとれる事がゑ升がな北八どうすとゝれる髪結ぼん様にならんすとゑいがゑ北八エヽいめへましひとをいふ髪結根ハこないでようゑ升かい北八イヤ〳〵もつと引つめてくんな兎角此方の方へくるとかみハへたくそだ根を堅くつめて結とをしらねへ無器用だ髪結さよゑら是でそどうでゑ升（ト此髪結あれ見たかといふ程ぐつと根を詰ると月代に三ッ程ひだが出来て目は上の方へ引釣るくらゐに堅く引詰られ北八髪の毛が抜る程痛けれ共まけをしみにて顔をしかめながら）是でよし〳〵アヽ能心持ちだ髪結ナント夫で。好御坐りましよがな北八あんまりよすぎて首が廻らぬ様だ（ト此内彌次郎湯より上りくると）髪結サアあゐた髪なされませんかいな彌次イヤどうか湯に入たらぞく〳〵して風でも引た様だ私はマアあしたのとにしやせう髪結さよなら御機嫌よふ（ト持いで名々へなやす上方者は先刻より寐ころび居たりしがゑきなをりて）ドレ飯喰をかいな女今日は。しけでゑ者が何もおませんわいな彌次是ハ御馳走サア北八どうだ彌次さんわつちが箸ハどこにゐる彌次エヽ此男はソレ膳につゐてあらア北八とつてくんなどうもうつむく事がならねへ彌次ゑぜならねへヨヤ〳〵手前の顔はどうした目が引ンウて狐つきを兄様だぜ北八あんまりかみ結めがごうぎ

に根をつめて結やァがつた（アイタ、、、）首をいごかす度めり〳〵とかみの毛が抜る様だ 上方ソレお前お汁が飛れるわいの。アレお飯の上にお汁碗を置んすさかいァレ飛たわいの。コリャもうとつとやくたれじや 北八 彌次さんどうぞふねてくんゐ 彌次 いめへましい男だ。そしてマァうつ向れぬ程よなぜそんなゐ堅く結はせた。もうちつとゆるくすれゞいゝに手前大方髪結をいじめたろふから 上方 そじやさかいそないゐめにあいんしたのじやあろぞいな 北八 イヤもう物を云ふさへあたまへ懇けてならぬ 彌次さんどうぞ此難義をたすかるしようわあるめへか 彌次 ドレ已がちとゆるくしてやろう（ト髪の根を持ていやというほどぐッと引立る） 北八（アイタ、、、）どうする〳〵 彌次 是で宜かろう 北八 アゝちつと首が廻つてきた。エゝとんだめよあはしやァがつた

あなどりしむくひは罰が當りまへ。油斷のならぬ伊勢の髪結

自ら斯よみて打笑ひつゝ支度しまひはや膳も引けたるゑ何れも打くつろぎて咄しの序に上方 ナント今宵是から古市へいこかひなまだ宮巡りもせず先にもつてへねへようだが。儘の皮。やらかしやせう 上方 行見やんせ私やあこで。年々捨た金が千や貳千のこつちやな

ゐさかい何んぼなど。わしがうけこむじや。サァはやういかんせんかいな 彌次 エゝそんなら已も髪月代すればよかつた 上方 御亭さん〳〵鳥渡きておくれんかいな 此宿の亭主 ハイ〳〵御用でお升かいな 上方 お江戸のお客が是から山へ登ろといな（妙見町のつうげんに古市へゆくを山へ登ると云ふ） 亭主 能御座りましよ。お供して參りましよ 上方 アノ牛車櫻か千束屋にしよじやあゐかいな 北八 太鼓の間とやらは何所よ有りやす 亭主 太鼓じやおません鼓の間の事かいあゝリヤ千束屋でお升がな 上方 其千束屋が能御坐りましよ（ト皆々仕度するうち早日も暮て時分は好と亭主を案内として三人とも出かけ行程に此妙見町の上は直に古市にて娼家軒を並べてひきたつる伊勢音頭の三味線いさましくうかれ〳〵て千束やと云るに至れば女共皆々走り出） 亭主 よふ御坐んした直にお二階へ（藤屋の）お連申てもいひかいなサア御案内致しませう（ト亭主を先よ各々二階へ上り） 上方 時に彌次さんあうしよじやなゐかいな。お前方をお江戸でゐらい大きな坐に着と店の番頭衆に。しよじやゐゐかいな 藤亭 そおいゐとが能御坐りましよ 上方 然し訛らんしてはあかんわいの上店と云もんじやさかい京談で遣んせにや。工合が悪かろが。どうじやいな 彌次 そんゐ事は持てていだ。すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう。コレ〳〵お女子衆〳〵鳥渡きておくれんのいゐ私やなんじやゝら。とつともうはや。ゐろう咽がかわ

くさかい茶々ひとつ持て來ておくれんか　女ハイ〳〵　彌次　ナント京談ゑらいか〳〵へゝ畜生めが　上方　イヤきよとゐ者じや。でけた〳〵（トうち女酒肴を持出し進める藤屋初て段々に廻すと上方人引請て）コレお仲居お山さんはどうじやいゐコノお方はな。お江戸のゑらい。お店の番頭さんじやさかい。なんじやろとおやまさんをありたけ出さんせお氣に入と百日も二百日も御逗留でお金のいるとは根からはから。とつとおかまひないお方じや　藤亭　さよじやわいな私が去年お江戸へ參じたときお店の前を通りましたが成程ゑらい御大家じや。あなたの御支配なさる方は。両替店と見へましたが是も大きゐお見世でお升わい

の彌次　ナニサ格別ゑらい見せではないわいの。問口がやつと三十三間あつて佛の數が三萬三千三百三拾三人くらしじやさかいゑらい賑やかな事いな　藤亭　京のお店は慥か六條數珠屋町であつた　彌次　サイノわたしがとゝさんかゝさんわさぞや案じてゐさんすじやァろに。てあいにお山ばかり買ふてとつともふ。ゑらいやくたいじや〳〵　女　是いし皆お出んかいゐ（ト呼立る聲よ）何方樣もよう御坐んした　彌次　ハゝァどれもゑらい出來じやな　上方　番（四五人立出て）頭さん盃を。ちとあつちへさゝんせ　彌次　アイもて一ッあげうかい（ト其中壹番うつくしい女へ差てにこ〳〵して居る）北八　おいらい太皷の間が見たいがどうだ　上方　又太皷の間といはんす　皷の間玄やわいゐ　女　皷の間よは是もお江戸のお客さん方が子供衆よせて踊らせてじや。アレ聞んせ（此内奥の皷の間に踊がはじまると）（チテチレ〳〵チヽチ）（伊勢お）鉛瓶や塵も拂ふて木陰れの池見へて三味線の音聞へる）（ヽヽトテチレノレ〳〵）（ヨイ〳〵）よいやさァ　上方　イヤァ奥で踊りを初めお（んど）に浮べる月の顔。化粧は里の色々よ（ヨイ〳〵）つたそうじや此方もコリヤ面白成てきたちと大な者でやろわいな　彌次　そうさとんだおつに浮流て來たもう京談も何も面倒になつた（ヨイ〳〵）よいやさァ　上方（イヨ〳〵テチレ〳〵）（又奥の唄）目たつ浮名も面白さ和ぐ歌や三味線に足もしどろに立かへり又も今宵の約束は（ヨイ〳〵

ヨイ〳〵よいやサ（トテチレ）上方コリヤ忝らい〳〵時にと下拙の私しめが相方のお山さんハコレお前名は何と云ぞいの何じやお辨ありがたいの誰あろふ勢州古市千束屋のお辨女郎と云ふ美しひ可愛らしい女子の辨才天女様は忝けなくも京都千本通中立賣ひよいと上るところ。邊栗屋與太九郎様の相方じやちとねき。よらんせんかひの（ト手を取引寄る此京の側人は酒に酔と何でも叮寧よくど〳〵云事が。くせよて段々くだをまき掛る彌次郎は初に我が盃を差たる。お山故自分の相方と思ひ居たりしに京の男我が相方の様にいふ故やつきとして）彌次コレ京のお客ソリヤわしが相方のお山さんじや上方イヤ何いはんすぞいの。これ女中のお仲居お前名ハ何と云てじや女ハイ金と云わいな上方ソレ〳〵勢州古市千束屋の仲居お金女郎に京都千本通中立賣ひよいと上ル所邊栗屋與太九郎が先刻なね〳〵引合て置たアノ美くしひ可愛らしひ辨才天女のお辨女郎といふた山さんは則ち京都十本通中立賣彌次エヽやかましひ千本も百本もねるものかへ何でもから初手つべんに己が酒盃を差て置た（ト云は江戸にてハ。女郎の座敷に直るとすぐに盃を差て。相方を定むれ共。此邊にては左様のことは無く只内々よて茶屋の女房あるひハ女などにさヽやきてあれハ誰。是は誰と相方を極めて置ゆゑ京の人先刻仲居へ渡りて此中よていつち上しろ物を自分の相方と定め殘りを彌次郎北八と已がさりやくして極めて置し故。彌次郎ハ其事を一向しらず江戸のかくにて盃を差たるお山を我が相方と思ひ居たりしゆゑ偖こそ此のいさくさおこりたり仲居彌次郎をなだめて）是ハしアノお山さんはあ。此人さんの相方お前さんハこちの島田髷さんじやわいな彌次馬鹿ア云ふ。此中でアノおやまが目につゐたから夫で己が酒盃を差したよ違ひはなね。そこでわしがふ山かひな上方ハテ悪ひがてんじやわいのこなさんはアノ江戸は何所じやいあ彌次江戸ハ神田の八丁堀枡面屋の彌次郎兵衛様と云ちやァちとひねくつた奴様だア上方其ふ江戸の神田八丁堀枡面屋の彌次郎兵衛殿と云ひねくつた奴様が京都千本通中立賣ひよひと上る處邊栗屋與太九郎の相方のお山勢州古市千束屋の彌次エヽ何を抜しやァがる邊栗屋の與太九郎もあきれらア上方イヤ此なお江戸神田八丁堀枡面屋の彌次郎兵衛殿京都十本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎を京都千本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎と可捨にさんしたのそこで持てからに京都十本通中立賣彌次エヽ喧ひよくしやべる野郎だ北八おらァそんふとより太皷の間が見てへ太皷の間は何所だ〳〵女太皷の間とハふんじやいし皷の間のとかひふ北八ワヽ其皷〳〵上方イヤ皷じやあろが。なんじやあろがっ此邊栗屋與太九郎が相方じやわいの彌次コレ悪く洒落るふ。なんでも皷の間は已がのだ。悪い敵さ役じやァねへか。いやでもおふでも抱

○北八無聊

○彌次ノ意中京談所歟非ニ常慨一ニ一生懸命俱ニ不レ戴レ天之仇耳

てぬる藤亭ハヽあの廣い蔵の間をかいな彌次ヲヽ廣くてもせまくても頓着はねへ已が者だ上方（イヤ〳〵〳〵）そりやさんわい彌次さんとも有ものか誰が何と云ても京都千本通中立賣枥面屋彌次郎兵衛様が相方だい上方イヤ此お江戸神田八丁堀上る所邊薬屋與太九郎が買ふたのじや北八ハヽお前へ方れ何を云やらどつちがどうだかさつぱり分なくなつたな女そして此お方は京のお方じやと云んしたにもいひがいつの間にやらお江戸じやわいる彌次べら棒め此いそがしひよ京談がやつて居られるものか女あんまりお前さん方がいさかふてじやさかいソレ見さんせお山さん方は皆逃てゆかんしたわいる彌次いめへましひもふ歸るべい女マアようお升がな藤亭テシこうしよかいな是から柏屋の松の間をお目にかけふわいな。但し麻吉へお供しよかいな彌次いやだ〳〵已らア是非歸へる〳〵藤亭ハテ能ど坐り升彌次イヤとめやアがるな。いめへましひ（トずつと立て歸ろうとずる仲居共立かゝりて色々あいさつし留ても留らずふりはあし出かけるところへ相方のお山初江立いで）是いしるんじやいし彌次とめるなよせへ〳〵初江お前さん斗りそないにやア歸る〳〵と云はんすがるわしがお氣よいらんのかいし彌次イヤそうでもねへが男をはなせ〳〵初江わしやいやいし（ト又かけだしそうにするを引とらへむり無体に羽織をぬかせる）彌次イヤ羽織をどうするよこせ〳〵（ト云乍ら又紙入煙草入を取られる）彌次コレサ已らア歸へる〳〵初江じやうのこわい人さんじや（ト云乍ら帶をぐつと引向ども着物をぬかせ樣とする彌次郎は垢じみたる越中ふんどしをしめて居たりし故裸にされていたまらぬゃ大）彌次コレ〳〵もうかんに。してくれ。初江そじやきよへきろきし着物を両手に押へて）さかい。こゝに居さんすか彌次ねるともく〳〵伸居初江さんも堪忍してやらんせ藤亭サアく能坐り升是へ〳〵（ト彌次郎が手を取り元の處に引きすへる）北八（ハヽ）面白い〳〵彌次さん斯もあろふむくつけき客も今宵い持るおり。これ古市のおやまなれども此一首に皆々笑ひを催ふし藤屋の亭主伸居共がそこら取片付て夫〳〵に坐敷を設け醉倒れたる上方者を引立て案内するに北八も供に出行けば跡に彌次郎一人殘りたるに女サアく〳〵お前さんも。些彼處へ彌次ドレ行やせう。どこだく〳〵（トいひながら立てゆく此彌次郎至て見へものにて彼のよしめたる如き。ふんどしをめたるが殊の外きにかゝり。ひよつと見付られたら恥のかき揚ならんとふとところの内にそつとはつしれんじの窓より庭の方へぱふり出し跡先を見廻し人の見ざるに安堵して）斯て夜も更渡るに奥の間の川崎おんどりおのづから鎖り旅客のい仲居の跡を附そひ行びきの聲かしましく鐘の音もはや。七ツ響て鶏のよる。萬戸に鳴ゆ夜もしらをかゝる明り窓の障子に驚き起きあがりて目をこすりながら上方サアく〳〵どうじやいな。起さんせも

ういのわいな北八　彌次さん日が出たァ歸らねへか（ト両人彌次郎が寢て居る所へ來り起す彌次郎起て）ヤレ〳〵。ぐつと一寢入に。やらかしたおやまだ是いし今日も居さんせ　彌次　とほうもねへ歸る〳〵（ト皆〳〵したくして出かけるお山ども送りて廊下より）是ぬし〳〵ァレ見さんせ庭の松にいもいで一人のお山れんじの窓より庭の方を覗き）是ぬし〳〵ァレ見さんせ庭の松にいもじが掛つて有わいなァ。（彌次郎の相方女郎初江）のいてかんせほんにいやねな誰じやな　彌次ハ、アこいつはおかしひ。羽衣の松じやァねへ　ふんどし掛の松も珍らしひ　北八　彌次さん。お前のじやァねへか　初江　ホンニ夫いしあのさんの廻じやあいかひな（ト彌次郎が顔を見て笑ふ彌次郎は宵にれんじより捨たるふんどし庭の松の木に引掛りてぶら下り居る）ナニ遠方も糸へ　あんおきたねをおかしく思ひあがらさすが夫とも云れすへいきにて　へ。ふんどしをナニ己らがするものか　初江　そゑやてゝナ夕べ私や此のお客さんの着物をぬがもとてなァよう見たがあなひな色の褌じやあつたわいな　上方ヲゝそうじやあろぞい　彌次　馬鹿ァ云つせへおらァ木綿ふんどしはきちひだいつでも羽二重をしめて居る　初江（ヲホゝゝ）嘘やのあれゑやいし北八いかさま己らも見覺がある惜かにあれだろふ夫が嘘なら彌次さんお前へ。今裸になつて見せねへ。今朝ァ宿入の奴様で振て居るゑ遠へいねへ　初江　そうじやいし（ヲホゝゝ）是いし久助殿其の褌は。お客さんのじや取下んせ（ト庭にそうじして居る

男をよびかけ差ずすると此男竹箒の先にてかのふんどしをつゝかけてとりれんじの前へぐつと差出して）さあちばふんどしを。參らそうソレとらんせどうじやいな　初江ヲゝくさい　北八（ハヽゝ）彌次さん手を出しなせへ　彌次エゝなさけないおとをいふ己がのじやァねへと云に　北八　そんおら。お前へのを。おくつて見せなせへ（ト彌次郎が帶を解に掛れば振はなして其まゝにげ出して行）皆々（ヲホゝゝゝ）（ト大笑ひして送り出る）彌次エイいめへましひ北八めが己に赤恥をかゝしやァがつた　北八（三人共此所を立出　松にふんどしのぶらさがつたもめづらしひ

ふんどしをわすれて歸る淺間嶽。萬金玉を古市の町

斯て妙見町に立歸りたるに其日は空の景しき。いと長閑なれば急ぎ内外の宮巡りせばやと支度あらましにして立出るに行程なく今戻りし古市の上り口にはや見せ出して各々小屋にひきだつる。いにしへのお杉お玉が面影をうつせし女の二上りてうし（ペンペラ〳〵チャンラン〳〵）（ト むせうよ引立る唄のしやうがはあんとも分らず往來の旅人此女の顔に錢をあげつくるを夫々に顔をふりよける）彌次　あつちらの新造が歷へぶつゝけてやろふ（ト錢二三文なげるとち）ペラペラ〳〵北八　ドレ己が當て見せようハァ是はしたり上方何としてお前方がどないにほり附さんしても。的らが當さすきんじ

やないわいの　彌次今度は見なさ（ハア是わいな北八ヨヤ〳〵　繰ぐるみやらかしたな夫で
も富らぬコリヤ仕様が有。あんまり顔が惜い（トちいさな石ころを拾ひてなげ付るとかの
女はばちあてちよひと受。なげ返せは彌次
郎の顔へぴ）彌次アイタ、、北八（ハヽヽヽ）こいつはおほ笑ひだ　彌次アヽいてへ〳〵
つしやり
　とんだめに相の山とや打附し。石返したることぞかしき
斯て愛をうちすぎ中の地獄町に至る。左りの方に太翁寺といふ勝景の地あり又寒風と云
る名所もあり五知の女衆。中河原の樣々あるを眼なし。夫より牛谷坂迄に掛れい女乞食
共。けはい飾たるが往來に錢を乞ふ又十一二三の女共。紙よて張たる笠の色どれるをか
ぶりて。やてかんせ。お江戸さんじやないかいな。先な島さん花色さん類かぶりさん。やて
かんせ。ほうらんせ彌次やかましひ附ゐ〳〵　乞食アヽいはんすといなお江戸さんじや。
ちやと下んせ北八エヽひつ張なッレまくそ〳〵（トよいかげんにばら〳〵と錢を
んしたや　ほふり出せば乞食共各々拾ひて）ようト下
さつらを　（トひとり〳〵禮をいふ此先に又七八歳斗りの男の子白き鉢巻をして袖なし羽
織よ立付あとをはきたるが手にさいはひ扇子などを持師る彼に網笠着たる男
すり〳〵）ヤレふれ〳〵十鈴川ふれや〳〵千早振神のお庭のあさ清めをるやさつらのゑ
いさら〳〵エイさらさッレ天中じや張ひちじややてかんせ〳〵北八ソリャやてかんすぞ。

しかも四文錢だ乞食四文錢なら釣を。三文下んせ彌次こいつ出のいひとを云時に此橋ハ
宇治橋と云のか　上方さよじやァレ見さんせ網で錢をよう請てじや北八ドレ〳〵（ト橋の上より
覗き見れば竹の先に網を付て旅人のゐげ錢を受け留る）上方彌次さん小錢かわらばちよとかさんせ（ト彌次郎が錢を
とはふりなげる）上方ゑろふ面白いなよう受くさる。もちつとほつておまそかい。コレ北
下には皆請留る）
八さんお前もちとかさんせッレ又ほるぞ〳〵（ハヽヽヽ）ゑらい〳〵彌次コレ京のお人お前
人の錢ばかり取てなげるちとおめへの錢をもなげなせへ　上方よいわいるお前力の錢じや
てヽ。私が錢じやてヽかはりやせんわいの彌次それだとつてあんまりあたじけねへ　上方
ナニ私が此前參宮した時はな。きかんせゑらいあほじやあつたわいあこヽで錢五貫か拾
貫ほつたわいのあんまり面のにくゐ程よう受けおるさかい何じやろと今度は網やぶつて
こまそと。ふところに丁銀が一枚あつたを。つひとほつてこましたら矢張。網で受くさつ
たさのいコリャどうじやいな。丁銀ほつたら網が破りよかと思ふたに。ねからたわいじや。
として網に留りくさつた。しらんと云たりや。下におるやつめがソリャ留るはつゑやとぬ
かしくさる。ゐぜゑやと云ふとハヲ網の目に金留るじやと。ゑろうわしをへこましくさつ

たわいの（ハヽヽヽ）サァ〳〵いこわいなく

おげ錢を網よ受つゝ往來の。人を茶にする宇治橋の元

是より内宮一の鳥居より四ッ足の御門猿頭の御門をうちすぎ御本社えぬかづき奉つる是

天照皇大神にて神代よりの神鏡神劍を取て鎮坐したもう所ゐりと

日にまして光り照さう宮ばしら。吹いれ玉ふ伊勢の神風

爰に旭の宮。豐の宮より初めて河供屋。古殿宮。高の宮。土の宮。其外末社。悉く。記すに暇

ゐし風の宮へ掛る道に。みも裾川と云ふあり

引すりて幾代かあとをたれたまふ。御衣裳川の流れ久しき

すべて宮巡りの内は自然と感涙肝にめいじて有難さにまじめとなりて酒落もなくひだも

云ねばしばらくの内よ。順拜おはつて元の道にたちいで頓て。妙見町よ歸り爰にて。か

の上方者と別れ。彌次郎北八両人のみ藤屋を建立として外宮へ參る。是則豐受太神宮なり。

天神七代の始め。國常立の尊と申せし御神なり。神璽の宮。寶劍の宮。其外數多の末社を拜

み巡りて天の岩戸の登たるに彌次郎いかがしけん。しきりに腹痛みて。おやみけるゆゑ早

〳〵に此所をおりたち。かたはらに休そて丸藥など用ひ兎角するにたへがたけれゞ急ぎ廣

小路に至り宿をからんと其所此所を見廻す内ある宿屋の亭主モシ〳〵お泊じやおとせん

かいな北八アイ連の者が少し虫がかぶりそうだから宿をお願み申升す亭主サァむ這入り

なさんせソレお鍋奥へおともせんかいやい女能うお着でお升北八サァ彌次さんあがん

なせへ彌次アイタヽヽ北八エヽきたねへ顔をするお前へ（コリヤア）何ぞの罰が當つたのだ彌

次ナニサ罰を喰た覺へはねへ大方今朝の飯が當つたのだろう亭主お飯もあがりつけなさ

らんと當る事がおましよわいゐ北八（エヽコリヤ）いくじのねへ事たサァ〳〵奥へ〳〵彌次（アイ

タヽヽ）（ト北八にかいほうせられ坐）（癪に通る亭主も荷物を運び）さぞ御難義でおましよお藥でもあがりましたか。さね

わひわたくしのところの妻が今月臨月でお升がな。昨日からちとすぐれませんのでいん

ま醫者樣を呼に參じたがあおた衆見てお貰ひゐさんせんかいな彌次夫はどふぞお願を申

安亭主かしこまりました（ト勝ぎへ立てゆく彌次郎は）（しきりにくるしがる樣子に）北八どうだ湯でも茶でも酒でも呑

たくわねへか彌次馬鹿ア云な（アイタヽヽ）むせうに腹がごろ〳〵なる北八雪隱は何所にある

教てくりや北八お前何所ゐ慌た袂にでも弥へか彌次あほうつくぜナニ雪隱が袂にある者

だ何所にあるか見てくりやといふ事よ北八ハアそうかドレ見てやろう。あつた〳〵アレ
様側の先に落てある彌次まだぬかしやアがる（アイタタ〳〵）（ト漸々の事に立上り用たし）ハイ
お醫者様がお出たわいな北八サア是へ〳〵（ト此内近所の醫者の弟子と見へて。あげ
茶の木綿紋付に黒縮緬の肩のひけたる羽
織を引掛たる坊樣）ヱヘン〳〵是い不順な天氣あひで御坐るドレおそやく〳〵を（ト北八のそばにすわり北八が。みやくを
見よう）（北八）イヤ私しでは御座りませぬ醫者ハテ達者な人の脈から見くらべねバ病人の
とする脈がわからんわいの。まづ貴樣お見せあされ（ト北八が脈をとりしばらく考へ）ハヽア成程貴樣はおんと
もなゐ樣じや北八左樣て御座り升醫者お飯はどうじや北八ハイ今朝程飯を三膳汁を三盃
食ました醫者そうであろ〳〵。平は大方一ッ盃じやあろ替ては參るまい北八左樣で御坐
り升醫者そうじやあろ〳〵この脈体でいどうも何んともないようじや北八左樣で御坐り
升醫者ナントよう當りましたろふ凡そ醫は意なりと甲て脈体をもつて勘考致す所が第一
で御坐る氣づかいなひ最早お暇致そふ北八モシ〳〵病人を御ろうじて下さりませ醫者ほ
んにそうじやあつた。私はかはつた癖で兎角病家へ參つて病人の脈を見ることをどうも
わすれて成んわいの然し見ずともしれた事じやが。次手に見てしんじよ病人いいづこに

御座る北八ハイ只今雪隱へ參つており升コレ〳〵彌次さんお醫者樣が御坐つた早く出な
せへエ〳〵（彌次郎雪隱の中から）（ト大きな聲をすれば）イヤ未出られぬお醫者樣どうぞ是へお出下さりませ北
八エヽめつそうなお醫者樣がそこへ行る者かぶしつけなとをいふ彌次そんなら今でる
〳〵（トやう〳〵雪隱よりいづれは醫者）ハヽア貴公はコリヤ血の道じやわいの兎角臨月
（しかつべらしく彌次郎の脈を見て）
などにはおこるものじや彌次イヤ私は孕んだ覺へは御座りませぬ醫者ナニ懷胎で無ハテ
めん樣な（イヤコリヤ）わしが師匠が惡い廣小路の伊賀越屋から呼におよこしたが。あまの病
人は產月じやさかい大方血の道がおこつたのじやあろ。其つもりで藥盛がいヽとお敎て
おこしたが。そりや貴公の事ではなかつたわいの北八左樣で御坐りましよ血の道は爰の
内儀の事で御坐りませう。此男はそれでは御坐りませぬ醫者さよじやコリヤわしが間違
ひじやゐいの。然しあんなら貴樣も夫よして置かんすと藥盛も一所にして面倒にのう
て能がな北八成程コリヤお醫者樣のおつしやる通り彌次さんお前へも血の道にして置が
いヽや彌次とんだ事をいふ男に血の道があつてたまる者か醫者イヤ〳〵外の病氣も面白
かろ。何も私が稽古の爲じや一体貴樣は何病ひじや彌次私しは先刻から虫がかぶつてな

○彌次而有二此ノ醫者一是自然良能

りませぬ　醫者　大方ッリャ腹の内でかぶるじやあろ　彌次　ハイおつしやる通り腹の外では御坐りませぬ　醫者　そうじやあろコレ〳〵　女中。供の者に藥箱よこせと云て下んせ　女　ハイ〳〵かしこまりましたイヤもしお住の人は見へませんわいな　醫者　見へん筈じや連てこんさかい藥箱はわしがもつて來たわいの（トさげてきた風呂敷包を開き藥箱を取り出す）　女　ヲヽおかし。あなたは竹めヒで煎豆盛樣よしてじやわいな　北八　ハア聞へた藪醫者樣だからそこで竹のヒをお遣ひなさると見へた。そしてあなたのお藥袋には繪が書て御坐り升がどう致した事ゞないさかい　北八　ハヽアあゝた無宿者ナ　醫者　イヤお尋で面目ないが生得手習を致した事ゞない　醫者　左樣〳〵かいもく字がよめぬ無宿じやさかい夫で此樣ゝ藥の名を繪に書て置升じやて　北八　是は面白い左樣なら其道成寺の繪はゐんで御坐り升　醫者　コレハ桂枝じやて　北八　ゐんま樣は大方大黃で御坐りませうがコノ犬が火に當つておるのは　醫者　陳皮〳〵　北八　コノ產婦の傍に小便して居るは　醫者　しれたと山梔子　北八　印判に毛のはへたい　醫者　半夏　北八　鬼が屁をひつておるのは　醫者　夫は枳殼　北八　ハヽヽ面白い〳〵時にお藥は　醫者　煎じやう常の如し生姜は一ト〳〵ぎお入なさい　北八　わさびでいわるゝ御坐り升か　彌次　馬鹿ア云な是ゑ

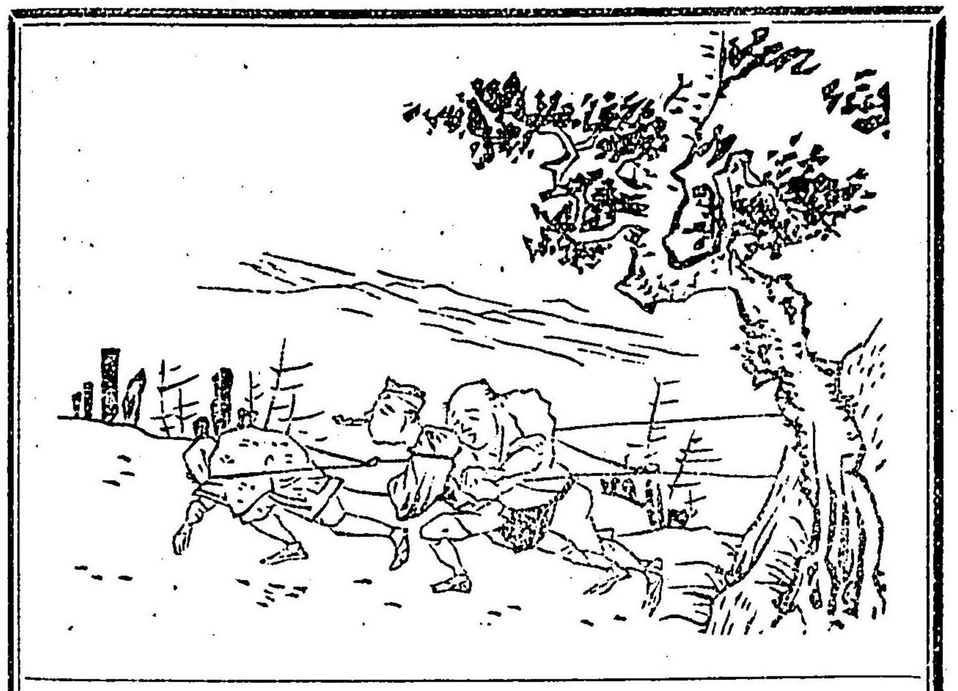
有がたう御坐り升（ト此内何やら勝手のかた俄かにさわがしく人の足音どん〳〵響き亭主の聲として）　コリヤ〳〵お鍋やい〳〵と　彌次郎がしきりに腹痛と出して）（アイタヽヽタ〳〵）　北八　彌次さんどうした〳〵　醫者　コリヤたまらん〳〵　病人のそばゐはおられぬ（トそう〳〵かけだして歸ると勝手の方ゝはヤレ取り上婆ア樣のお出と下女のお鍋がうろたへて婆々の手を取是へ〳〵と彌次郎が布團かぶりて寢て居る所へ連てくると取揚婆々　是はしたり寢て居さんしてはならんヲゐのサア〳〵起さんせ〳〵（ト彌次郎を引摺起せば顏をしかめ）（アイタヽヽタ）　婆々　しんぼうさんせコレそこな人狡いどうじやいな　彌次　アイタ〳〵　婆々　そじや〳〵（ト此婆々もうろたへたうへいつたい目が少しうとく内の產婦と間違ひ彌次郎が腰を引立〳〵）　サア〳〵皆きさんせんかひあ此〳〵爰へ來て誰ぞ腰を抱て下んせサア〳〵早う〳〵（トせき立るぞ北八はあきれかへりてをかしくこりやどうする知んとぼけた顏で彌次郎が腰を抱て引立れば）　彌次　コリヤ北八どうするアヽ痛へ〳〵　婆々　そなゐな氣のよはいとでは成んヲいな。ぐつといけまんせ〳〵　彌次　こゝでいげんでたまる者か雪隱へ行て〳〵。はなした〳〵　婆々　こうかへいて〳〵成んわいの　彌次　夫でもこゝで。いけむとあゝへ出る　婆々　でるから行まんせと。云の法やわいの（ソレウヽンウヽン〳〵）　そりやみそもう頭がでかけた〳〵　彌次（アイタヽヽタ）　そりや子ではねへ。夫をそんゐにひつぱらしやんな（アヽコレ）

○此兒長頭無二耳目鼻口

痛へ〳〵（トもがくをかまはぞばいわぐ）エヽ此婆々ァめ（ト横つらをはりと）此血違ひは（トむしやぶりつきかゝるさはぎのさいちう勝手）おぎやァ〳〵〳〵婆々そりやこそ生れたイヤ爰ぞやない何所ぞやいな〳〵（トうろたへ回るうち彌次郎もしきりにいたみ）（雪隱へはしりこむ亭主は勝手よりとんで來り）コレ〳〵婆ァ樣先刻にから尋ておるにもう生れたわいの。ばやう〳〵（ト婆々を引たて連行ば勝手乃方には）ざいん（ト悅びの聲共に亭主よ）さの聲目出たい〳〵三國一の玉の樣な男の子お生れた（〳〵してたちいで）コレハお客樣おやかましふ御坐りませう。先わたくし妻も安產致ました（トいふ内彌次郎も雪隱より出て）さて〳〵お目出度わしも今雪隱で思いれ安產したらばわすれた樣よ心よくなりました亭主夫はあるたりお目出たい北八お互へに目出たい〳〵（ト是より悅びの酒汲かはして取り揚あひて大笑ひとあるりけ）（ばゝの間違ひやら何やらかやら咄しる目出たし〳〵〳〵）

○六編

諺に。云ふ旅の恥は掻捨てゆく落書の磯所は欄干よ。とゞまりおのづから往來同國の人の目を慰さめ被り行聖の笠印は態と己れひとりの心をよろまばしむるも皆ともに驛路の業ぐれ相ひ宿の木枕に結ぶ緣は出雪の帳外。二方荒神の隣り同士は長屋附合の外にして其心〳〵に出る儘をしやべりあくまでよ喰ひ掛取道連にせざれば晦日の愁よあはず米櫃春負て出ざれば鼠追ふ世話もあく。名にしおふ東男も薩摩芋に髭をなで。花まだき京女郎も團子の串に頭りをかき。しらぬ火の靈すたはけに欠け落して走るあれゞ雲井路の道草喰ひ。遊山旅の。のろつくあり並松の根に腰打掛けて金比羅參りの樽を開き。街道の眞中に。ひよくり出して諸社順拜の鈴口を振る褌中のあり樣まとに命の洗濯もの引ぱり股引草鞋よ何國迄も足にまかする雲水の樂しみゑも云れず爰に東の都神田の八丁堀邊んに住む彌次郎兵衛北八と云る二人連のあまけもの神風や伊勢參宮より足曳さの大和路を廻り青丹よし奈良街道を經て山城の宇治に掛り。爰より都におもむかんと急ざける程に。やゞて伏見の京橋に至りけるよ。日も西にかたむき。往來の人足早く下り船の人を集める船道の聲々やかましくサァ〳〵。今出る舟じや乘んせんか大坂の八軒屋船じや。乘ていかんせんかい彌次ハヽァ是がかの淀川の夜舟だるナント北八京から先へ見物する積で來たが。いつそのまと此舟よ乘て大坂から先へやらかそうか北八夫もよかろふモシ乘合も有りやそか船頭そふさかいの。乘なら早う乘んせ。いつきに出すさかい。コレ〳〵草鞋とゐて乘



せ。ゑらいへげたれじやな北八エヽ何をぬかしやァがる氣のつゑヽべら棒だ　彌次　コレ北八手前の包も一所に己が風呂敷に包でおこう　北八　船頭さんコリヤア何所へすわるのだ　船頭　そこな坊樣のねきへ割込んせ　彌次　御免なせいヤアゑいとな（ト二人ながらともの間へ割り込みすはる）　乘合　コリヤゑろふつめくさつた船頭さん布團一ッかさんせ　船頭　ソレとらんせ。サア〳〵皆ゑいかひな下に居て下んせ苦ふくさかい　商人　錢買なされ錢はよこざり升かな　商人　水からさとう餅〳〵　商人　かん酒よこざり升かいなあんばいよし〳〵（ト此内船頭ども舟に苦をふいて仕舞ひ棹差出て唄）　舟は追風に帆掛て。走る我は。こがれて身をあせる

（ソウレソレ〳〵）あんだい。コリヤゑろふ空が惡る成たふろかしらんわい　乘合　船頭さんゆふべはちうしやう島じやあろ。精進が惡い。さかいコリヤ雨じやあろぞいの（ハヽヽ）時に何方もじよらかいて居ゑさらんか今の内味能せんと後ゑ工合か惡なるさかい　商人　コレお前ちと退てかさんせ粽の上にいしかつてじやわいゐ大坂の人コリヤ無調法鬼かく乘合はお互に何じやろとふしやうしてくんなされ　京都能いなお前大坂は何所じやいな大坂私や道頓堀京都かいな道頓堀の衆は皆藝子じやナント爰で何なと一やりなさらんかいな長崎の人コリヤよかたい。船中の寢ぶり目覺しにあなた樂。一ッ宛藝能やらしやつたらよかたい。うんどもは長崎の者じやが。能毛川島の南瓜枕で。鉾さしぼつきりでもやろふいいよヲ　越後の人コリヤゑいとんし。わしどもは。越後のものだが長崎の兄やさが。やらしやつたら。わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいと事　北八　こいつい面白へマア長崎のお客から始なせへ長崎人よか〳〵是しこやろうはい（トむしようよ）唄　お前よかばた。ゑしこ孫すて、大分色女とちぎらんせコリヤ蛙が飛なら桶かぶせ夫でも飛ぶなら。きぬおけ〳〵。コリヤ〳〵〳〵何じやいな乘合イヨ〳〵えらでけじや越後人私どもやるべい皆な大から

○彌次二十八番

（トコトン〳〵）といやしてくれさつしやい 長崎人よか〳〵合點あろふ（乘合皆々手を打たたき）（トコトン〳〵）越後人お長あ良人かんだ豆出たかお長な（乘合トコトン〳〵）越後人新潟一番水牛の櫛を（乘合トコトン〳〵）越後主よさつくれべいと六百文で求めた（乘合トコトン〳〵）彌次（ハヽヽ）面白へ〳〵京都イヤ江戸のお客に何ぞ所望しよじやなゐかい 彌次ツリヤもう琴三味皷弓何んでもちと宛はやりやすが爰よやアそんな物はねへからはじまらねへ 京都お前へのこらせさでは。聲色がでるじやあろ誰ゐと江戸役者やりなされ 彌次聲色も二十や。三十ばかりは遣ひやすが誰よしよふ源之助か三津五郎かイヤ高麗屋にしやせう然し江戸役者はお前へ方にやア。分らぬへから。つまらぬへ 大坂ハテゐいわいの一ッやりなされ 彌次味噌じやアねへが聲色は江戸でも一番といふ男さ誰でも後ろを唄ふ人があるとそつぱりやつて見せるがゐア京都 後ろ唄ふとは呼出しのとかいな私がやろわい口三味じや（チヽッヽン チンッヤン）唄是はお江戸の堺町や葺きや町に名も高き役者聲色はどうじやいな誰じやんゐ松本の幸四郎でせへ（チヽヽ チン）乘合イヨ松本ヲ 彌次まんまとうばい取た此一卷。是さへありヤア出世の手掛り大願成就疎じけなゐ 京都コリアやくたいじや。私や江戸に五六年居て此間。戻つたわいな

○桑名船中有小便ノ事今又綴ニ

高麗屋はそないな。こうせきじやないもせん者大坂わし一ッやろわいな京人是いねつからでけませぬ偖又次の役者名い誰じやいな 大坂やつぱり今のじや（ト此大坂者い江戸にも居て聲色もまんざ句も其まいでいふ）まんまと奪ひ取た此一卷 是さへありやア出世の手掛り大願成就疎けないトは無調法 乘合イヨ高麗屋ア京都コリヤさよとい〳〵大坂のお方のが。ゐんまじや。お前のい高麗屋とは聞へんわいな 彌次きこへん筈だコリヤア信州松本の者で幸四郎が弟子の胴四郎が聲色だ 京都そんゐこつちやあろぞいなハヽハヽ（ト船中彌次郎のへこんだのをおかしがりどつと笑ふ。彌次はしよげて）彌次時ゞ北八飛んだ事をわすれた船ゐ乘前に小便をすれば。だんまり此内船は早淀を過て よかつた者を例の通り船ではどうも。あぶゐくつて。しよくねまつた者だコレ船頭さん烏渡船を附て貰ひて〳〵の船頭あがるのかいの 彌次小便〳〵船頭エヽ船べりへ。ちよ〳〵。なつて。ひよぐらんせ〳〵。彌次夫が出きりやア云分いねへアヽもう〳〵出そうに成て來た（トうろ〳〵する此彌次郎北八ともの間と胴の間の境の所に居たるが胴の間三人どして居たりける先刻より布團かぶりて寢ころび居ながら）隱居モシ〳〵お前小用にお困りなら。ぶし付ながらわしがしびん借てあぎよかいな。コレ〳〵長松よ〳〵イヤまゐつ。もう寐くさつたそふじやモシ

小便ノ譴話ヲ余爲ニ一九ニ不レ取ラ

そこらにあろぞい。だんない。そつちやいもてかんせ（彌次夫はありがたふござりやそ（トく）ちがりまぎれに際をさぐり廻せば箱火鉢の後に土瓶あり上方にては是をきびしよと云今江戸にもたまさか見へたり彌次郎是をしびんと心ゑとり出してハアこゝに）御座りやした。こいつわ云んじやうゐ。しびんだハへ（ト持手の所を口と心へ前に當がへども穴なければさてい口よこめてあるせんが奥の方へ引まんだ者であろふとゆびを入てつゝきまはせ内しきりに小便がもる樣になり心はせくふたの落ちたをさいいひハゝアこゝにも口が有と上の方からシウ〳〵と小便をしてしまゐ）ハイありがたう御座いやした（ト隣へそつとやつて置隱居やがて起直り）コリヤろろふ寒なつわ長松起火イともさんかい酒なとやろわいコレ目イさまさんか〳〵コリヤやくたいじや（ト云つゝ苦の間からきびしよを出し彌次郎がしこまらさぐり廻して火鉢の火を。附木にうつし小）隱居ヤアコリヤ何じやゐハゝア茶を焚提灯へ點じて舟ばりにぶらさげきびしよを取て（んだ小便を川の中へ打ぶけて仕舞すぐに樽の酒をつもりで水がな入置おつたそふじや（トそあけて彼の火鉢の上にかけながら）隱居モシ江戸のお客酒一ト口どうじやいな北八コレハお樂しみで御座いやすね隱居もうでけたそうじや（トさいろうの煮しめゐど出し隱居少しつゐで）隱居ドレおかん見ましよかいイヤ是はけたいな香が。するペッ〳〵〳〵コリヤ酒が惡るなつたのか。よもやそじやあろい一ッお前呑で見て下んせ（ト北八へ杯をさす）北八ハイ是い（ヲトゝゝ）（ト引請てぐつと呑て仕舞ひしが何とやら臨からさよふにて變る匂ひのする酒だと心ゑ思ひながら胸をわるくしてなでさすり〳〵）ハイいたゞきやした隱居お連のお方へ上て下

んせ北八そんなら彌次さん夫（ト杯をまわす彌次郎い先刻より是を見てふしぎに思ひなんでもあれは己が小便をした。しびんだが夫で酒のかんをそると云いどうした者だ但しい己がそゝうでしびんと思て小便したのか何にしても飛んだとをしたと心の内にふたりが顔をしかめるを見ておかしさこらへられず夫としらずにあの内の酒を北八が呑たるを吹出す程おかしく。云つとこらへ居りし所へ盃を廻ければ）彌次イヤおらア御免だなぜか。今宵ハ酒が。呑たくねへお酒杯ばかりハイ夫へ上げませう隱居あがらんのかいゐ北八ナニあびるくらゐねさ彌次さんなぜ呑ねへ酒と云ふと一番に咽をぐひ〳〵するお前がコリヤア何んでもへんちきだはへ隱居ハゝアきこへたとが有わいの。今そつちやのお方が。くらがりでしびんと間違へて此中へ小用し込やさんせんかいの。どうも小便臭ねと。思ふたがコリヤお前そじやさかい呑んのじやあろぞい北八ソリヤ知やせん。桑名の渡しでも此人が船の中で小便して大さはぎをやりやした。其位のそさうはしかねん人さ。エゝきた糸へゲエイ〳〵隱居どうこ

○此ヲ是レ酒々曰ニ迷惑ト

そきびしよに何か一ぱいあると思つたが。私や又此童めが水人て置ふつたと思ふて川へほつたがどうでも小用のおどもりが残つて有たものゑやあろぞい北八とんだとだ腹がむか〳〵する隱居ア丶おりやゲエイ〳〵長松よ脊中たゝねてたもやア丶むさやのゲエイ丶彌次是はお氣の毒おモシ何ぞ藥でも上りやし。然し小便の當つたよは何がよかろかしらんモシ〳〵何方ぞ丸藥でも御所持あら少し下さいましな乘合ハイどうも小便の當つたによい藥は持ませんわい彌次ソリヤアこまつた者だ北八彌次さん苦を。ちとまくつて。くんあ彌次どうする北八はくのだはな彌次ドレ舟べりへ。ぐつと顔を出して遣つし已がつかまへて居てやろふ夫由か（シイ引〳〵）どふだまだエ丶川の中だから犬がいぬへでわりい北八ナぜ犬が居るとどうする彌次手前小便をはくよ白（コイ〳〵〳〵〳〵）とよんでやるは北八エ丶馬鹿アつくなゲエイ〳〵（ト此内隱居はやふ〳〵にはひて仕舞ひ川の水にうがいし口を洗ひて）隱居どう云やそつちやのお方ゑいかいの北八どうやらこうやらよくありやした（ト口をすゝぎてまじめな顔彌次郎は心の内のおかしさをかくして居る隱居けつこう人と見へて格別腹も立たぬらいめにあつた。こつちや口直しに。跡の酒やりたいあ。燭をする者かなふなつた。どうせうぞいの長松そしたらこつちやにあるほんまのしびんで酒のかん致しましよかい隱居ホンニそうじや。ほんまのしびんのほうが奇麗じや。藤の森で今日買て來たまゝで。まだ一度も小用せんさかいそれでかんせふねい北八めつそうなあやまりやすね彌次馬鹿ア云ふ茶ゝ土瓶の茶が味し酒のかんゝしびんのとだは北八ナニしびんの酒が呑るものか彌次そんあらモシ御隱居樣矢張いまのきびしよとやらに。なさいませ隱居きびしよは川へほつたわいの。しびんのほうが新らしひさかい奇麗ゑやわいの（ト樽の酒をしびんにあけて火鉢の上よ掛）隱居長松そよな茶碗をこせ。サア〳〵ほんまの酒じやソレお前方さそかい（ト茶碗を差出す彌次郎ちやつと引取）いたゞきやせう隱居虫の忍いお人ゑや看あげよかい煮殼あるかいあ彌次ハイ〳〵是は何で御座りやす隱居ソリヤ鯨の汕取た跡の身ゑやさかい煮殼ど云わいな彌次い丶物で御坐いやすね。サア北八さそうか（ト北八へ茶碗を廻ししびんお取てつぐ新らしさしびと呑で）北八小便の交らぬ酒は文格別だハイ上やせうか隱居皆乘合のお衆へ一ッ宛上て仕舞ふ下んせ北八左樣ならお隣りの（ト次に居た越後の人よさす）越後ヤレふとつ。いたゞくべいと（ト茶碗を取る北八しびんからつ沱にかゝる）越後ソリヤ小便のする燒たでじやア御坐らなゐか北八ナニ此しびん

は新しひから奇麗さ（トついでやれば）越後ァゝ云いとん〳〵サァ長崎の貴兄飲つしやるぐつとはして
か（ト茶碗をまわはせ）（ナイコリャ癪のどん空なとばよヲ）隠居だん〳〵そつちやのお方へ
ば長崎の人受け（ト其次の人へさす是は病人と見へて色の青ざめたるあかだらけの男襟に綿々捲て布團
上て下んせ長崎然らあんたへさんじ升たゐ（ト其次の人へさす是は病人と見へて色の青ざめたるあかだらけの男襟に綿々捲て布團
よりかゝり尤四人前斗り借切にして）病人私や酒はいかんさかいよなん一ッ頂戴かん
かいはうの親父と二人り連にて居るが）親父モシ〳〵。はばかりながら其しびん
せ（ト供の親父にゆづり先刻よりしびんの奇麗はぞかし段々茶碗をもとへ送りかへせば彌次
あることも聞居たる事なれば一向かまはず）
まつちやへ下んせ手しやくにやりましよかい（ト此親父酒すきと見へつゝけて二盃やら
郎兵衛取りつきて）彌次サァ隠居様あげませう隠居イヤお前ま一ッ呑でおこさんせ彌次ハイ〳〵
左様ならモシ其しびんこちらへ（病人の所の親父）ハイ〳〵それへ（ト しびんを送り戻す北八取て彌次郎へあみ〳〵とつい
でやる彌次一ト息にぐつと呑て茶碗を投出す）彌次エゝ〳〵こりやとんだこつた。ゲエイ〳〵北八彌次さんど
うした彌次どうした所かコリャ酒じやァねへ小便だ〳〵親父ハゝァ是はしたりそゝうし
ましたわしらが所の御病人のしびんと取違へましたサァ〳〵酒のは表にあるソレ取替て
下んせ北八ハゝゝゝ是つ大でき〳〵彌次エゝもうどうしたらよかろう此位へなら己が小
便を呑ましたしもアノ病人めがエゝわる嗅いゲエイ〳〵ペッ〳〵北八ハゝゝゝあ

の病人の顔をみな瘡と見へて頭から首筋の當り迄じく〳〵彌次エゝもう云てくれるな
咽がさける樣だ。アゝくるしひゲエイ〳〵北八兎角お前は小便がたゝる舟ではもう禁便
にするがいゝそこで一首浮だがどうだ〳〵
小便を人に呑せし其むくひ。已れ呑でよいきびしよなり
此騒動に舩中各々寢むりを覺し。大笑ひとなる内舟はや平方と云る所ぢかくなりたる
と見へ商ひ舩。爰にこゝに寄〳〵商人飯しくらわんかい酒呑んかいサァ〳〵皆起くされ。よ
うふさるやつら玄やな。（ト此舟に附て。這應なく苦引きひろげわめき立る此商ひ舟は。も
のいひがざつよ云を名物とすると人のしるところ也賣言どに買
こと）乘合コリャ飯持てうせい。ゑい酒が有るかい北八いか樣腹がへつた爰へも飯を頼み
ば）升商人我も飯喰かソレ喰へ其所やのわろは。どう玄やい。ひも玄そうな面してけつかるが
升商人我も飯喰かソレ喰へ其所やのわろは。どう玄やい。ひも玄そうな面してけつかるが
錢あゐかひ彌次イヤ此べら棒めら何をふざきやァがる乘合此汁は無味替りぬから。ぬる
うていかんゆい商人ぬるのァ水廻して喰ひおれ乘合何ぬかすぞい。そして此芋も牛房も
くさつてけつかる商人其筈玄やゑい所は皆内で焚て喰て仕ふたわい長崎イヤあやつ。糸
膳奴よヲ。いかな。ちうつるばつてん。そのぬしかよふばい越後頭部。にやして。やつくれ

○浦鋒日記乞食小屋

べいか商人ちよこざいぬかさずと。早う銭ふこせやい。コレそこゐ親父銭どうじやい親父此奸盗めらい。たつたいを取くさつてコリヤ早ういねやい。定めしおどれが女房妻は壹い袖乞して生米がな喰らふさのい今頃はぶつ〳〵と腹ふくらして白い淡吹て居よぞい商人ヲヽ我れが内は大方四條の浦鋒じやあろ雨が降そふじや水の出んさき早ういにくされ彌次イヤこいつらア云はせておきやア塗方もぬへやつらだ。横面ア張飛べすぞ乗合コレ〳〵お前腹立さんすなアリヤ爰の商なひ舟でわゐいよ。ものをぞんざいに云のが。名物じやわいの彌次夫だとつてあんまりな商人ワアイあほうよく（トこぎ出して行く）彌次コリヤまちあがれあやうたア誰がこつた（トー人。りきんで思はず立あがるひやうし）（アイタヽヽコリヤ）わらが膝頭ふんだ長崎うんどもが顔。ふう。大分よつた（アイタヽヽ）彌次コリヤ御免なせへ（トやう〳〵にすわる）斯て舩ハひら方過たるころ雨催ひの空。俄に暗くなり降出しあはやと見間ゐ篠をつく大雨となり。とまる漏ば乗合は上を下へと。さわぎ立船頭も斯てハはたらき自由ならず頓て堤に船をこぎよせ。しばらかく〻りて見合せけるが。爰は伏見と大坂の半途にして登り船も降り船も皆落合混雑し。がたびしと。岸に寄て今やと霽を待居たる

に。凡そ一時余り過たるとおぼしき頃。漸く雨やみ雲されて月の影八幡山にさし出たるに舩中各々勇みたち彌次郎北八も苦ひきあげ顔さし出して。此景色をながめ居たるが彌次ハアもう何時だろうな時に北八又こまつた事が有わい雪隠へいきたくなつた北八エヽきたねへ事ばつかりいふ彌次どうも船ではできぬ。イヤさいわひ爰にかゝつて居る内。ちよくり土手へ上つてやらかしてこよふ北八ホンニ余所の船でも人が手水に上るようすだ。早くそうしゐせへ。イヤわつちもお相伴がしたくゐつたモシ船頭さん鳥渡上つて來いが能かねへ舩頭用たしにゐら早ういてこんせわしらが今飯くて仕舞ふと直に舩を出すさかい彌次草鞋は何所だ北八ナニサはだしてあがろう乗とき足をすゝげば能に（ト両人船より堤に上りて）彌次ナントいゝ景色だゐ何所らでやらかそふ北八チツトそこには水溜りがあるもつとそちらへアゝゐるほどいゝ月だ

一刻を千金づゝの相場ゐら。三十石の淀川の舩

斯口ずさみて思はず勝景ゐみとれ居たるが此内岸にかゝり居たりし舟ども追々漕出す様すに北八彌次が乗たる舟も今でると見へて船頭共。もやひ綱をとき棹差のべて二人を呼

立るに何れの船にも乗合ハうち十手に上りたる者ども一度さよおりたち混雑し彌次郎北ハやう〳〵のとよ人を押分乗込たるは大坂八軒家の登り船也（此二人余り船頭に呼立られて大きに狼狽。今迄乗て来りし。伏見の船と心得其次にならびて掛り居たりし大坂の登り舟に飛乗たるが苦の内くらく間違たる舟とも。心附き此殊更舟にも居合の内堤に登りたる者とも二三人あれば夫らめと思ひて舟の中にもたがひに顔も容ちも。知れされハ是をとがむる者もあく其内舟は出るに任せ。各〳〵胃ひより咄しつかれたるにや。押合へし。相たがひよ足をやり違ひとなし寝たりけるお彌次郎北ハも。喧がり紛れそこらさぐり廻して手さわりよく。似れハとて人の風呂敷包を。我が包と心得引寄て直に夫を枕として打ふし天よりハ前後もしらずたかゐびきかり）去程よ船ハ右よ樟さし左りに綱しき登るよ早くも八幡山崎を跡にあし淀堤を打過夜も明け近くなつたる頃伏見にこそハ着たりける苦もる影も白く烏の聲告渡るに船着たりと乗合皆々目を覺し立さわげハ北ハ彌次郎も苦打ひらきて笠風呂敷包を手よ引提船頭が歩板を渡そを打渡りて岸よ登り舟宿に至るに乗合の人々つゝいて爰よ来るを見れハ見り

たる顔一人もあし是ハふしぎと。そこらうろ〳〵見廻しながら彌次ナント北ハおいらに酒を呑せたおん居殿ハどうしたの北ハされば。そしてアノ長崎者や。越後問者どもは来そうなものだが大方爰へよらずに行たと見るおいらハゆるりと爰で支度して出掛様さと（元の伏見についた）船宿の女どなたもお支度あぎよかいお彌次ヲイ爰へ二膳頼み升女ハイ〳〵（トたきたての飯に八はい豆腐の平を付て持て来る是は伏見の船宿のお定り也）彌次今日ハかう致そ是から長町の分銅河ハ屋とやら云ふ宿屋へ行てあれも大和の初瀬の茶屋でよおした書付の所だからあそこへ泊て直よ芝居でも見ようじやアねへか北ハおいらアまだ新町とやらを早く見てへ彌次ヲヽ夫もまんざらでねへの（アヽアッ〳〵〳〵）業的きにあつい汁だぺッ〳〵〳〵（此傍にも船上りの三四人連同じく支度をしながら）太兵衛さんお前虎屋の饅頭ハどしたぞいの太兵衛六兵衛さん聞かんせけたひあこつちや。昨日態々あはへいて。買て来てとんと大佛屋にわすれたわいの連人つい一ト走り行取こんせ茲からわずか十里ほかないもせんもの太兵衛ハヽハヽそう云てもくれんがよひハヽハヽ〳〵（此咄を聞て彌次郎ふしぎそうよ）モシあなた方が今云なさつた虎屋といふは。慥か大坂で御座いやすね六兵衛さよじやわいの彌次其

○伏見千萬ト所ニロ酒落ール

虎屋の饅頭わすれたとおつしやつた大佛屋とやらは何所で御座いやす六兵衛コリヤ新町橋西詰を南へ行とこゑやわいの彌次其新町橋南へ行所迄は爰からいくら程御座いやすね六兵衛茲からい十里ゑやわいの彌次はてゐァ大坂は思ひの外廣い所だノウ北八北八ナニサいゝかげんよ聞ひて居なせへ。わつちらをひやかすのだはな茲から十里あつてたまろ物か途方もねへ太兵衛イヤお前此を何所じやと思ふてじや。茲い伏見の京橋じやがゐ彌次ナニ伏見だコリヤ北八がいふとほり貴樣たちやァ人を。はぐらかそな。おいらァタベ伏見から。船に乘て來たのだはな太兵衛何いはんすやら。桃山の狐にかゐ。つまゝをた。もんじやあろぞい。皆こち退て居やんせ北八のひて居ろもすさまじい。そしておいらを狐付たァ何のとだ。江戸つ子だぞ。つがもねへ（トいさくさ半ば此大坂者の連と見へて二三人かけ來り）何じやい〳〵何せりあふてじや。そんなことより。まちやどゑらひめに合たわいの。こつとらが包を船でうしなうたさかいいんまの先まで。其せいらくしておつたが。根から。葉から。しれんわいの（トこゝ云ふ内ひとりが彌次郎が傍よある包を見付て）イヤ權助さんあこに有るいの。そじやさかい。わしがいふまいとか先へ上つた衆を問ふて見やんせと云たじやないかい權助ホンニ是じやわいゐ。（ト取りに

掛れゞ彌次郎ちやつとひかへて）彌次コリヤ何ひろぐ此包はおいらがだは權助ナニぬかしくさる。おどれら。やぼゐとはたらきくさるゐ。コリヤ見い風呂敷のはしゐ。こちの名が書てあるわい（ト云はれて彌次郎びつくりしよく〳〵見れば自分の包みでゐし肝をつぶして）彌次ホンニコリヤ間違つたソレもどすぞ。おいらがのは。何所にある權助あんだらぐせナニおどれらが包を誰がしろぞい彌次こいつは。つまらねへ北八どうした北八お前へ己がのも。一ッ所に包んで側よ置たじやァねへか。どうしておゐらがしるもんだ彌次ハテめんようなモシいよ〳〵爰は伏見に違へねへかね皆々ハゝハゝ何ぬかしくさるやら。アノ顏見やんせ。げたいな顏じやな北八ィヤこいつらは。ふてへ奴らだ權助太いも。細いも入るおつちやゐゐねい。かたでをどれらァ。奸盜もの包を。に別條なゐさかい。ゆるしておます。とつとゝ出ていにくされ彌次コリヤアとんだめにあふが。さつ張わからぬ北八どうしたのだろう北八さればわつちもわからぬ。ぜんてへタべい何日だつけ彌次ムゝこうと夕べあの自分に月が出たから大方廿四五日あたりだ北八今ン月ハ大か小かきのふは何の日だねへ彌次さればこうと此間ソレ何所でか泊た時。甲子だと。云たゑやァねへか北八ソレ〳〵あの茶飯ハ味かつた彌次平の午房の大きさ。あい

つゝ珍らしひ皆々ワハヽヽコリヤどうでも。できらは本氣じやないわいワハヽヽ（ト腹筋をよつて大笑ひする此中でも年ばひの太郎衛しばらく考へて）ハヽァ聞へた事が有わいの成程あんまりかしまうも見へん。盗わろ達じやさかい。人の物を。てまへる母どの。働らきはありはせんわい。コリヤこうじや。コレ其あわろたち夕べ伏見から乗んして途中で舟のかゝつたとき用達にのゐ堤へでも上らんした事があろがな彌次左様で御座りやす太兵衛ソレ見やんせ。こつとらが乗た舟にもわの時あぶりおつた人が大分ありおつたが頓て船が出と云と皆うろたへて乗おつた。其時。こゐんたちは下り舟と上り舟を取違へてめん〳〵

の乗て來た船と心得こちの船へ乗んしたものでかなあろぞい北八ホンニ左様で御座りやせう。わつちらも。船に乗た時くらがりでは有し取違へたとはしらずどうやら居所も違ふた様で御座いやしたが乗合のとだからまゝの皮とそれなりに草臥紛れにツィ寢てしまひやした今朝爰へ來て見りや乗合の衆の内に見しつた顔が一ッもねへはふしぎなとだと云ていやしたのさ彌次そういへば成る程今のさき舟の上り場でハテ見た様な所だと思ひやしたが見たはづだやつぱり初手の伏見だ者ハヽ必竟夫故お前方の包をわつちらがのだと思つて相飛致しやした北八是でものがさつぱりわかつた彌次イヤわかるとたァ。わかつたがおいらが包いどうしたろふ太兵衛夫もわかつて有わいおお前方の乗んしゝ下り舟よ包斗り殘つて今頃い。おさかの八軒屋に。風呂敷包がうろ〳〵とお前方を待て居よぞいなハヽヽ北八とんだ目にあつたいめへましい彌次まゝよどうするもんだ金は胴巻に入れて持て居るから高が包は手めへと已が着替斗りだ。うつちやつて仕舞へそこらハ江戸ッ子だは（トおしけきれ共先方なく是から又舟に乗て大坂へ戻る行も馬鹿〳〵しひとみぐに京へ行つもりに相だん極めてたち出れば此人々も夫〳〵に姿を立出けるに北八彌次郎氣ぬけした顔付にてぶらり〳〵と京海道に差掛り）

つ不包
隱疑惑
判然

伏見出て淀の車がまたあとへ。廻り廻つて來たは何事
夫より伏見の町を打過ぎ墨染と云る所に差かゝりける。爰い少しの遊女あつて軒毎に長
簾かけ渡したる内より顔のみ雪の如く白く。青梅の布子に黒天鵞絨の半襟でおしろい。
べた〳〵付たる女走り出て彌次郎が袖をとらへ女もしな這入なされ。ちよとあそびんか
いな彌次なんだよせへ〳〵（ト振切れバ又女北八をとらへ）女おまへさんどうぞやいな北八こうじやいな
（トべつかこうをする）女ヲヽすかんまちやいな北八イヤいなの三郎義秀でも泊らんのだエヽはな
しやアがれ女ヲヽこは（トおつぱなして内へ這入る）彌次ハヽア爰が跡できひた墨染だな
黒染のおめやの顔の眞白さは。石灰藏のねづみまろもか
深草の里は家毎に。燒物土物細工を。商ふ見ゆれバ
やき物の牛の細工に買ふ人も。涎たらして見とれこそすれ
斯て藤の森に。至りけるに
稲荷山松のふぐりにかゝれるは。ふどしのさがり藤の森かな
茲に稲荷の社をふし拜みつゝ北八ナントそこらで一ッぷくやろうじやアねへか彌次能か

ろふ〳〵（トよしずたてかけたる茶見世に這入て彌次郎）ヲヤ醴酒が有のばアさん一盃くんなばゞハイ〳〵ぬく
うしてあぎよわいな北八コッ彌次さん茲のばアさんがお前へに氣が有と見へてアレこつ
ち斗り見ておかしゐ目付をすらア彌次馬鹿アいへばアさんどうだ早くくんゐ。ば、まち
つと待ておくれんかいゐ。（トいゝつゝ此ばゞ彌次郎の顔を見ては噺き見ては噺さするゆえふしぎに思ひ）彌次ばアさんどうぞ
したかお前へ目が悪いのかねばゞわしやお前の顔を見ていこうかなしふてならんわいな
彌次ソリャどうしてばゞワアイ〳〵北八こいつはおかしひばアさん何がかおしひばゞわ
しや此あひだひとり息子をうしなうたが其息子よアノお方が似たとこそ云へ〳〵彌次ハ
アおいらよ似たとかへ夫じやアお前への息子もいゝ男であつたろふにおしいことをしたば
ゞソレ其どうまん壁のもの云からお前の樣にやつとあらいみつちやが有て色が黑うて鼻
は獅子鼻とやらで目のいつかい所迄が其まゝじやわいな〳〵彌次夫じやアわつちが顔の
悪るい所斗りがよく似たの北八悪いとこはかりも氣がつゐゝいゝところは一トつもねへ
もせんものをばゞそれ斗りじやあいわいの。アノ片小鬢の禿さんした所までがっあおいに
も似るものかいな彌次人の顔の店おしろが落んだら其醴酒を早く呉るばゞほんにわすれ

たわいゐ（ト茶碗二ッに醴と汲で差だすふたりながら是を呑で）北八ごうぎにうすゐ醴だばゞうゝもゐりまし
じやあろ。わしやかなしうてッイ涙を其中へおとしたわいゐ彌次エヽとんだをを涙ばか
りならまだしも。見りやァお前へ水鼻をたらして居るが夫も此中へ落やせんかねばゞわ
しや見なさる通り三ッ口じやさかい鼻水とよだれを一トッに其中へおとしたわいな北八
エヽコリャゐさけないとを云ゐねつはもう呑ぬ彌次おらァつゐ呑で仕舞たいめへまし
ひサァ行ふ北八ばァさんいくらたばゞハイ六文宛下んせ北八水鼻はおまけだのァイお世
話ぺッく（ト茲を立出でふりかへりながら）
繰事に涙を交て水鼻も。すゝりあんだるうべがあまざけ
斯でふたりは足にまかせてたどり行程に段々都近くなつて往來殊に賑敷人の風俗も自然
と温順よして然も衣裳ハ花やぎたる女の衣裳ようつゝぬかして見とれ行うち早くも大佛
前に至りて北八チャく〳〵ごうせへゐお寺だアレ山門の上から佛様が覗いて居る彌次ハヽ
ァ是が彼の大佛だはへゐるほど咄しに聞たよりはごう敵な物だそして此石を見やれゐら
いく

大佛の御堂は実に入とてや。是ハ大きな者の天じやう
斯よみて山門の内よ入やがて御堂に登りける。
大佛殿方廣寺本尊盧舎那佛の坐像御丈六丈
三尺堂ハ西向よして東西廿七間南北は四十五
間あり彌次郎北八茲に法施し奉つりて彌次ナ
ント咄に聞たよりか。ごう敵なもんじやァね
へかァノこうして御坐るお手の平へ疊が八
疊敷るげゐ北八狸の金玉と同ぢことだゐ彌
次もつてへねへことを云ふそしてアノお鼻の
穴からは人が傘を差て出らるゝと北八ソリ
ャァまだしも人が差て出るからいゝが己らが
方の棒だら八が鼻の穴からは瘡がひとりでゐ
吹出したは彌次馬鹿ァ云なお後ろへ廻つて見

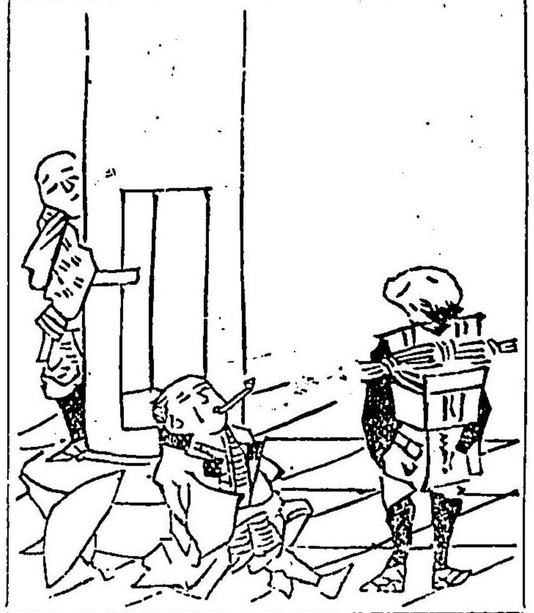
よふヲヤお脊ナよ窓が明ひてゐらア 北八 あれは大方汐を吹ところだろふ 彌次 ナニ鯨じやアあるめへし 北八 ヲヤ〳〵アレ皆なが柱の穴をくぐつて居るは 彌次 ホンニこゐつは奇妙〳〵（ト此御堂の柱らの元よは參詣人のくぐる丈けの圓ぬき穴あり田舍同者どもたはむれに是れをくぐりぬける） コリヤ面白い然しおゐらいくぐられるが彌次さんは太つて居るからぬけられめへ 彌次 已だとつてナニ是が（ト北八を引のけ四ッばひになつて柱の穴へからだ半分程はゐり掛て一向よぬけられぬ跡へ戻ろふとするに脇差のつばが横腹よつかへて痛みおらへられず彌次郎顔を眞赤になし）（イヤイヤイヤ）コリヤひよんな事をした 北八 ヲヤどうした拔らきぬへか 彌次 コレ手を引ぱりてくりや 北八 ハヽヽこいつはおかしひ（ト彌次郎が兩手をぐつと引ぱる） 彌次 アタ〳〵 北八 よはい男だ。ちとしんぼう。すればいヽ 彌次 あとの方から足を引てくれろ 北八 承知〳〵（ト後へ廻り兩の足をとらへ）ヤアゑんさア〳〵 彌次 あひた〳〵 北八 ちとこらへゐせへよつぽど出かけた樣だヤアゑんさ〳〵 彌次 アヽまつてくれ〳〵腰骨がおれる樣だ。コリヤやつぱり前の方から引出してくれ（ト云北八又前へ廻り）北八 やアゑんさア〳〵ソレ又こつちへよつ程出て來た 彌次 コリヤたまらぬ（アイタ〳〵）北八 是ではいかぬ初手の樣に又後へ引戻してくれ 北八 エヽ色々なことを云（ト又後ろから足を捕へ）ヤアゑんさア〳〵 彌次 まて〳〵〳〵コリヤどうでも前の方から引て

○空班
敢舉動

貰をう 北八 エヽそんなに前へ廻りたり後へ廻つたり引出しては引戻しいつ迄も果しがねへコリヤいヽさんたんがある（ト そばに見て居たり し參詣の人を賴んで）北八 モシどうぞこつちからお前へ引ぱつて下さいませわしがあつちへ廻つて足をひきずり出し升から 彌次 馬鹿ア云な兩方から引ぱつては出る瀬がねへ 北八 でる瀬がおくても兩方から引ぱると前へ廻つたり後へ廻つたりする世話が無て能わお（參詣の人）イヤ兩方からあのさんの體を引したらッイ出られそうな物ゑやあろぞい 北八 コリヤいヽとがある酢を一升も買て來て彌次さんお前へに呑せよふ 彌次 ゐぜ酢を呑とどうそる 北八 ハテ酢を呑と瘦ると云とだから（參詣の人）ハヽハヽ〳〵そゐいゐといふたとていんまの間に合ふこつちやゐいさかい。こうさんせ何所ぞへいて槌借て來さんして頭の跡の方へ打込んしたが能わいの 北八 成程ゐいつが早い理屈だ然し夫では命が有めへ 參詣 さればそこはどうも請合れんわいの（ト此内旧舍同者一人）コリヤハア氣の毒ゐこんだアのし。わしはハア遠國のもんだアから。あにもしり申さぬへが人の難義さつせるこんだア愚意のう云て見升べいか 北八 どうぞあの人のたすかる事が有ゐら云て聞してくんなせへ 同者 ハテ夫だアからのこんだアよ。あんでもあの人の足の先さを切割

つせへて。山椒粒のう。はさまつせへたら。ふとり出よつんぬけべいのし北八ハヽハヽそりや蛇が女に見込だ時の事だろふ。どうせそんな事であろうと思つた 參詣コリヤ私がちゑかそわいの。何ぞやろとあのさんの體を和らかにして引出すがよかろさかいまうさんせ土砂とて來て掛さんせいの田舍すんだら土砂クウぶつ掛ず と一番の桶さァ買て來なさろ。手足をちと。ペシをんまげたら。這入べいのし彌次エヽいめへましひ事を云。むだどろじやヤねへ。北八早くどうぞしてくれぬか 北八待なよハヽアお前へ脇差の鍔が横腹へこだわつていてへのだ（ト手を差入てひぬくり廻し。）彌次いか樣是でどうかくつろぎが有ようだ 北八ドレ〳〵ィヤ時にどなたぞ前の方から押出して下さねませ。わしが足をもつてこつちへ引出し升から。ヤアゑんさァ〳〵（參詣の人）ソレ出るわいの。まちど ぞや。いかません彌次（アヽウ）北八（ハヽ）出る奴がいけむから大笑ひだ 彌次アヽいてへ〳〵 北八しめたぞにんやァ〳〵ソリヤ出たぞ〳〵（トやう〳〵の事にて引出せば彌次郎大あせをふき〳〵ほつと溜息をつきながら）ヤレ〳〵有難へコリヤ何方も御苦勞で御坐いやした。わつちやァ伊勢の泊りで。產をしやしたが產ひよりか生る身はよつ程せつねへ。コレ着物が摺切てあばら骨が今にぴり〳〵する

かさ差して出るお鼻より柱ゐる。穴おそろしや身をすほめても斯よみ興ぞて大笑ひとゐり夫より御境内を巡り蓮華王院の三十三間堂にいや高ら五重の塔に競べ見ん。三十三間堂の長さを



是より此御門前を北へさして行に往來殊よ賑しく。げにも都の風俗い男女共に何所となく柔和温順にして馬士荷歩持迄も洗濯布子の糊こわきを。折め高よ袋ゐして。あのおしやんす事わいなと。なまめきたるもおかしく。二人は輿に乘ぞ目に見る物毎よ。珍らしと。たどり行うち俄に往來。騷立て。老若うちまぞり走り行人毎に。ホウホイヨ〳〵。ねつこらさつさホウホよい〳〵ねつこらさつさ彌次ひしやうよ人がかけるい何だイヤ向ふに何か有そうで。すさまぞいい人だ（〳〵モシ）何で御坐いやしね（向より來る人）あこにねらい喧嘩が有わいの北八京の喧嘩も珍ら

○不レ知魚之置腐

しかろふ（ト足はやに行て見るに見物山の如く往來もならぬ位にあるに二人りは人を押分〳〵是を見れば彼の喧嘩の一人は香麗と見へてそこに半臺おどおろしてあり相手はじよく人体の男いづれもくつきやうの若者ありされど都は人の心もゆうちやうよしで喧嘩と見ゆれどさのみ頭からだゝき合もせず日常りのよき所に二人り向ひ合ふて）

者医コレイノヨが身の方から行當りくさつてそないなとふいふもんじやないわい。己れ。のうてんと打ておきそかい（相手職人）おきくされこなんが手のうごくのに。こちやじつとして居やせんわい（ト云つゝ手ぬぐひをていねいに折て鉢巻をする）者やようおとがひならそ。わろじやな一体ヨりや何所のもん衣やい職人おれかい。おりや堀川姉が小路下ル所衣やわい者やな名は何と云ぞい職人喜兵衛と云わい者やとし年はいくつじや職人廿四じやわい者やおきくされ己れ廿四にしちや。ふらう若い盛つきくさるゑ職人なにいふぞいはんまじやわい前厄でことしは嘸めを死ゑしたわい者やソリヤふらい力落し折たじやあろ。ふい氣をさらしたゑ職人イヤそれはかりじやない乳のみくさる。がきめがあるさかい。ふらいなんぎなめに合ふたわい者やそじやあろわい己や己れに二ッ上衣やわい職人そふぬかしくさりやわれも若い内は何所衣やぞい者やいつ一條猪熊通り東へ入所衣やわいしよく人かいやい。あゑに旨で目の見んす伯といふ針醫があろがな者やヨ、針醫がありやどうすりや職人イヤゑちの一家衣やさかい己れ歸へさるなら云傳してこまゝ者やいや衣やわい。何のわれが云傳能が云をぞい。ふらいあほうじやな（見物の人欠びし乍）十兵衛さんもういのかい十兵衛またんせ今ゑ打合じやあろ見物イヤわしや内に客ほつておおてきたさかい十兵衛そしたら其お客連てこんせ。序にうすべりなど一枚くさんせんかい（又あちらの方に居る見物軒下につくバひ髭をぬき〳〵）見なされ。あつちやのわろが。どしてもふらい。やつ衣やわいな見物イヤこつちやの男もふらい頤じやわい見物ホンニ其頤で。思出たお家はどう衣やいゑ痛所はふいかひな見物ハイおかたじけなふ御坐り升。とんと衣いやうで有たがな昨日からふろう惡なつてツイ夕べ死にまたわいゑ見物ソリヤお前御愁傷ふであろ御葬禮はいつじやいゑ見物今ま出しおへ升とこじや。あつたが。ふらい喧嘩があると人が走るさかい。わしもツイいて見て戻る程に夫まで待てと云てまたして置ゑしたわいな（ト向の〳〵氣の長ゐ者斗ゆう〳〵と見物して居ると。かの職人の男）コリヤヽイまちと。こつちへ據くされ日向がなふなつて寒おつたさかい者やヲヽようたがどうすりや職人おのれいま己が事をあほふと。ぬかし居たが。何で己があほじやぞい者やあほ衣やさかいあほ衣やわい職人なにぬかしくさる。そう云ヨれが。あほ衣やわい者やイヤこち

やあ、じやない賢ぢやわい職人我が賢ありや己も賢いわい　者やヲヽ我も賢いがそしたら
此喧嘩やめにせうぞい職人サアひよつと。互ひにせり合て着物でも引さゐたら損ぢやさ
かい。やめにして。こさそふかい者やゐらい遅なつた。もういんでこます　職人己も我がい
にくさる道じや程に連立ていんでくりよわい。今日はゐい天氣じやわつたな者やあたゝ
かうてゐいわいやい（トたがひにあひさつして此ふたり連立て歸る。見物もこそ）彌次（ハヽ
ハ）成程上方者い氣が長ゐあんな洲のろひ喧嘩が何所に有もんだ北八あの中で損徳を考
へてやめにしたから大笑ひだ

公卿衆の居ます都は自から。喧嘩止るも歌とよをなり

斯打與じはやくも清水坂に至るに兩側の茶屋軒毎にあをぎ立る田樂の團扇の音喧すきま
で呼立る聲々モシナお這入なされ茶々上りておいでんかいあ名物鯰波うどんあがらんか
いなお休なされ〳〵彌次何ぞ喰てもいゝがもつと先へ行てからの事にしよふ（トほどな
にいたり境内をめぐり音羽の瀧を見て）く清水寺

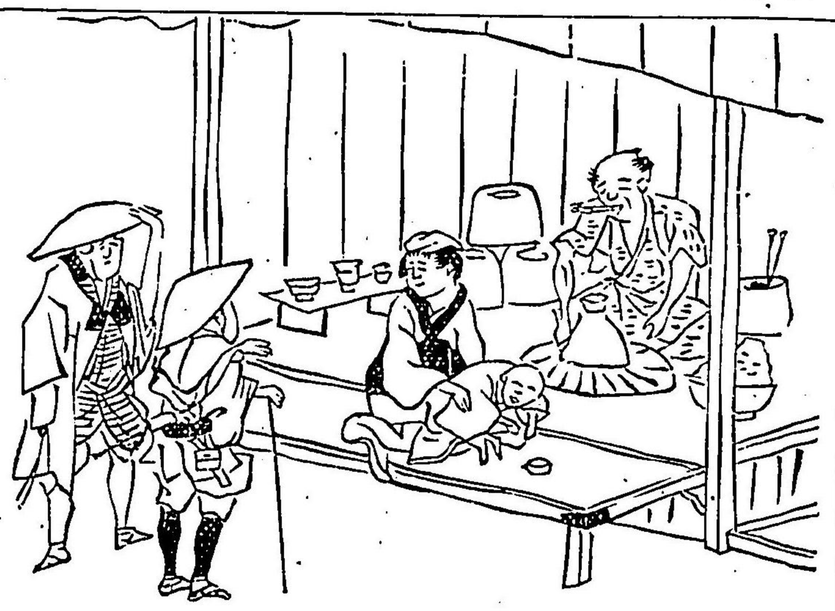
名にしおふ音羽の瀧のあるゆゑか。登りつめたる清玄の戀

本堂は十一面千手觀世音也。昔し沙門延鎮が夢中に得たる靈像にして坂の上田村丸の建
立とぞ。北八彌次郎しばらく此の寶前にやすみながら

境内に植し櫻いもさまなく。手も澤山な千手觀音

傍らの小高き所ゑ机をひかへたる老僧參根を見掛て當山觀世音の御影は是から出ずぞ。
誠に靈驗あらたなる事は盲がものいひ啞の耳が聞へあるいて來たいざりがなゐる一度び
拜もる輩は。いかなる無病達者なり共。たちまち西方極樂淨土へそくひ。取んと　御誓願
いや。何あたも頂戴てお歸りなされ。冥加錢を澤山にお心持次第御信心の方ゝ御坐りませ
ぬかゐ北八よくしやべる坊主めだ時に彌次さん彼のうはさゑ聞ひた事を差て飛といふゝ
此舞臺からだな僧昔しから當寺へ立願の方は佛に誓ふて是から下へ飛れるが怪我せんの
が有りがたひところじやわいな彌次爰から飛だら身体がみぢんになるだろう　北八おり
〳〵は飛人が有りやすかね僧さよ玄やわいな。ゐて氣のふれた。ゐろ逞が來て飛おるがゐ
此間も若い女中が飛れたわいな北八ハァ飛でどうしやした僧飛で落さわいの北八落て夫
からどうしたね僧ハテ根どひずるわろ玄や此女中ゝ罪障が深いさかい佛の罰で目を廻し

たわいお北八鼻は廻さなんだかね僧イヤ痛と見へて鼻はなかつたわいな北八そして氣が付やしたか僧氣がついていんだわいお北八いんでどうしたね僧さて〳〵しつこい人だやそれ聞ひて何さんすぞい北八イヤわつちが癖としてきゝかけたとは金輪際聞て仕まはねば氣がすまぬといふ者だから僧夫なりや云てきかそかい。夫から其女中が全体其下地もあつたかして俄に氣が違ふたわいの北八ハテナ氣が違つてどうしたね僧百萬遍を始たゐいの北八百萬遍始めてどうしやした僧鉦を叩て北八鉦を叩てどうしたね僧南無阿彌だん佛北八夫からだうどね僧南無阿彌だん佛北八コレサ百萬遍



のあとはどうしやした僧南無阿彌だん佛北八そのあとはよ僧ハテ世話しない百萬遍だわいの。マア念佛すましてからのこといの北八ユヽ共念佛百萬遍すむまで待て居るのか。途方もねへ僧イヤてゐさん聞かけたとは根堀葉堀きかんせにやならんといふたじやないか。いまちと辛抱して聞んせいお退屈なりや。てなさん達も百萬遍手傳ふて下んせ北八コリヤ面白かろう彌次さんお前もこけへ掛なせへサア〳〵南無阿彌だアん佛僧迎もの事に鉦入てやろわいな（トむしやうに鉦を打ならして）ハア南まいだア（チヤン〳〵）北八コリヤどうてきに面白くなつた南まだア〳〵僧わしや手水してくる内頼み升（ト北八に鉦をつきつけどこへやら行てしもふ北八は夢中になり）ハア南まだア（チヤン〳〵チキチン）彌次てめへ鉦の打きやうが下手だてつちへよこせ北八ナニ如才が有もんか。チヤン〳〵。南まだア（チヤン〳〵）（ト夢中よたゝき立さわぐゆゑ内陣の番僧いで來り此体を見て肝をつぶし）番僧（コレナ〳〵）わごりよ。たちは。どうしたもんだぞい。勸化所に上つて無作法な（トしかられて二人りは心付きまよろ〳〵して）北八ハア今の坊様は何所へ行た。まだ中回向も。すまぬ内番僧ナニたわ事云のじや。茲を何所じやと思ふてじやぞい北八ハイ茲は清水あつ盛さんの墓所とけつかる番僧コリヤ己れ氣が間違ふておると見へる北八氣違ひゆゑに此百

○撒ノ小便ヲ買フ大根ヲ是レ非ニ異ノ小便ニ

萬遍番僧ナニぬかしくさるやち。とつと、出ていなんかい。茲は御新廻所。じやぞ（トこは高に云ふ内勝手より棒つき出おひはろふに）北八づくにうめがとんだめにあはした

二人りはそう〳〵此坂をおり立て

舞臺から飛だ咄しは清水に。冷かされたる身こそくやしさ

此山内を下り。ゆくさきに清水燒の。陶造り軒を並べて往來の足をとゞむ此所の名物なり

天道の惠みもあらん陶物師。大日山の土を製せば

斯て其日も早や七ツ頃とおぼしければ急ぎ三條ゑ宿をとらんと道を早め行向ふより小便擔と大根を荷なひたる男大根小便しよ〳〵北八ハ〳〵唐茄子が笛を吹いた見世物は見たが大根の小便するのは。ついに見たとがねへ彌次あれが。かの大根と小便と。とつけへにするのだろふこゑ取おつきな大根と小便しよ〳〵（ト呼でいくこなたよりお仲間らしき乞みたれの男が二人り）コリヤ〳〵わしら二人が茲で小便してやろが其大根三本。おくさんかいなまゑ取マアこち來てして見さんせ（ト此所の辻へ二人を連てゆく辻い江戸でいふ新道なり彌次郎北八是を見てだふするのだしらんと跡より付て行き立留り見れば）こゑ取サアやらんせんかいな（ト小便たごをおろし）コリヤわし先道わい（ト此たごの内へ二人なをすと一人の男）こゑ取たご。を片げ見て）もうこれぎり出のかいな仲間うちどめに屁が出たからもう小便は夫切じや

わいなこゑ取コリヤあかんわいま一度ようす體を振て見さんせ中間ハテ小便くすねて置て何せうぞい有りたけしたんでのけたわいなこゑ取夫じや大根三本はようやれんわいな。二本もてかんせ中間コレ小便はすくなふても。まちとらがのは。品物がゑいわい。餘所の茶漬バかり喰て。おるのとは違ふてこちや肉斗り喰ておるがるこゑ取夫じやて、あんまりじやわいな仲間ハテやかましう云んすな。内へ持ていんで水交りや三升斗りには。なろぞいな。早う三本くさんせ〳〵こゑ取そなねにくせ〳〵と云たて、。ずでくさるもんじやなねわいな。そこら〳〵いて茶など呑で來てまちとやんせ〳〵（トゆつかへしつ云て居を二人はおかしく見て居たりしが）北八もし〳〵幸ひわつちが小便仕度なつたからぶしつけながら。お前へ方に上やせう是をたして大根三本取なせへ仲間お心ざしはお添けなふ御坐り升が。夫じやお氣の毒樣じやわいな北八ハテい、わな。どうせわつちも有合せた者だから。餘り輕少なれど仲間左樣ならお小便頂戴まゑよかいな（ト小便たごを北八の前へ持ち來りなをし）北八イヤ〳〵やつぱり夫にお置なせへわつちがのは。一二間つ、向ふへ走り升こゑ取コリヤ。きよとい〳〵。イヤお前のは地ではなねわい。兎角小便は關東が能御坐り升。地の、湯ふて直打がなね北八ちつ

と早いとまだ出た者を。わつちは生れ付て小便近いから不圖小便桶を首ゑ掛て歩行た男さ仲間そりやおうらやましひこつちやこゑ取さよならお前此桶ゑ首に掛てお出んかいな

わしや何處迄もお供していこわんな北八イヤ近頃は其樣にもねへのさこゑ取お連樣も有

そうじやモシお前も序に手水してお出んかいな彌次イヤわしは前方は一度に小便の壹斗や貳斗する分はねから沓ゑも思はあんだ者だがどうしたとやら近年は小用迫りでさつぱり出ぬにはこまり果るこゑ取ハア小用づまりあらゑいとが有わいな。いつさに。ようなるこつちや彌次どうすると能くなるのこゑ取アノ酒屋などで酒の樽の呑口から思ふ樣に酒の出んとが。あるもんじやわいな。そゑゐゐる時は樽の上の方へ錐ゑみして穴明ると直に下からシヨ〳〵と酒がはしる者じやさかいお前の小用の。つまらんしたのも。ひたへぐちへ。錐もみさんしたら。直に小用が通じるじやあろそいな北八ハヽハヽこゐつは出來た時に。おそくあつたサア行やせう（ト二人り三人連れ流石ゑ都女郎の風俗しなやかにて何れも色白く透き通る斗りの代物）ヒヤア〳〵生た女が來る奇麗〳〵彌次串戯な女共だ皆な着物をかぶつ

てゐるは北八あれが被と云者だのア、美しい奴に已がものを云て見せよふか（ト頓てかの女中の側へ走り行て）モシちよものがお尋申たい是から三條へいどう參りやすね（ト聞に此女中御所方と見へて飛だ大へい也）我身三條へいきやるなら此の通を下りやると石垣といふ所へ出やゐ程に夫を左りへいきやるとツイ三條の橋じやわいな（ト一体御所方の女中は人を何共思はずちときいたふうの男ゑ見ると惡くゝやかす風ゆゑ北八ハイこれはあ

りがたう御坐りやす（ト何もしらねば禮をいつてしばらく行すぎ）彌次さんアリヤア何だろふごうてきに大風な女どもだ彌次ハヽハヽとんだやすく取扱はれヤアがつた。どうさらしめ（ト夫より頓てかの石垣と云るを打すぎ左りの方へと教へられたる道筋を二條へ行と心得早くも五條の橋に至り一はるかや日蓮の往來のなどう參り升な北八ハアわが身しる谷へいきやるゐら此通を直にいきやるとツイしる谷へ出やる程にソレころんだら起いきや牛の糞を蹈附たら遠慮ないにふいて行やれ往來の人

イヤ此奴ぞんさいなものゝぬかし様じや爰なあんだらめが北八ナニあんだらたァ何のと
だ道を聞からおしへてやるのだは往來イヤ細言ぬかすあい。どたまにやしてこまそかい
（ト此男の連と見へたるが二三人たち掛るを見ればいづれも見あぐる如き大男共腰に長脇
差を横たへものいゝかつかういかさまにも各々角力取らしき者共なれば北八たちまちし
よげかへりて）ハイ御免なせへ彌次あぬつは生醉だから何方も了簡してくんなせへ角力取イヤ了簡ならんわい。おどれら。うちは何所じやぞい彌次イヤ旅の者で御坐りやす角力取旅
の者あら宿があろふソレぬかしくされ彌次是から此三條に宿を取ふといふので御坐りや
す角力何ぬかそぞい此三條にとは何のこつちやい。こつとらは。今三條の編笠屋から出て
來たものじや爰い五條の橋じやわい彌次ヤァ茲い三條でい御坐りせぬか。ソレみや北八
先刻の女共がとんだすつぽかしとおしゐやァがつた角力膏樣たちは何所から來たの玄
や彌次清水の方から角方（ワハヽヽ）てつきり。けつぬにかな。つまゝれくさつた者じや。
あろぞい。ゑらい隙費しな。ほつておけく。さり迎あほうな奴らじやな（ト打笑ひて行過る。彌
次郎北八は。思もよらず五條の橋に來りいまくしぬ。ばんくるはせゑ目よ逢たと。小言
云乍ら橋を向ふに渡り其處此處とまごつく内。往來の眼やかなるよ。うかれて思はず も橋
のたもとを左の方へうかれ行と何かはしらず両側に掛提燈軒とにてらし三味線の音。に
ぎはしくそめき歌にほうかぶりせし男共の。ちら付にまぎれてのぞき歩く此所ゑ五條新

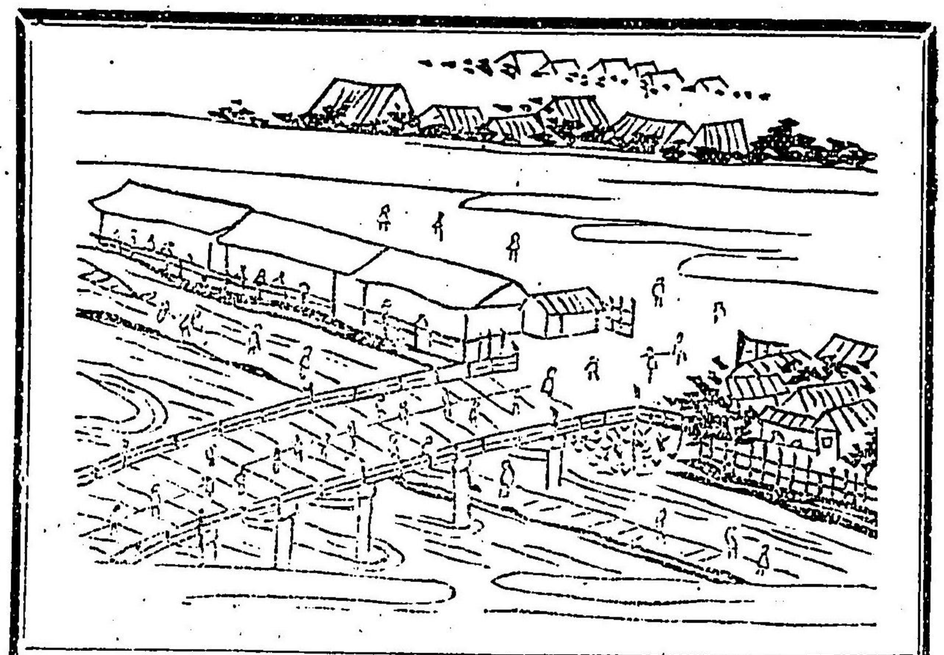
地とて少しの流をくひ遊女也家毎ゑ門の戸を立てたるが。くぐり斗を開きて門口に立た
る女のさゝやかなる聲して。モシナ〳〵と彌次郎が袖を引ふりかへりてくぐり戸の内
を見れば見世付のお山（彌次ナント北八茲ぞお山屋と見へるがいつそのくされに今宵は
並び居たりけるにゑ）
茲に泊りはどうだ北八いか樣何も荷物は無。まんなほしにそんなとも。やぼでねへ女サァ
這入んかいな彌次這入とはねろふが茲はいくらだ女ヲゝかたやのお泊りゑはるかいな
彌次もちろんさ女まだ初夜前じやさかい七匁宛おくれんかいゑ北八上方のお山は直切て
買ふといふとだ半分にまかられへか彌次何かなし四百宛なら泊つて行ふ夫で出來ずば御
縁が無と。あきらめようさ女よう御坐りまし。お這入なされ北八夫でいゝの丁度おやまさ
んも二人りあらァ（ト此内へ上ると女が二階へ案内するに屋根裏の低き二階ゑて彌次郎頭をこつつり）あいたゝと北八どうした
女（ヲホヽヽ）おあぶなふ御ざんす（ト たばゑぼんお持てくる此内おやま二人り一人名は吉
彌。今一人は金五。いづれも太織紬縞やうの着物ゑ黒天
鵝絨の半襟梁りのつかへる程ひくき二階を。しやんと立て歩行くしろも）北八とんだ暗ぬ
あんどんだサァもつとこちらへ。よりなさらんか吉彌お前さん方い何所じやいな彌次さ
れば何所やらであつた金五（ヲホヽ）六角の朝市ゑこなゐなお方がよう見へてゑやが訛てじ

○彌次切ニル大平

やさかい大方旅のお方じやあろぞいな　吉彌六條樣へ御出たのかいな　彌次マアそこらの者よ　吉彌モシナさ、一ッあがらんかいな　彌次そうさ酒が早く呑てへの　吉彌そう云ふで道かいなお肴ハ何よせうぞゐ　金吾角の酢もじがおいしひじやなぬかいゐ　吉彌わしやナ。かちんなんばが。能わいな　彌次餅でも家賃でもとんぢやくばねへ早くしてくんな　吉彌いつさよ參じるわいな（ト此おやま酒肴を。い、つけよ下へおりる跡に殘りしおやまは此うち帶のあひだから鏡を出し。あんどうの側へより頭を直す頓て下より銚子盃持出し大平が一人前に一ッ宛廣ぶたよのせ持出す彌次郎肝をつぶし）なんだ大平を。人別割とは珍らしい京いあだじけ糸へ所だと聞たが玆らは又どうせへだ　北八四百には。安ひ物だ（ト此二人りい酒も肴も揚代に安ひとゆめる）金吾サア一ッ上りなされ　北八姐め樣ヲト、平は何だハ、ア葱に半ぺいは。聞へたがこつちでハ半ぺいを燒と見へて眞黑にこげていらア　吉彌（ヲホ、、ソリヤ）哥賃じやわいな（ト是は上方にてそる雜煮餅也此おやま下戸と見へて己が好物ゆゑ客にすゝめて取寄たる也北八哥餅と云とを知ず）ハア哥餅と云は聞たともねへ。どんゐ肴だの　吉彌ヲ、せうし。餅じやわいな　北八ム、鱶かドレ〳〵ヤアあり や餅だ〳〵　彌次おきやアがれ上方者は氣が氣かねへ酒の肴に餅とはどうだ是で酒が呑るものか　金吾外のお肴云て。參じやうわいな（ト すぐに下へおりたるが程なくどんぶり物を持てくる。中には上方よはやる鳥貝のすしなり。此おやまさと見へて此すしを云つけ。やりたるなり）北八なんだコリヤ馬鹿のむさみをすしにつけたのだな　金吾とりがひの鮓もじじやわいナ　彌次出物もく〳〵へんちきなもの斗りでもう酒も呑ぬ〳〵（ト此内むだも色々あれ共略す。爰よ布團を敷並べ屏風にてわひだをしきる。此内四十ぐらゐの女こゝの女房と見へてつとめを取よきたり屏風をあけて）おゆるしな　彌次ヲイたれだ女ハイお勤をいたゞきに參じました（ト書附を出す彌次郎ひらき見て）何だ四文宛八文の揚代は聞へたが四文哥餅なんば二文鮓壹文八分御酒五分蠟燭〆て十六文五分コリヤとんだはなしだ雜用ハ別に取のかおらア又酒も肴も揚代の内かと思つたコレ〳〵北八此通りだ　北八ドレ〳〵何だソリヤお前へ方アわつちらを他國者だと思つて酒代を別に取さへあるに。どうてきにたけへ物だ此四文哥餅なんばと云はアノ大平のをかの餅ならたつた三ッ四ッ入て葱のちつと斗りさらへ込だ物を壹文宛といふ成ほど京の物はあだじけねへ氣のしれた根性骨だ蠟燭までつけるこたアねへ。こんなものはおけにして置なせへな　女（ヲホ、、）京の者を惡うおしやんすお前さんがしゆみじやわいゐ五分斗りの蠟燭代まけいのなんのとおしやんすことは。なぬわいな。そして皆喰なされた。跡で高の安いのとおしやんしたとて、。あかんこつちやなぬかいな　彌次エ、面倒ゐソレ壹分持て行ゐはしたくらゐは

○逆捻

まけるせへし（ト金壺分ほうり出してやる女房。ふしゆう〳〵に取て下へ）ァ、とんだ目にあつたノウ北八北八しかしおらァおしくねへどうかおつよもてそふるあんばいだ（ト此内北八の相方吉彌きたりて）ヲ、しんきやの。あこに私し一人り。おかんして茲に何してじやぞいなサァやすみんかいる（ト手を取て己が方へ引ずつて行）北八コリャ〳〵己が帶を解てどうする（ト わざと彌次郎聞へる様にこは高にいふ女北八を引こかし）よいわいな今宵はいてふぬくひじやなるかいな。お前はん。じつとして居なされ私があぢよするわいな（ト すべて上方節のおやまは初對面から帶ひもをといてうちとけたるていに客をもてなすを定まれるおきての如し中にも此吉彌は大年増よてぢよさいのない代物北八に着物をぬがせてほふり出し己も帶を解て北八に己が着物を打掛。さながら深きなじみの如く打解たる体に。もてなしけるゆゑ北八うつ、をぬかして打ふしけるが夜も次第にふけ行ま、に夫の遠ぼゑもの淋しく時の太鼓も早丑の刻斗り成るに吉彌目ざめし様子よて（トおきあがりたるが枕もとにわよう、寢てじやな北八ァ、ム、何だ〳〵吉彌わしや手水に行てくるぞへ（トモシナ〳〵ふり出して有る北八の着物を着て帶引しめて）お前さんの着物ちよと借ておくれやわしやこれ着て。殿たちの振して下の衆を。だましてこまそわいな北八よく似合た奇妙〳〵吉彌つむりが是じやあかんわいな（ト手拭を取てうちかぶり下へおりたるが北八夫より疲もやらずして待てど暮せど。かの吉彌は一向に來たらず扨は外よ客でも有るにやとしばらく待居るに早七ッの鐘も程なく夜も明ケなんと。するに北八あらへ兼てむしようにに手をた、くと下か女房駈あがり）どなたでお呼なされたかいあ



北八ヲ、茲だ〳〵コレ私ちかおやまは先刻下へおりたが夫なりで顔だじもしねへ。ちよくり呼でくんなせへ女房サァ其とで下は大さはきて御座んすわいな北八なぜ〳〵女房アノおやまが男のきりもの着てはしつたさかい北八ナニはしつたとばにげたのかソリャ大へんだ〳〵其男の着者と云は已がのだ女房かいなソリャ又何としてお前いさんのを着ていたぞいゐ北八イヤ下へいつて皆んゐをだましてくるからかしてくれろと云たによつて女房夫で貸なさつたのかいな北八そうよ時に其おやまの欠落したいこつちやにアしらねへこつたから何でも茲の抱に違へはあるめへ着物いぜひとも茲の内からどうぞしてもら

はにやたらはへから下へそういつてくんなせへ早く〳〵女房マア何に致せそなゐに申させう（ト下へおりて行く程なく此の亭主と見へて鬼太りのどてらを着たるでつくりとせし大男柯理番共二三人引連れどやく〳〵と二階へ來り亭主北八が枕もとに立はだかり）コレ吉彌に着物貸たといふ。わろはこなはんかいな北八ヲヽ已だ〳〵亭主おどれかい。ほてくろしひ事さらしたなマア。起くされドレ面みせさらせ北八イヤ。此さいろくめらい。何で已を其樣にぬかしやアがる亭主ぬかしたがどうすりャア。おどれ吉彌めに着もの貸て欠落させおつたからはゆくさきは。しつてゐつかるじやわろ。ありてゐよ。たゝき出くさろ北八とんだをいふなに已がしる者か亭主イヤ〳〵そなゐよ。ぬかしさらしてもわれが人に頼まれて糸ひきくさつたに遊ひは無わい北八。コリヤ貸樣だちはおつぢ。いゝがゝりするな亭主あごたゝかすなしよびきおろせ（ト皆々立かゝり北八を手ごめにする此どさくさに目を覺し此て）ねを見てはぬ飛起て出で彌次郎）コリヤ已が連だが。うぬら此男をどうする（ト亭主をつきのくると料理番）イヤこゐやつも同盗じやあろ。二人共よひつ絞れ（ト何れも大力ある者共。彌次郎北八を両方から引たて下へおろしほどびきをもつて。つゐに二人を）ぐる〳〵卷にしばりたるに彌次郎は一向合點ゆかずいさゐのとを聞てぎやうてんし。北八も今さらおやまに着物を貸たるあやまりをかうくわいし。うたがひうけたる上かゝる目にあひ。くやしけれど埋のどうぜんに云わけたゝず。亞所の柱につながれたる面目なさ。殊に夜も明けはあれて近所の者共追々見舞よ來る内に是も商賣やの亭主と見へて少々小

口でも聞ふといふ男名は十吉）わしや今きひたが吉彌めがきよとゐとをさらしたげゐ其手引した奴らはどしたぞいな亭主あこにくゝつて置たわいの十吉ソリヤ氣の毒おもんじやわい（トふたりがしばられている傍へ來たり）コレおなんたちは惡い合点じやわい。ソリヤはて友達ずくなら頼まれまゐもんじやなゐが。最ふこゐゐに。はれてはしよとが無。有樣に云てめん〳〵の。みぬけするがゐいわいの彌次イヤ私らは。かたつきし何もしりやせん只此男が。本の酒落よ着物貸たヲとでうたがひ受たといふもんだから。どうそ。あなたのおとりなしでわつちらを助て下さりませコレ手を合せて拜みたいでも縛られて居るから足を合せて拜み升コヲヤ〳〵北八もお願みヤせ北八ハイ南無金比羅大權現樣此災難を免れ升樣に南無奇妙頂來〳〵亭主コヽなよをぬかすぞひ。金比羅樣。いのるなら。そなゐなこつちや。聞んわいさいはひおどれ裸で居から水あびせて。こまそ。垢離とつていのりくされ北八イヤわつちい。全体金比羅を信心して。御坐りやすが是迄願を掛やすに人と。遂ひて水あびして寒ひ目してはき、やせぬ何んでも物を。たんと着て敷社にあつがんを。ひき掛た上へ巨燵へ首つ

切のたくり込て頭ふと直に御利生が御坐りやすから。責て着物はきずとも一盃あつくして下さりませんか亭主エ〳〵尻はぶりくされ彌次イヤ御尤で御坐りやす。わつちこそは此男めがまきぞへ。ほんの災難そしてこんな目に逢ひますと持病の癇が差込でアイタヽヽ亭主癇が痛いなら胴中の繩をまちつとかたうしめてやろかい彌次イエ〳〵わつちが癇はじん句踊とおさまり升からどうぞ此繩を解て下さりませ十吉（ハヽヽ）コリヤねからやくたいな奴らじやわい拙太さんゆるしてやらんせだが。的等はゑらひじあはや成程彌吉めにたらされくさつて。きりもん貸た迄のこつちやあろぞいな亭主サイナそゐぬに云わすりやいかさま賢ふも見んわろたちじや。別してのとも有ませまい。いなしてやろかいな北八夫はありがたふ御坐いやすがあつちやア此裸のまゝでは。歸られやせん亭主いなれざ。いなんすな〳〵まちにもいゝぶんがあるさかい北八イヤそんゐら參りやせう十吉サア〳〵いなんせ。あだあほらしい衆じやわいゐ（ト二人りが繩解てやると）彌次北八手前へのおかげでとんだめにあつた北八お前よりかたらア此通り着物を取れてハアくつさめヲヽヽさむ〳〵亭主（ハヽヽ）あんまりかはいそうじや何など一まいくれてやろかい北八有難ふ御坐いやすど

○裸デ不ニ道中一之語至レテ此ニ属ニ不用一

んなものでもどうぞ頂戴かして。下さいやせ亭主エヽ乞喰めがいふやうなとぬかしけつかる。てきよ似合た樣に納屋の掀一まひ以て來てやれやい下男イヤ爰にきのふの俵があるこれ着ていかんせ北八ナニ夫をきろとか。エヽ情なゐとをいふ亭主せつかくの己が心差じやきていゐんかい北八ハイ有難ふ御坐りやすが私しは。やはり裸が勝手で御坐りやそ彌次げへぶんの悪い男だおいらが合羽を貸て。やろふ（ト彌次郎が木綿合羽を取て北八に打きせながら）

愛ましやかゐたる恥も赤はだか。合羽づかしき身とは成たれ

果は大笑ひとなり二人りはやう〳〵のとにて此所をのがれ立ちいでけるとなり

○七編

或人の句よ。花尊都よ本寺〳〵かゐ。と詠たりしは實にも寺院堂塔も。廣大無邊にして其莊嚴靈秀。なる云も更なり殊に花の春。紅葉の秋い東西南北に名だゝる勝景の地有て加茂川名酒の樽と。ともに人の魂を飛しめ商人の。よき衣きたるは他國に異よして京のきだをれの名は益々西陣の織元より。いで染色の花やぎたるは。堀川の水に清く釜元のおしろい。川端のふしの粉は。雪をあざむき。御影堂の扇。伏見の團扇に風匂ふ草堂前の粽。丸山

○非ニ北八一

かる燒。大佛餅。醍醐の獨活芽。鞍馬の木芽漬は庭訓往來にいちじるく東寺の蕪。生生の菜は名物選に鼻高し。其外名産。奇製の物品あまた有。都にたまくいりこむ騷客の両人彌次郎兵衛北八とて。拔參りの刷毛。序にまぐれ出たれども淀川の下り船に門違ひして荷物を失ひ五條新地の一盃機嫌に早呑込して丸裸となりたる北八の名にも似ず同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着せし程の仕合なればかゝる洛陽の地も面白からずうかくと新地戻りの朝風身にしみ渡り。五條の橋に差掛りたるに此所は古しへ牛若丸の千人切り仕給ふ處と有ば北八しほ〳〵と打かたぶきて

かゝる身は牛若丸の裸より。辨慶縞の布子こひしき

斯て東に渡りて河原院の舊跡。門出八幡も直通りとなして高瀬船の綱より引れてたどりゆく道すがら北八思へば〳〵つまらぬへとになつたどうぞ古着屋でも見附たらどんなでも綿入が一枚はしかが彌次さんいゝちゑいねへかの彌次ナニ買わずともいゝにしたがいひ。江戸ッ子の拔參に裸に成て歸るは。あたりめへだは北八夫だとつて寒くてなら糸へ彌次そんならさいはひ爰に湯屋があるナントちよくりあつたまつて行かねへか北八ホンニ

こゐつは奇妙〳〵彌次さんお先へあがりてへ（トいちもくさんに或格子づくりの内の暖簾をくゞつてすつと這入りかけあがつて裸にならふとすればそこの亭主）モシ〳〵こなさん誰じやいな。何さんすのじや〳〵（トとがめられて北八あたりを見廻し見るに湯屋でなし）エヽいめへましい湯屋かと思つた（亭主ハヽヽ）こちの暖簾にゆの字があるさるいそれで洗湯かと。思ふてじやのアリヤ濟生湯といふ振出し藥の名じやわいな彌次ホンニ此奴は大笑ひだ北八又一倍寒く成た。いめへましい（ト小言云ながら行くさきに。しみたれの古着屋一軒あり見世先よりふるぬのこ古拾つるしあり北八彌次郎をくどきて布子一枚もとめんと。件の見世にたち寄りひぬくり廻して紺の布子を取て見）モシ此布子いくらだね（古手やのていしゆ）

ハイ〳〵こつちやへお掛なされ。コレお茶持てこんかいな。お煙草の火もなねわいな。赤いの一ッちやと。くさんせ北八イヤ茶も煙草も入やせんコリヤアいくらだと云に亭主ハイ〳〵そりやきやうとう御坐り升。お安うして上げふわいな小僧ハイお茶上りなされ亭主長松そりやおぬるねじやなねかいな。あぜ暖かな。ちや〳〵上んぞい小僧イヤお家様が朝い茶〻ゆじやさかい茶〳〵焚なとおつしやつて〻御坐り升。夫はきのふ焚たまんまの茶〳〵で御座り升わいな彌次〻いか様きのふのお煮花ほどあつて。頓と河童の屁の様だ。イヤ屁の序に尾籠ながら御亭主さん手水にいきたいお裏をちよつと亭主ハイ〳〵雪隱へお出かいな小僧雪隱いぬるうい御坐りませぬ。ようわねて宏やあろぞいな亭主ナニ雪隱を誰が沸したぞい小僧夫じやて〻。いんまのさきわたしが參じたさかいすぐいて見あされぽつぽと煙が出てじやあろ亭主エ〻むさねとをいひ奴じや北八そんなをより此の布子はいくらだへ早くきめてくんねへ寒くてたへられぬ亭主お寒くはもつとそつちやへよりなされ。そなねに。い〻日がさしてじやわいな。きのふも着物買にお出たお方がコリヤきようとね。ぬくね内ぢやて〻。そこに一日ひなたぼこしていなれま

○布子ノ是レ塵高イ着物

したが。其お方が。もう着物買ふて着居でもだんあね毎日爰の内へ。日向ぼこしに。來わいあと。こなねに。いふてじやあつたわいあ北八エ〻じれつたへコリヤア賣らねへのかどうだな亭主ハイ〳〵あうじやわいな北八安くしてくんな亭主ソノ紺のおひろじやな（算盤ばち）三拾五匁頓と。ざり〳〵じやわいな北八高い〳〵わつちらは江戸ものだが古着は商賣柄で。いくらも取扱ふてゐるから。やるもん宏やアねへ本とうのとまろを云ふなせへ亭主ハア御商賣柄とあればお前樣も古着屋なされてかいな北八イヤわしは質商賣さ亭主質とあれば何かいなお取なさるのか置なさるのかいな彌次置のが此男の商賣さ北八夫だから質に置時の算用からして掛らにやア買れやせぬ。此布子はどうして壹〆より外は貸めへから貳朱斗に買ゑやア損がいく亭主なにいふじやぞいな後家の質屋へ持ていても金壹分いもの云ず貸すわいな北八とんだとね云どうして壹分かされやしやう亭主ナニ壹分つけんとはありやしよまいがな北八夫ともお前へ直に受なさるか亭主受るわねな北八そういつてあもてにやアならねへ。夫よりか此間の殷引の出入へどうしなさる。そして拾の時貸もあるし夫もお前へ子供衆が癖冒瀘して煩つてゐるうへ。かみさんが疫病で。死な

れたけれど。俳抱へて挙禮を出す工面が出来ぬと。達ての願みゆゑ貸てあげたものを義理の悪ひいつそのと此布子は其袷のかたに只取て置やせう亭主アヽ是申し。とつともう。厄たいもなき事云ふてじやわいな。わしが嘸ばいつ疫病で死だぞいる。あたけたぬな事いけんすわいあ（トお亭主おほさに立腹彌次郎おかしく）どうも此男は口が悪くてなりやせん了簡しなせへそして何角どめんだうな其布子も壺貫にまけてやりなせへし亭主よう御座ります朝商ひじや。まけてあぎよわいなシャン〳〵〳〵北八まづは布子にありつぬた（トお彌次郎に代錢を拂ひわせかの布子をきて木綿かつぱを彌次郎よかへし此の内でると。のれんを見れば虎屋と有るに思ひよりて）和藤内三貫あさりのふる布子。老一貫にもとめこそすれ

夫より北八はたちまちよ元氣をゑてナント彌次さん。すさまぢかろん。古着屋めをちやらぽこで。はぐらかして壺貫に見ほとしい安い物だ見ゐせへし。まだ襟垢もつかねへものを彌次紅の版看と見へておゐらがお供の樣で丁度いゝの北八時にこゝらは何と云とあろだの。どうてさにいきな。たぼがちら〳〵するは彌次ハヽァむらさきぼうしの野郎どもが見へるからおほかた宮川町と云けんとうだ北八來ぞ〳〵美くしい娼どもがくる。能時おゐ

○紫帽野郎曰申畫

○着恥

らア着物を買てよかつた。ぶんざらはだかの上に其太綿合羽じやァあゐつらにすれ違ひても外聞が悪ひ（トにはかよ襟かき合せて見へはりながら向ふより來るおや）初音さん（ま雛子にすれ違ひ通れば一人のお娼ふりかへり北八を見て）見ゐませ。彼人さんのきりもんに大きな紋が付てじやわいなヲヽおかし（ヲホヽヽ）初音ホヽヽあほらしい人樣じやナヽ好んやの（ヲホヽヽヽヽト打笑ひ。うちすぐるゆゑ彌次郎も。心づきて）ヲヤ〳〵北八手前への衣物を見や背中の横つちよよ大きな紋所がぐつゝぬていらア北八どこよ〳〵（トふりかへり能見れバのぼりを紺に染たる布子ゆゑちよつと見ては知らねども日あたりへ出るとおほきな紋所あり〳〵とすひて見ゆる）北八コリヤ大變〳〵彌次（ハヽヽ）裾の方には鯉の滝登りが見へるからおゐつ幟のはぐらかし物だな北八エヽ古着屋めがとんだめにあはしやァがつた。どうりで安と思つた。ぶんのめして來よふ彌次ナニうつちやつて置やれ背手前へがべらぼうだから起た事だ先は商賣だ者を。仕方がねへ北八アヽいめへましい（トまじ目になりてぶやきながら四條通に出れば名にあふ川東のきつすい。ざおん町の繁昌は両側のお茶屋格太鼓を打交へ。でんからく〳〵の音。いさましく狂言の名代。羽版花やかに對のはでもやうき飾たる。東西の木戸看しやがら幕にて）サア〳〵評判じや〳〵今が三五郎の腹切じや〳〵此跡が嵐吉と友吉が所作事評判〳〵〳〵（トよびたてる江戸で火なたなり北八彌次郎）女モシナお前さん方一ト幕。とてお出んかいあ北八いか樣ナント彌次さ兵衛が袖を引て）

もねへ北八ア、たゐくつだ一盃呑たくなつた彌次て喰ふ商人水から宇治山彌次何だ手づからうつちやる勝手にさつせへ商人饅頭どうじやいる北八こゐつがいつちわかつて居るコレ饅頭三ッ四ッくんなせへ商人ハイ〳〵三文宛で御坐り升（隣坐敷の見物）コレ饅頭やさんどした者じやぞい。こちの辨當。へしつぶしじや商人ハイ〳〵お許しあされ彌次アイタタ、、ごうぎに足を踏だ商人ハイ是はモシちとおゆるん東の芝居も一きりみやうじやアねへか彌次面白かろふ女中いくらで見せる女よう御坐り升わいな。わたしが。どうゐぞするさかいマアお出なされ（ト二人を両方の手に引ぱり引連て芝居へ這入二階へ上ると桟敷番きたり二人をむかう坐しきの前側へ入れる。もつとも幕の内にて中賣り商人の聲々）水から宇治山〳〵まんぢういゝかいな茶アあがらんかいな茶々どうじやんな番附絵本〳〵彌次ごぎうに大入だ然し江戸の芝居の半分で

○權兵衛下臭兩個避ニ三舎ヲ

しあされ北八コリャどうしやアがる人の頭のうへを。金玉を引ずつて。通やアがるエゝきたねへ〳〵（隣りざしきの見物太郎兵衛）ヲゝ權兵衛さん何買ふてお出だぞい權兵太郎兵衛さん。まつてじやあろ私や今あこの桟敷でな氣疎。味い物喰てじやさかいッレ見てゐて。おそ成たわいなサア〳〵こないなもんじや（ト竹の皮包をだす）太郎ハア鯖の酢もじかいな。コリャ氣疎い〳〵其飯は辨當の替りゐして肴はへがして酒の肴にさんせ夫がいゝわいな權兵衛さよじや竹の皮は。持いんで草履の鼻緒だてるわいな。イヤ時に一盃やろかいな（トちいさな猪口を取り出し）風呂敷ゐ包し德利よりつゐで飲む北八是を見て小聲ゐあり）彌次さん見ねへ味そうに呑おるがうらやましい彌次エゝいめへましいとをいふ男だ北八コレお坊さんお饅一ッあげやせう（ト おのが喰のこした饅頭一ッ隣り桟敷の子供ゐやる是にて足を付て酒を呑ふといふした心なり太兵衛）コレハおありがたふ御坐り升。わいな北八お前方はいゝ物を上りなさる太郎お前も御酒はふ好かいな北八左樣〳〵飯よりゝ好物太郎ソリャいゝお頼しみじやわいなコレ權兵衛さんも一ッ頂戴こかいな（ヲトトヽ）コリャ能酒じやゐ權兵さよじやホンニお隣のお客御退屈じやあろ是なと一ッあがらんかいな（ト茶碗を差だす北八手に取るより早く頂いて）ハイありがたふ御坐りやす太郎兵衛然しさめはせんかいなモシお銚子と夫へあぎ

○天命測而謀反忽ち露餅

よわいな（ト茶屋の土瓶を北八より渡せばもつけな顔）北八ユヽ茶だそうなアせッく太郎兵衛おぬるかつた云やあろ北八とてもぬるい序にどうぞ是へ其徳利のをうめて下さりませ太郎兵衛是はしたりコレ見なされこなゐになつたわいな（ト徳利をさかさまにして見せる）彌次（ハヽ）でらさらしな（北八小）いめへ出しい饅頭一ッ棒に振た（ト ぶつく口の内に小言云乍らふくれて居ると此内桀屋にて柏子木カッチ〳〵（ト此の内口上も酒みきくの内にて）大東西〳〵柏子木カッチ〳〵（カッチ〳〵）三味（ッヽテン〳〵）子木（カッチ〳〵）鼓（テン〳〵テンツク〳〵テンテン〳〵）柏子木（カッチ〳〵）

○芝居は四條鴨川の東に在り永錄年中に江州の浜八名古屋三左衛門と云者出雲のお國と云ふ風流女と語し合ひ歌舞妓と名付て男女立合の狂言を仕組北野の祭祇園の南の林五條河原より興行し其後中絶して永應二年に村山又兵衛と云者四條河原中の島にて再興し又繩手四條の北に移し遂に寛文年中今の地に移して常芝居とある

（幕あくと。はなみちより仕出し）イヨ大根ッ十把一ト（役の者。大勢出ると見物悪る口）からげじや北八なよ大根とはアノ役者の事か何のをだ見物ヨウ。でけ升の北八有難ど申やす（ト此北八いたつて芝屋すきゆゑ。幕があくと夢中になり何もかも打忘れてむしやうよ。おほきな聲して。ほめ）北八ヨウ〳〵大根め〳〵（此大根と云事は上方にるゆゑ見物皆々おかしく北八の方を見て居ると）

ては役者の下手な者を大根といふ。北八其わけをしらず人が大根〳〵と云を。聞た風に役者を見ると。大根〳〵と呼立る）イヨ盲錄様ア（ト北八を見物北八を小馬鹿よし笑ふ上方にて盲錄といふは江戸にていふ折助と云者也北八紺の布子をきて居るゆゑ見物看版きたるとおもひてかくいふなれど）北八彌次さん北八もうろくのわけを知らねば）きいたかこつちの役者には色々の。へんちきな名がある大根だの盲錄だのと。よもや俳名じやア有めへ彌次おほかた役者の仇名だろふ北八そんなら今でた役者か盲錄だるヨウ〳〵盲錄有難へぞ（トいふと見物にどつとおちがきて狂言ハ見ずに北八の方斗見てどつ〳〵と笑ひあるが）イヤ向樓敷の盲錄様大でけ〳〵見物あほよ〳〵向樓敷の盲錄のあほヤアイ北八何だ向樓敷の盲錄たア何のこつた鼻つ垂らしめら彌次（ハヽ）鼻つたらしたア手前へのとだは北八何ぜ彌（ハヽ）

次上方で旨錄と云は折助のとだは手前へ紺の看版を着て居るから夫で皆なにひやかされるのだは北八エヽそうか。そんなら疾くよ。そう云てくれゝばいゝに見物あほよ〳〵北八イヤおねつらはふてへ奴らだ（トむしやうに。りきむと見物皆々さわぎたち喧嘩よ々々と大騒動と成ると桟敷番四五人來り北八をとらへ。引出んとする）北八コリヤどうする桟敷番お前狂言の邪广に成るわいなこちでんせ見物そいつ早いなせヤイ北八何ぬかしやアがる桟敷番ハテ能わいな彌次コリヤ貴様たち此男をどうをる桟敷番イヤお前もでんせ〳〵（ト二人を中につりあげ下へかきおろし口々になんの彼とべちやくちや。まるめられてのぼせ上りせんかたなくエヽ面倒あと二人小言たら〳〵）北八やヽ薬嚥しなハヽハヽ芝居を出て祇園町の方に面向く

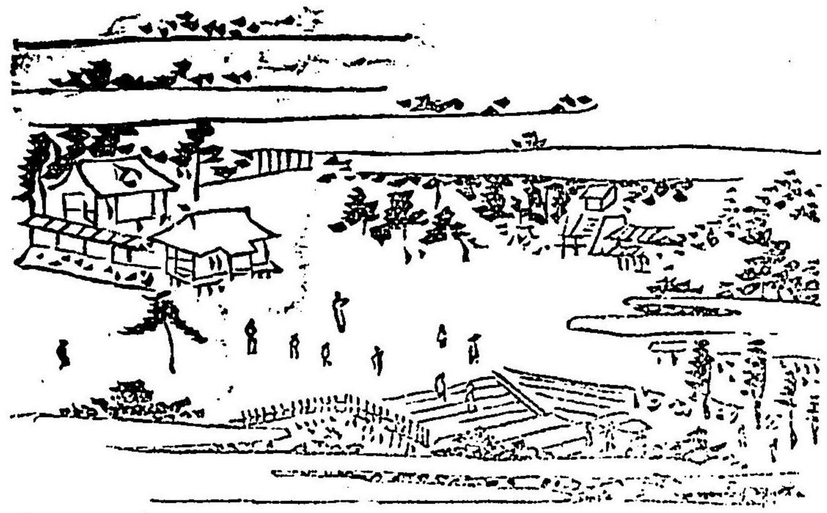
木戸錢を棒に古手の布子にて。芝居も紺の大あるしよせし

夫より行々て祇園の社に參る御本社の中央は大政所牛頭天皇東の間は八王子西の間は稲田姫聖武天皇の御宇吉備大臣唐士より歸朝の時播磨の廣峯に垂跡し給ふを崇め奉れりといふ其外攝社末社。しるすにいとまあらず。參詣日々に群集し。茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く。齒磨賣の居合抜。賣藥のいひたて浮世物まね。館狂言。境内にとゐろせき迄をちこ〳〵たり（こいにもさま〳〵の方言おかしみあれども其おもひき皆和亭のあらはす實觀帳にとゝりたれば爰に略す彌次郎北八悉く皆順拜して南の方櫻門を出ると二軒茶屋といふ。でんがくの名物にて赤まへだれしたる女ども大勢かどに立てしやべるお休をなされ〳〵是へお這入なさらんかいるコレナお支度おさらんかいな彌次ハヽアこヽが川柳點に豆腐切る顔に祇園の人だかりと。云たところたなアレ北八見やてねつは妙ざく（トのぞいて見れば女のとうふ切る音）（トントヽトン〳〵）

北八ホンニ面白へ〳〵イヤ馬に爰て一盃。やらかしはどうだちと腹が北野の御神水だ女サア奥へお這入なさを（ト此内両人奥へ通る）お茶あがりなさせ北八田がくで飯にしよう酒も少し女ハイ〳〵彌次京ではなんでも他國者と見と途方もなく高く取といふとだから油断はならぬ北八ホンニそれ〳〵三文でも割を喰ちやアでうはらだ（此内女盃を持いで口取肴のひたしもの丼に入て持出）女只今おでんがでけ升マア一ッ上りおされ彌次よし〳〵モシ女中酒はいくら宛だの女ハイ〳〵わたし所の御酒ハ能御坐り升六拾文替で御坐り升といお彌次エヽ夫ぢやアそのらねへ此どんぶりはいくら女夫かいな色々で御坐り升わいな北八飯を早く頼升女ハイ〳〵かしこまり升た（ト膳を二膳に飯鉢）ハイおでんが出けました彌次こいつは變な田樂だ女ソリヤ葛引ぢやわいなおむしのは只今彌次田樂い幾ら宛だ北八イヽいかに先へ直ぐ聞がいゝとつて田樂は聞かずと。いゝとやアねへかサア一盃はじめねへ彌次ヲット〳〵。な

るほと能酒だ水ぽくてぬから呑ぬ。もう一盃つゞけよう北八コレお前へ小言云ながら猶で呑の。ちとこつちへよこしねへな彌次時に是ぢは。いかねセシ〳〵角だ者を一ッ女ハイ〳〵（ト頓て硯蓋を持来り）彌次此硯蓋はいくらだ女ハイ貳匁五分で御坐り升北八こゐつは高へ〳〵彌次エヽうつちやつておきや。あんまりあたゞけなくしやアがると。己がこまらせてやる仕法がある（トだん〳〵肴を出す度ゝ其直段をきひて出た丈の物殘らず喰て舞て）彌次サア〳〵女中勘定を頼を升女ハイ夫へ（ト書付を秤に添て持来たる）彌次ドレ〳〵北八見や。ざつとした所が此書付だ北八ヲヤ〳〵拾貳匁五分たア。どうせへに高へ〳〵貳朱くらゐの物だ彌次さんまけて貰ひゐせへ彌次イヤ安い物だソレつりを持て來なサア〳〵北八荷物が出きた是を皆持て歸るのだぜ（ト硯蓋大平丼杯皆鼻紙にて拭き片附けるゆゑ）北八彌次さん夫をどうする彌次コレ女中（コリヤア）皆持て歸りやすぞ女イエ夫は彌次ハテ先刻に此どんふりはいくらだと聞たら五分だと云たじやアねへか。そして硯蓋いと。云は二匁五分だと云。よしか大平が三匁よしか此鉢はと。聞たら是が三匁五分と貴樣が云たに違へは。あるめへそこでぶた。とまろが拾貳匁五分渡したから云分は有めへ女ヲホヽヽよう。ぢやら〳〵と。てんごういふお方じやわいな（チホヽヽ）彌次イヤ。

ヲホヽじやアねへ本とうゐ持てけへる（トまじめよあつて風呂敷につゝ）モシナわたしの云たはお肴のとで御坐り升わいな彌次ハテ肴の直段きく氣なら此硯蓋に盛てある肴はいくらだと聞やす夫を此硯蓋はと云たら二匁五分だと云たじやアねへか女そじやて、夫がまア彌次ナニいさくさが有もんだ（トやつゝかへしついふ所へいさゐを聞てまへたれ仕たる男勝手より出て）ハイ是はあなたの御尤もよでさりますお持なされませ。其代り道具の代物はいたゞきましたが喰た物のお拂はまだいたゞきませんわいな。夫を御勘定下さりませ彌次なるほど〳〵喰た物は高がしれてある拂ひませういくらだ男ハイ七拾八匁五分で御坐り升わいな彌次途方もねへことをいふおゐらを盲だと思ふか。コレエたつた五百か六百か物を喰せて置て大それたとを。ぬかしやアがる男イヤわたくしかたでは。何じやあろとお肴は大坂から歩行荷で。取よせ升さかい。駄賃がそろふ掛り升わいな彌次肴は夫にもしてやろふが青物は高がしれてある。アノ初めゑ出した菜のしたし物はいくらにつく男ハイあれはな七匁五分彌次ヤアあれが七匁五分だアあんまり人をうつむけにしやアがる。三文か四文がものだ男そなねにおつしやり升な。ありや京の名物で東寺菜と申升わいな私くし方では別につくらせ



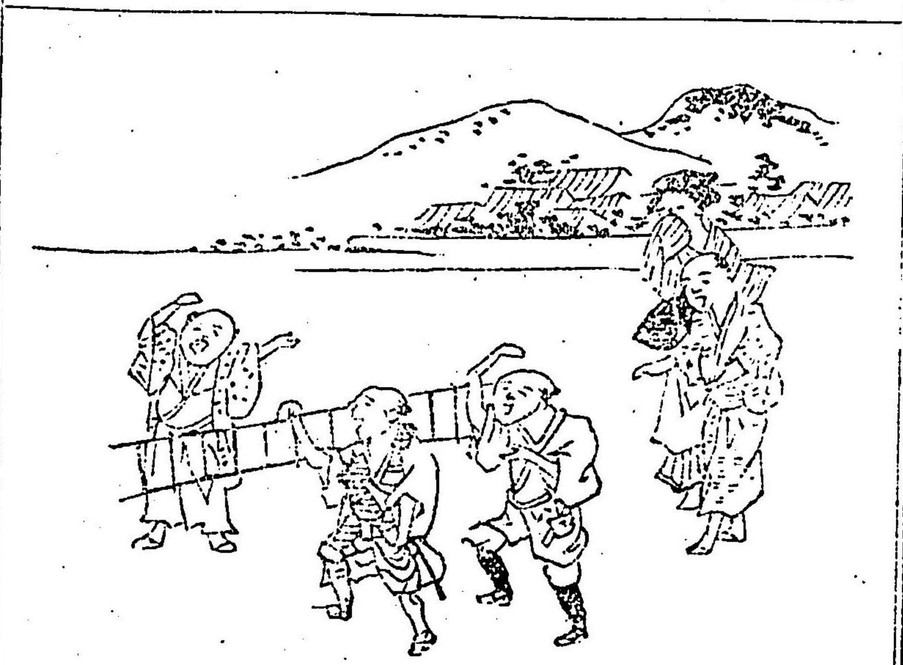
まして虫の喰た葉ハのけ升わいなそして莖も太い細いのねやうよ撰出して上るわいおむさいおはなしじやが糞ゐ絹越にして掛ますわいな彌次とんだことを云そんなことが有もんか。何でも喰た物の代ハ貳朱斗りやろう男イエ〳〵さよじやありませんわいな。ハテ高いとお思召なら。あがつた物を殘すお戻し下さりませ（ト此一言にこまり彌次郎やつきとあつてせり合た所が理屈づめよあつて大へ迷となりまじくじすれば）北八エヽめんどうな彌次はじまらねへぜ彌次いまく〳〵しひ云分があれと勘定づくで恰奴が惡い了簡してやろふ能く覺ていやアがれ（トにらを廻して立上り）女能ふか出ほう〳〵此所を出れい）たおちかひ内にへ彌次くそ糞を喰らへ（ハヽヽヽ）

又しても祇園の茶屋に田樂の。味噌を付たる身こそくやしき夫より境内をいで元の四條通を行に日も。いや七ッ下りとなれば。急き三條に宿をもとめ足休んと。たとり行。先に立て近在の女商人いづれも頭に柴薪あるゐは陸子。連木。槌などを載て四五人打つれだち陸子。買はしやんせんかいにヤア連木いらんかいにやア北八コウ見ねへごうせへな者を頭へのつけて行は彌次アノ又尻を振ざまわい（ハヽヽ）女茨木買しやせんかいにやア（ト行きゆきて河原よ出ると彼の女ども各々爰に荷をおろし摺り火打にて煙草など呑てやすむ）彌次ハヽアア流石は都じや。とゐつも小奇麗な。面つきだ。ちとひやかしてやろふか北八又お前。へこまされようと思て彌次馬鹿ア云な手前へじやアあるめへ！（トきせるを出し女商人の傍へより）樹無心なから火を一ッ（トパッパ〳〵）時にお前方ア。とんだおもてへ物をよく頭へ戴置て歩行なさるの女さよじやわいな北八ナニ此くれへな物をおゐらなんざア廿貫目や卅貫目ある石を頭て振廻した者だ女お前さんは温飩屋の粉な引じやあろわいな彌次エヽ手前へだまつて居ろへ女お前さん方アどうぞ此連木買ムておくれんかいな彌次ナニ摺子木か。アヽ買てへが（コリヤア）細いわつちらが所じやア何でも材木の樣なそして四角ゐ摺子木で無ちやア間にあ

はねへ女（ヲホヽヽ）四角にした連木でおむしすらんすなら大方摺鉢も四角じやあろぞいな
彌次　そうとも〳〵おゐらが。處じやアア穴藏で味噌をする（ヲホヽヽ）氣疎さ〳〵あお方じやわ
いなアノ連木おゐやあら梯子買ておくれんかいあ彌次（ハヽヽヽ）階子面白へいくらだ女け
ふは何も能ふ賣んさかい安くしてあぎよわいな六匁くたんせ彌次二百斗りなら引受樣さ
女　アノぢやら〳〵云てじやとゐいな。もつと買て下んせ彌次否だ〳〵女お前さんこなゐ
に。あぢやうしてあるわいなモシ五匁にあぎよかいな彌次いや〳〵女いゝわいな是もつ
ていんだら。ひかられ樣二百にまけてあぎよわいあ彌次ヤアまけるか情なゐとをいふ女
氣疎安いもんじやわいな　彌次いくら安くても階子を買て。どうするもんだ内も無くせに
女　能わいなサア持ていなんせ彌次こゐつはあやまる有樣はおゐらは旅の者で今宵は三條
に泊らうと云のだから階子を買ても仕方がねへ　女何いゝんすぞいな。いらん物を附さん
す事はなゐわいな彌次ソリヤもう直を附たが不肖だからいらねへ物ても缺か懷中へはい
る物なら買てもやろふが何と云ても此階子だからおそれる〳〵女そじやてゝわたしらを
なぶらんしたのかいな。こちや商賣じやわいな。そなゐなといやじやもていゐんか（ト女
も

四五人口々に。やかましくしやべり立て。彌次郎を中にとりまきせめたつる。すべて此も
商人は皆いたりて氣のつよき者ゆゑ中々合點せず物見高ひ京の人たち何とやらんとおり
かさみりてぐるりと取卷き彌次郎よげられもせず大きにあまりはてさま〳〵に云わけ
し。又ハりこみ云て見ても一向聞入ずあひては皆女のと也喧嘩にもみらずせんかたなく
錢貳百文出してやりとう〳〵階子を買取人の
見る前へ捨られもせず見物どつと笑ひてちる）彌次こゐつは。いくぢもねへめにあつた。
北八そこらまでかつゐでくれ北八エヽとんだとをいふお前へ持なせ一な彌次又一番へて
んだごうはらな
如何せん梯子の親と此樣な。やつかゐ物を引受し身は
斯て四條通りを寺町へ下りてゆく。道々も梯子の持おもりしてつぶやきながらナント北
八手前へ附合ひを知ぬ者だちとばのり持てくれろへ北八いか樣お前へ心おらとは云なが
ら氣の毒なこつた。さぞおもたかろふこうしなせへアノ女どもの樣に頭へ乘て持て見な
せへ彌次なる程〳〵（ト手ぬぐひをたゝみ頭へのせ其上へ梯子をのせ両手に持そへ行と往來の人々）コリヤ何じやいな浮雲て成
んわいな彌次ハイ〳〵向ふがさつ張り見へねへで歩行れぬ（往來の人）コリヤじやうもんか行
そふじや。お水もて出しやんせんかいな（じやうもんが行とい火事が有そふなといふとなり）（往來の人）何所よじやう
もんか行ぞいだアレあこへ梯子持行わいなあほよ〳〵彌次何ぬかしやアがる往來ふぬけな

我郎じや（ハヽ）弥次イヤ此べら作めら（ト梯子を頭へのせたなりよぐつとふりかへれば
かの梯子のあとさきにて往來の人唱をこつ
つ）往來アイヽヽ何じやい。どめつそうな
り。此人中で長いもの横だはしにしくさつて忌
らいあんだら忌やゐ。のうてんどやいて。天窓打
ませやい　弥次　ナニ戯言ぬかしやァがる
往來　わしが額の疾癇がなふなつた。そこら
にやなねが見て下んせ　弥次　エヽおねらがし
る者か馬鹿な面な　往來　ろらひ頤いな我郎じ
やたヽんでおませやい。（ト何れもきかぬ氣
勢どや〳〵と取掛れば北八留て）（コリヤア）此方らが悪かつた。
どなたも御りやうけん下さりませサァ〳〵
弥次さんあゆびなせへ　弥次　いめましひやつ



○欲レス振ントニ
二百於
階子ニ

らだ北八どうも。獨りでは持れぬ跡の方へ肩を入れて。くれぬか北八ドレ〳〵（コリヤア）已ま
でを。とんだ目にあいせる
とれもまた嘯しの種よはる〳〵と。京へ登りし梯子一脚
弥次　エヽ哥とごろじやァねへどうぞ。打捨つて。仕舞てへものだが（ト今は二百の銭もお
しからずやつのぬも
の階子うち捨て行んと往來すくなき横町へはいりそつと捨おき逃んとすればおりあしく
人に見付られてとがめられせんかたなくかつぎあるく又何處ぞへ捨ん〳〵と思ふ内。う
か〳〵と三條通に來りけ（モシナれ前様がたお泊かいな）弥次泊り〳〵宿引こちのうちか
れば宿引と見へたる男
たへお出んかいな北八お前へ何所だ宿引ツィあこじやわいなサァ〳〵お出んかい宣〳〵
（ト打連て大橋の方へ行）すでに其日もはや西に落て家をゐ灯火をてらし門さそころ三條小橋を打渡
りて彼の旅籠屋の方に着たるゐ宿引サァ〳〵お泊り様じやわいな亭主コレハお早うお着
で御坐り升わいな弥次アイお世話になりやそ亭主お荷物は北八此階子壹丁亭主コレハ氣
疎お荷物じやわいなコレ〳〵お蛸や奥へ御案内申さんかい女ハイ〳〵お出なされませ
（ト奥へ案内するに連だちて二人は坐敷へ通るゝ亭主來りて）今晩いお客様がいこおすくのう御坐り升さかいお湯は焚
ませぬツィあこの小橋下るところに氣疎奇麗な湯が御坐り升是へなとお出なされ北八お

ねらァいゝから彌次さんお前へ行なら行てきなせへ京の水で洗ふとごうせいに色が白くなるといふとだぜ彌次此うへ白くなうちやァつまらねへからよしやせう亭主時にあなた方は近在からお出かいな北八イヤわつちらァ江戸で御坐りやす亭主いかなわしい又階子をお持なされたさかいコリヤ近在のお方でお宿へ買てお歸りなさるのかと存じましたがどして江戸のお方が階子を何なされ升ぞいな北八イヤ是よは譯が有やすアリヤ江戸から事ゴかつて來やしたのさ亭主ソリヤ何としてあゐぬな物を北八聞なせへわつちらがこゝろやすい者だが生れゝ此京の人で今江戸に世帶と持つてゐやす。ところへ京の親[illegible]の方からは〻〻とアノ階子をかつぎしてよこしやした其わけはかの親御が無筆と云ので人に手紙を書て貰ふも面目ねへと云とかしてアノ階子ばかりよこした心は登つてゐいといて心いきで御坐りやせう。そこでまだ其息子が返事をよこしてへが同じく是も無筆でいろはのいの字も書ねへくせにとんだまけおしみ。わつちらが今度御當地へ參と云たらさいはいの事だから言附てへ物が有と云によつて。隨分何でも屆て遣ふといゝやしたら聞なせへきたねへ乞食坊主ひとりとアノ階子をよこして是を親父の方へ屆てくれろといゝ

○撞木の唄

やすそこでわつちがコリヤア階子は能が坊樣は生て居る人だから持て行に難義だと云やゝと其男の云にはそんなら階子べかり持て行て京へ着たならどうぞ坊樣をひとり賴んで其坊樣ゝ撞木ばかりもたせて階子と一所に親父のところへやつて下せへといゝやすから(ソリヤア)なぜそうするのだと聞やすとイヤ京の親元から登つてこいと云てよこしたから其返事だゝ賴れて持て來やしたのさ亭主(ハヽ)階子をやつて登れと云ゝ聞へて云やが其ゝ返事に階子と又坊ゝ樣撞木ばかり待せてやるとはどうじやいな北八ソリヤ登りたいが金かなゐと云心亭主(ハヽ)でけましたわいお然しはる〻の御道中階子のとゐりや柳こり

○此レ已ニ白ニ坊主ヲ御免ニ下ル

へもよう這入まいにさそ御難義に有たじあやあろ北八イヤ中〳〵そうで御坐りやせぬ道中するよは階子を持て歩行がとんだ重寶な物さ馬なぞに乗よ階子を掛て乗と途方もねへ乗よくてそして川々をこすに徳な事が有りやす大井川でも安部川でも蕨越と云をすると川越の賃錢か四人前にかの蕨の賃が壹人前へ出やすところを梯子持参と云ものだから川越の賃錢ばかりで蕨の賃が。かすりに成やすお前方も是から若しも道中しなさることが。有ならかならず階子持なさるがいゝコリヤ人の氣の附ねへ重寶な物で御坐りやす亭主イヤ誰も道中をするとてナニ階子持て行といふ氣が附ものかひな（ハヽヽ）時よ只今おつしやつた坊様は爰でお罷なさるのかいな北八そうさ是非罷はにやァありやせぬ亭主さよおらさいはひのこつちやわいな私方に世話致ておきをり升。能ばうさんが。御ざり升さかい。是をお連なされませ只今お引合申ましよかい（トたちあがらんとす）モシ〳〵待てくんなせへ今急に這入やせぬ厄介者の階子を引受てこまるさへあるに。亦生た坊様を取込でどうするものだノウ彌次さん彌次（イヤ〳〵ソリヤ）手前のかゝりだからおゐらはしらぬが何にしろ其坊様を早く頼かよさそうな者だ北八エヽお前迄がとんだおとをいよ亭主ハテ今あなたの云てじや通りあら是非共お頼なさるの云やなゐかいな北八夫はそうだけれど亭主あんじやあろと私くしへおまかしなされ北八そんなとよりおらァ早く飯が喰てへ　亭主御膳も今あげ升がぼう様は。どうじやいな北八ヨヽサぼん様早く喰て（腹が〳〵つてたへられぬ亭主ハイ〳〵かしこまりましたわいな（ト勝手へ立て行程なく女飯を出すしよくじの内様々むだあれ共余りくた〳〵しければ略す頓て膳を引たるよ宿の亭主は北八がちやらくらよのつたかほしてなぐさを半分是も不洒落者なれば年の六十頃近きうそよごれた髮むしやくしやの大ぼうが壹人いざなゐ來たり）イヤもう飯あがりましたかいな時に只今お咄申ましたは此ぼん様で御ざり升わいな（ト引合すれば此ぼう主鼻ぴしやげにて鼻聲也）ハイ是はひやうお泊なされました愚僧なは丸哲と申ます。内方の旦那殿がお咄しゆゐ。参りました　彌次コレハ御苦勞サア〳〵是へ〳〵北八コリヤ御亭主さんだん〳〵お世話だが氣の毒なとが有りやす亭主何じやいゐ北八イヤぶしつけ仕らアノお方でい間に合ますめへなぜと云にちとばかり素人狂言でも仕といふ樣ゐぼん樣でなけりやァなりやせん亭主ソリヤどしたもてじやいな北八イヤ先刻お話し申た通り先の親元へ行て登ようてへが金がねへと云事を返事した上で彼息子が三百両なければ登らきぬへといふものだから其心いきをせにやァなりやせん。ところで彼の盛衰記の梅ケ枝が無

○以ニ盛衰記ニ梅ケ枝嘘言ノ穴ニ非ニ無間鐘ニ告言之録

間の鐘の所作事。撞木を杓柄と。こじ付て（チヽ〳〵）ァヽ三百両の金がほしいなァ。なぞと。其坊様にやらかして貰わふやァならねへと云ものだから。むづかしい亭主ィャような御座り升此坊様もありやうい馬鹿村髮の助と申て以前は宮芝居の女形をやりおつた者じやさかい。ふらでけじやわいな。さいはひこちの娘めが今無間の鐘。習ふてじや何もなぐさを。淨瑠理かたらしてやらしましよかいな　丸てつ　ひやりましよとも〳〵我しうめケ枝をひやるさかい。何様ぞへん太をやて下んせ　彌次　コリャ面白い鼻くたの梅ケ枝に北八源太は手前が相應だ　北八　ェヽ馬鹿ァ云なせへ悪いしやれだ（トまじめになり。小言云つて居る内。亭主が差圖に十三四の娘三味線を抱へてくると。内の女房下女飯焚きまで次の間よかたまり丸哲ぼうをそゝのかしるが次郎おかしく）コレ北八ァノと呵り。かゑ様や女中たちが見物してじやが。壹番浴をとる氣はねへかどうだ（ト袖を引れて北八すこしうかれがきて）いか様

見物が多いと張合がある。まゝよ源太におれがなろふ其替りいひぐさは出たらめに遣がいゝか丸てつ　ひよ御坐り升〳〵ザテお虎さんへん太の出端から遣下んせ　彌次（ハヽ〳〵）跪むしやくじやの梅ケ枝もいゝが源太が織ル染返した着物着てゐるもめづらしい　北八　コレ〳〵東西〳〵（ト此内娘淨瑠理をのたりいだす）夜毎〳〵に通ひくる槇原源太景季弔年せが奥を伺かへば丁度よい首尾。さいはひと。すつと通れば梅ケ枝は亘燧にとんと身をそむけそらさぬ顔て吹きせる　北八　コレ何が機嫌にいらぬやら。めつきりともたせ振りわれらが様ゑ涙人の黴た襟にはつかれまい　上るり　ずんとたつをまたしやんせ　丸哲　敷座ひきばかりをふとめる　笘　賞　ひやふでけふこゝへほらばれたはふみでひらせて合点じやなゐか　上るり　にくい男も目に知もろき涙は戀のならはせゐり　北八（アヽコリャ）よるな〳〵　夫　嗅てならねへそつちへぐつとよつたく〳〵ごうせへに嗅い梅ケ枝だぞ　丸哲　ひよりや聞へませぬへん太さん　北八　ェヽ寄なと云にコリャ手短かよ遣てくれうコリャ坊主ィャ梅ケ枝。産衣の鎧はどうした　丸哲　ひちなん即滅と三百目に曲たわいな　北八　ナニ打殺したソリャなぜに　丸哲　そもやわたしが便毒から骨疼になつて山歸來呑程に〳〵氣種はじく〳〵此ひやなゐ助たい斗り

○曲三百目是レ質難即生

金にひやねならたつた三百目で。ひくねしやなを落すが。ァ、ひやながおしいなァ

（三下り哥）二八十六で踏附られて二九の十八でつゐ其心四五の廿なら一期ゑ一度わしや帶解ぬ丸哲エ、何じやの人の心も知ずに。ふたいくつさる。ほんにひよれよ彌次イヤまつたく（ト是も答へられず勝手にいつて以前の梯子見世の間に横たきしにして有しを引さけ來り。かも居に打掛二階の氣取にて彌次郎中段に登りながら手拭をたゝんで大盡風にちよいと頭に乘せて）サァ〳〵源太が母の安壽の役だサァ和尚やらかしねへ　丸哲傳へきく無間のひやねをつけば。有德自在心のまゝ。是より。小夜ばよの中山へは遙道は。へだゝれども石鐘思ひつめたる。我念力。此ひようづばちを。ひやねと。ゐぞらへてひしにもせよ。ひや。ねよもせよ。心差所は無間のひやね（トさせるおつとり色々ある此時彌次郎階子の上から打替の錢をばら〳〵となげ出しながら。自身にじやうるりか）其金こゝにと三百文打替の錢ゐげ出す御山おろしに山吹の花吹ちらす樣にはわたる　三　らて丸哲爰ゑ三文かしこに五文拾ひあつめてひやん百銅コリヤ厚れの賃錢先取とい有難い（トかき寄てたもとに入んとするを彌次郎階子の上から丸哲をとらへ）ソリヤやるのじやァねへ已がのだ（ト引きたくろうとするに。丸哲いやるまいとあらそう柏子にかも居に掛たる階子はづれて彌次郎引繰りかへりどつさり落るとはし子ゝ丸哲の上にゐり娘もひ腹の骨をうたれてわつと泣出せば彌次郎腰骨を撫さすり（アイタタ、ゝ）丸哲（ァゝウゝ〳〵）亭主どしたぞやい〳〵（ト家ちうがうろたへて煙草盆引くりかへすやらあんどうを

○梅ケ枝之一心自手水鉢釣揚金玉

打こかそやら座敷中只まつくらとなり。ゐくやらわめくやら大さはぎとなり亭主やう〳〵あかりを持來り）（アゝコリヤ）娘めゝどうじやいゝヤ梅が枝がおかしな目をしをるわいコレ〳〵氣を慥にせいやい丸哲ァゝ〳〵くるしい。あしや恟くりしてはつと思ふた。へいやらして。金玉が上の方へつゝたわいゐ（アイタたゝゝ）彌次ソリヤ。こまつたものだ（モシ〳〵）御亭主樣。梅ケ枝が金玉を釣し上ました北八金玉のあがつたには。いゝことがある先刻見れば こゝの見世に錢膏藥といふ看板が見へたが夫をぱんのくぼへはると金が下がる亭主ゐゑいわんすぞいな。錢膏藥。首筋へはつたてゝ何下がるものかいゐ北八ハテ下ける理屈さ。なぜと云なせへ。錢が上れば金が下がる亭主エゝ何のおつちやいな丸哲アゝわしやどうやら能やうじやがいとさんはどうじやいゐ（宿屋の女房「コレ誰など一ト走り寸伯さんへいてたもらんかいな丸哲わしやもう能さかい醫者樣呼でこうわいな。其替りお寺へゝ誰など外の者やらんせ亭主エゝ何ぬかしくさるぞい北八ホンニお氣の毒なこつた娘御は何所を打なすつた亭主ひ腹ゑろふ打おつたてゝいたがり升ゐいな彌次痛いひ腹ゝ都の生れ人よどやされ。ひよんなめにあはれてァゝお笑止千萬なとだ亭主イヤお前人の娘に怪我さして口合どころじやあろまいがな彌次（ハゝ）人の娘に怪

我さしたとハわしやどうやらはづかしい亭主イヤ笑ひどまろかいおそうたねこなさんたちはけたいじやぞや彌次けたいとい何がけたいだ弥亭主何おといちよまいふてじや。よう思ふても見さんせわしや此年まで宿屋しておつたが。つねに梯子持て來た客をとめたこいなねわいな一体遠國のお方が何しに梯子持て歩行んすやら。まちやとんとよめんわいな。もしや家根からおどり込衆じや。みねかと家内のもんが放言てじや有つたが成程奇怪こと。しおねん衆と見へるわいな（ト亭主やきつとなり少し言ひあらくしくいふ。此踊り込とは上方にては夜盗の事をお踊り込といふゆゑなり元より彌次郎むか腹立おれば）イヤお前おかしなことといふをつち

ちァ。しら。きちやうめんのお旅人様だ。ふつにひねくつたことを云と。了簡がなりやせねぞ亭主ヲ、いしまやの何云ふたて、。あなんたちが梯子持て御座んしたからおまつた事じやをいな女房是いるァ。そなねみ人にかまいずとち來て下んせ。いとがァレ〳〵ひよんな目附してじやわいな（トなみだくみてさはけば亭主もうろ〳〵）コレ見やんせ若も。いとめが死をると。こなさんは解死人じや。そう思ふて居やんせ。女房がもうたのじやァヤイお虎ヤァイ〳〵〳〵女房いといのうく（ト夫婦ば娘をかきいだきたちてなきわめけば彌次郎。にはかにうろたへ出し）（エ、コリヤ）北八どうしたもんだろうおらァもうこゝらにやァ居られねへ亭主コリヤ〳〵お虎死でくれなどうじやぞやい女房お虎イのう亭主お虎ヤァイ彌次エ、情ない。コリヤたまらぬ〳〵（トうろ〳〵して立たり居たりさわぎ居と）亭主コレまなさん。どつちやも。遣事成んぞ彌次ハイ〳〵何所へも行は致しませぬコリヤ〳〵北八ぜんてい手前が悪い何の有体に云ばいゝものを。ちやら〳〵嘘をつねたからおこつてい無間の鐘だのあんのと祿でもねへことを初めたから此騒になつた。元は手前が發頭人だから解死人はそつちへ讓るぞ北八ヲヤとんだ事をいふ。當人はお前だわい彌次そんなら拳をして。まけた方が

○彌次ノ顔色如見

○梯子故段々誤り入る

解死人だ北八馬鹿ァ云ゐせへおのらァしらぬく（ト此内醫者も來り藥など與へ樣々かへせばみなく安堵し彌次郎むねなでをろし落付て此上はあやまるにしくはゐしと北八を頼み段々わびとしてあやまり証文を書てやうくと此いさくさおさまりけるもつとも北八加判にてしかつめらしく書たる其証書）

一札之事

一我等此度平假名盛衰記淨瑠理之内安壽之役相勤候所寶正也然る所梅ケ枝無間之鐘相撞候節其金是ゑ紛在趣申打替之鳥目投出し候迎梯子爲辻候故丸哲殿隱蔵御釣上被成幷貴殿息女ゑ怪我爲致候段全く右梯子かも居ゑ打掛候より事起り候趣預二御腹立一無二申譯一段々誤入候所御了簡被下添存候然る上は以來御宿御無心申候共梯子抔決而持參致間敷候爲二後日一仍而如レ件

月　日

當人　彌次郎兵衛

証人　北　八

此証文にて事治り宿屋の娘も次第に必快く。中直りの酒汲みかはして。夜もふけければ二人りは順て打臥たるに程なく夜明で家内の人々起立たる物音に目を覺し支度調のへそこくゑ立出るとて彌次コレハ大きにお世話になりやした殊に色々な事でお氣の毒な亭主御機嫌能おいでなされ女房若々お梯子がござり舛わいゐ彌次イヤもう夫はこちらに置てくんなせへ今日は所々見物して晩ほど又お世話になりやせうから亭主否々お持ゐされそしてこちや晩程はお差合が有わいな（ト一体亭主は此二人をうろんに思ひおたりゑゆゑ梯子も預る事きみ悪くいかなる後難やあらんと請附ざれば詮方なく又かの梯子をかつぎ此所を出立）北八ナントけふは何所ちの方へまで附のだ彌次イヤまだ東に見物じて〳〵所が在がマア今日は北野の天神樣へ行やせう（ト段々道を尋て堀川通に出）北八時に思ひ出した事が在るソレ伊勢の古市で京の人と一坐したが偖に其人は千本通中立賣とやら云たか北野の天神樣へ行道だと云たじャアねへか彌次ヨヽサ邊栗屋の與太九郎か北八（ソレ）其奴が所へ尋ねて行て酒でも呑で遣ろんじやねへか彌次ナニあだじけ茄子びが呑せるものか北八ところをおゐらが術に掛て呑倒そふ（ト往來の人に千本通を尋ね中立賣よを軒に立掛て例の梯子）御免ゐせへ（這入ば與太九郎）（至り邊栗の與太九郎の方へやう〳〵登りじやわいな彌次扨マア伊勢では大氣お世話に成やした與太九郎何のいなサアこつち這入んかいな北八ハイお久ふお坐りやす與太九郎イヤ是は〳〵まだ表にお連樣が有そう

じゃ北八ニ二人ヨリ誰も居やせん與太九郎夫でもありや何じやいゐ彌次梯子の事かへ與太九郎何じや梯子お持せかいなコリヤ氣疎北八イヤお前への所は中立賣ひよいと上る所だと云なすつたから。若高い所なら梯子掛て登ふと思つて態々求めて持參致しました與太九郎（ハヽヽヽコリヤ）おでけじやわいな時ゝ何もお愛想がゐねお支度はどうじやいな彌次アイ今朝宿屋でたべたまんま中食はまた致しやせん與太九郎ソリヤお賴しみじやわいゐさ酒ゝゐとあげたいが此邊に酒屋はなし北八酒屋はじつきにお隣りに有じやアねへかへ與太九郎イヤあこでは小賣は致しませんわいな。せつかくのお出お煙草でも上りなされ北八煙草は此方だから勝手に致しやせう與太九郎お前方せめて最少と先へ寄てお出なさると氣疎者が有わいな桂川の若鮎生ておるのを鹽燒か魚田にそるとねからはから味いの何のと。云ようなこつちやなねわいな。イヤまだ四條の生洲が近いとお供していこもの。あこの饅は加茂川て酒してとつど違ひた者ゑや氣疎味いがな。そしてあこは玉子燒を。ゑろふようしてくはすわいな。何じやあろとこれ。程に大きふ切おつてぽつぽと。息の出るのを南泉の湯皿に盛て出し居が味いと云ては。根から葉から含んで持やうじやわいなホンニ夫より又秋よお出なさると取々の松茸じや當所の名物で是が又外にはなゐわいな。新らしねのを。すましの吸物にして鳥渡山葵おとして酒のお肴に致とならば。とつともうなんぼ喰ふてもねからあきがなゐはいゐ（ト咄し斗りして何も出さぬゆゑ北八こらへ兼ねそ飽九郎は一向北八の逃げたるを知らず）イヤ。最ひとりのお方は何所へいかんしたぞいな彌次最ふ歸りやした與太九郎はて扱ねからしらなんだわいな。いつの間にいんでゝあつたぞいな彌次今松茸のお吸物の出た時。中座致しやした與太九郎ソリヤ殘り多い後段にまだお菓子のお咄し致そもの彌次イヤもふ先程から大きにお馳走になりやせね。お影でひも爲ひお暇致しやせう與太九郎イヤお待なされよい所へお出たわいな。ちとお咄しが有わいな。アノ伊勢の古市でおつき合申た時のあといゐ。あの時の入用金壹兩爲やあつたかな。わしや箒用違ひして金壹分二朱よちから出して置たさかいコレ見ゐされ道中の小使帳にお娼屋の附も何もかもこなねよ細よ書附て置たが内へ戻つて箒用して見るとお前方一人前百廿四文宛わしの方へお賣ひ申さねば箒用が合んわいゐ。わづかのこつちやさかい。どしてもだんゐねが取にしくはないさかい。お二人分。二百四十八文お賣い申ましよかいゐ彌次エヽお前も

○的事

外レ褌ト出ニ

松竹ノ話一

○此是曰ニ數蛇ニト

今となつて。さたぬ（事をいゝ夫斗りの事。うつちやつて置おせ（こつちでも立替た事が有りやす與太丸郎ソリヤあげるのがあらはあけるさかい云なされ箒用は箒用じやマアこちへ取のが此通じやさかい斯しよわいな。はしたまけて。あぎよはいな二百文くしなされ彌次エヽ外聞の惡い其時取は能ものを（ト小言八百云へ共合点せず彼是とせり合た所が果し附き彌次郎面倒也とて、百文出して遣ると）與太丸郎（ハヽヽコリヤ）御きんとうじやわいな。是からお前方は天神樣へいかんすじやあろ。そしたら序に平野樣金閣寺へ。いかんしたが能わいなおそなるさかい早ういて戻らんせ彌次大きにお世話（トふくれ顔して立出れば隣りの酒屋より北八によつまありでてきたりて）どうだ御馳走が有りやしたか彌次郎いめへましい目にあつた何の手前が尋てよらず共いゝものを錢二百只取れた北八（ハヽヽ）どうして〳〵いゝは其代りアノ梯子のやつかいものを爰にうつちやつて置てよまらせてやりなせへ彌次郎ナアニよまる者だ直に賣て錢にするはあの野郎めに梯子迄只取られてつまる者か。やつぱり。かついでゆかふ（ト夫より道を尋ね行く程に北野の下の森と云に至る爰ハ至て。賑やかにて芝居抔も有り見せ物豆蔵よみ賣講釋。又唐茶釜と異名せしよしず張の水茶屋休なる者所々に在り是におかしきしゆかうあれ共作者思ふ事あればはぶきぬ。是より天滿宮社内へ掛る道に菜飯田樂を賣。茶屋おびたゝし）（く有り赤前垂の女軒に出て）あなたお休んかいな菜飯お田あがらんかいな。茶々あがつてお出んかいな彌次モシ〳〵わつちらア天神樣へ參詣してけへりにお前の所で休みやせうから此梯子を爰に置てくんなせへ茶屋ハイ〳〵お預り申ましよわいなお早やういてお出でなされ彌次お頼み申やす（ト梯子を茶屋の門に立掛置て行過て）ヤレ〳〵重荷おろした何のかへりよ寄る者かナント北八梯子を捨たちゑは。どうだ北八ハヽ面白くもねへ（ト經堂前よりうつこんの馬場に至る此所は）いつも借馬數多出て馬の稽古あり見物おびたゝし北八ヲヤすさまじい人だ何かあるそうだ（ト立よつて人をおし乘（ヒヤアドウ）（〳〵〳〵）（見物の時の聲）人分見れば馬のかけをきおるナノこんよやく玉見るような天窓の親父めがふろうよう乘くさるわい見物アリヤしれたこつちやわいな博勞の親方どや見物かいなアレあつちやの男見やんせ手綱をあやよ取てあなねな手附してねおる。アリヤ大方織屋の手傳じやあろどいそしてアレ〳〵十二坊の弟子坊が珠數つまぐる樣な事して手綱持てじやわいな北八已も一鞍乘りでいな向ふ見てねる姉樣に（ト人ごみの内女連が二三人立ている。後ろへ廻り）娘ヲヽ痛やの誰（見物しながら前に居る女の尻をちよいとつめる）さんじやいなコレお丸さんお前ち來て。かしんかいなお丸何んじやいゐ娘誰じややらわしやおいどをつめりたわいな年增の女ソリヤおゐどのなおくよで生れた人さんじやあ

ろぞいな。かまわんそなほつておかんせ　彌次郎ア、北八が惡い酒落をするなへ　北八　ナニ
おゐらアしらねへ（トいひさま。にくさもにくしかの年増女の尻をつめつてやろふとわき
目をしながらそばにより年増の尻と思ひおぶつて居る子の尻を思ふ
樣つめ）子ア、痛い〳〵（トわつとる（誰じやいな惡いことさんすわいな（おぶさつて居る子）アノ
ると　（く年増の女）
伯父さんがつめつたわいのふ　女ア、すかん人さんじやわいな　彌次　堪忍しなせへさりとは
外聞の惡い男だ（トあしばやにすで〳〵と此所を過て南
の御門より入て天滿宮の本社へ參る）
おまもりを首に掛つゝとうとまん。宰府の宮をうつゝ神垣
北野天滿宮は昔し近江國比良社の神主良種神勅を蒙り朝日寺の僧。最珍。右京の文子等と
力を合て靈祠を作り天德三年右大臣師輔鄕魏々たる大廈を改め營み給ふ今の北野の宮是
也社頭に渡邊の綱が納めしといひ傳ふ石燈籠笘むしてあり
綱の名は今だに朽ぬ石燈籠。昔しを今ゝ三つ星の紋
東向觀音は梅櫻の二樹を以て。管神御手づから刻ませ給ふところ也と云
御利益は四方に香ほれる觀世音。梅櫻よて造り給へば
夫より社內をぬけて平野の社に參る。此御神は。四坐よて今木神。久殿神。古開神。比賣神

なり
こゝろよく飯くふ爲に木賸の平野の神を祈りこそせめ
爰に紙屋川の邊りに二軒茶屋あり二人は空腹となりたるに支度せんと此茶屋に這入ば女
ども出向ひて能ふお出さわいな。ツィト奥へお出なされ　彌次　何ぞ味へ物が有かぬ飯も喰
たし酒も呑たしマアちよいとした肴で一盃早く頼みますぞ（ト奥のゑんさき腰を掛ると
あゆの煮びたし也）彌次　早速是は有難女中一ッ汲給へヲットありやすく　女銚子盃を持出る肴はほし
リャわたしが心の丈じやぞへ　彌次ハア此鮎がお前への心いきとはどうだ女わたしはナお
前さんが川鮎と云こつちやヲいる　彌次コリャ有難へそんならお前にあけやせう。ドレわ
つちも心いきの。肴あげやせう女（ヲホ）此生姜が何としてお前樣の心ぢやへ　彌次　わしや
はじかみい北八（ハヽ）こぢ附る者だ時ヨ女中田樂で飯を早く呉んゐせへ　女ハイ〳〵只今
（トやがておんな田樂と飯を持來る。ふたりいしよくむしながら見ればつゐたてのあるた
にさもむさくろしき出家二人麻の衣のよごれたるをきて。是も田樂よて飯を喰ながら一
人ゝ僧の云）ナント役戒ぼう。昔樣髮は何所結ぞいの　役戒ヲ、持戒ぼうわり樣もわしが結
を聞けば
所ろで結はんせ。あこは氣疎よう結わいの。わしや久しうのんこ搖に結てじやあつたが。

今いはやらんさかいコレ見やんせ雷子に結て貰ふたがゑらう氣持がようてたまらんわいな（ト云つゝ淺黄のづきんを取れば。此ぼう樣身には麻の衣着おがら頭は卷髮にて芝居のやつしといふ髮也。彌次郎北八是を見て肝をつぶしおかしさ半分。不思義そうに伺ひ見れば）役戒ハヽァ成程よふ結くさつた。私や又こちの弟子ぼうに結せおるがもう〳〵月代がむちやくちやさかい。見て下んせいつの間よやらこあねに剃こかしかつたわいな（ト是も頭巾を取れば髮はぼんの窪にあるそりさげ奴なり）モシお隣りのお客樣もつちらは遠國の者で御坐りやすが所々あるいて居るうち色々樣々な珍らしい事も見聞しやしたけれど御出家方の髮結たを見るは眞事に今が初め。どうも合點がいきませぬ。卒爾ながらお前方ゝ何所のお方で御坐りやすね役戒ハヽァ此の頭の御不審かいな。こちや空也堂の僧じやわいな彌次郎なるほどな咄しに聞て居やした彼茶筅賣るお方だな役戒さよじやわいな。こちの宗体は昔しから由緒が有て。こないに身よは染衣を着しながら天窓は大俗凡夫じやわいな彌次郎夫でさとへやしたがなぜ又お前方の居なさる所を空也堂と云やそね役戒さればいな。こちの宗体では。どしたこつちややら。代々皆ゑらい大食で飯じやあろが何じやあろが何ぼでも能ふ喰さかい齋非時に呼れていても。しぬつけられて最つと空也どうじやいなと人殊に云たを直に空也堂と云わいな役戒そじやさかいコレ見やんせ鳥渡こゝへ來ても。二人でお鉢三盃喰たわいな彌次郎ソリヤ途方もねへ大喰いだ尤もわつちらも喰た物さ何時やらも信濃へ行きやした。ナニカあつちは飯どころで御坐りやすから先朝ずつと起ると茶受けにとて坐頭の天窓はどあるにぎり飯を。出やそがあつちの。てやねは子供でさへ夫を十四五程宛も喰やすわつちは折悪く氣分が悪くて。ろくに食も喰やせるんだが。十七八斗も喰やしたろう。そうするとやがて飯ができたとつて。そまの亭主の云には江戸のお客いおあんべへが悪いといふとだから。今朝は麥飯を焚ましたとつて。何がとろゝ汁を摺た程に摺鉢の二十斗もそこに並べて有と思ひなせへ。そうすると碗へ盛が面倒だと家内の好等は皆其摺鉢一宛引受けて麥飯を其中へ山のように盛てくらひおる。わつちも絶食間前で居たが麥は大好物でこらへられやせんから。せめて一摺鉢もやつて見やうと喰掛たとあろが口當りが能からずるく〳〵と。何のとなしにすべりこんでとう〳〵摺鉢に五六盃も喰やしたろふが。今では。どんと食がへりました役戒ソリヤお前も飯は素人衣やないわねのナント飯盛りさんせんかいな彌次アノ飯盛か爰にも有りやすがね役戒（ハヽ）

○彌次亦將喰ントレ鉢ナ

お前の云てじやは。道中の飯盛じやあろ。そじやなかわいな。こちとらが仲間でするは酒呑衆が酒盛といふかくで飯をたがひに喰あふを飯盛と云わいなちとやて見やんせ。幸ひこちもまだ飯か喰たらんさかい相手ほしさの玉手箱じや。わいあ北八どうやら面白そうなこつたが夫はどうするので御坐りやそね役戒マア何ぞやあろと。やて見なされモシ女中鳥渡來て下んせお鉢のお替りじや女ハイ〳〵（飯鉢に一盃持來ると）役戒サアはじめんかい。イヤ亭主役にわしのらやろわいな（茶漬茶碗に飯を盛てさつ〳〵）役戒サア〳〵お前さそかいな（次郎彌と喰仕舞へかの茶付碗つけしやくしを取）酒盛ならお酌といふ。とまろ飯盛じやさかいお杓子致しましよかいな（彌次郎が持たる茶碗へ飯を盛附る）彌次郎コリャわつちが喰のかね役戒さよじや〳〵彌次ハヽアきこへやした盃を廻す心だね（彌次郎かの一盃の飯をくひ仕舞て茶碗を役戒い方へ差と）役戒コリャ氣疎おさへましよかい彌

○猿之尻笑

次イヤまづ〳〵持戒はてお前もう一盃かさねなされ私そけてあざよわいる（一盃盛附るに又と）彌次そんゐらお前すけてくんなせへ（飯の盛て有まゝ茶碗を持戒）是も酒じやと附ざしじやけれど飯じやさかい喰さしじや彌次郎エヽお前の其髭むしやくしやと。不掃除な口中で喰差はあやまるの然もソレ〳〵水鼻をたらしてさ持戒ナニいふてじやぞいな。そなゐなといふて飯盛附合がなろかいな早う喰んして誰よゐとさゝんしたが能わいの彌次郎ソリャ情あゐさて〳〵飯盛といふものはさたねへ者だもふ〳〵わつちは御免なせへ役戒イヤお前麥飯摺鉢に四五盃喰んしたと云てじやなゐかいな。ひきやうなと云んす。こうさんせ一拳いかんせ彌次郎そんゐら拳で參らふか彌次よかろわいの其替り否や應とんといはさんぞや（上へ盛添て）持戒サア〳〵薩摩拳じやサンナ彌次ムメで〳〵持戒トウヲイゐらいか〳〵サア〳〵上りなされそのくせお鉢のお替り云や（無理無体つきつけられて彌次郎めんだうなりとがまんをおこし。やう〳〵と喰仕舞へば）役戒最一ッやらんせお鉢の替め云や彌次イヤもふ御免〳〵役戒コリャやくたいじやお前は田舍者じやな麥や挽割の交たのを上りつけて居さんすさかいこなゐな一本木の米斗の飯はようわがらん者じやあろぞいな彌次郎ナニわつちらア

猪の牙のような飯でなくちやァ喰ひやせん役戒さいな是が猪の牙ぞやわいな彌次郎そんならお前替り目の。あひを頼のみやと役戒ソリャよいはひ迎ものとに大きなもんでおつもりにしよじやなねかいゐ（ト柴漬の入て有りし丼を打明て飯をもりぺろ〳〵と喰て仕舞役戒坊へ廻すと是もしこたまよそつて喰ひ仕舞）サァあぎよわいな。イヤ飯でにちや〳〵する（ト鉢へ丼を入洗ひて）サァすましたヨいのおつ盛じや〳〵彌次イヤ〳〵もふいかぬそしてきたねへ人が雪隱へ入た手を洗つた手水鉢でするましたどんぶりそれでどうして喰るものか役戒そしたら此茶碗で彌次郎イヤもふ腹がさける樣だ夫に聞ゐせへ今の一盃やらかして居た時何か懷中のうちでぷつツりといふ音がしたからさゞつて見たら。越中褌の紐が切れる位に腹が張切りてきたものをもふ〳〵。おゆるし〳〵役戒（ハヽヽ）もふよしゐされおつもりじやコレ女中何ぼじや勘定して下んせ女ハイ〳〵御一所に致しましよかいゐ役戒そじやわいな女お酒とおでんの代物ハ十文でよう御坐り升がお飯ハ五百七拾貳文頂戴とう御坐り升役戒ソリャ氣疎安いものじや割合ゐ致そかいな（ト此代錢勘定して半分の拂ひすれば）彌次郎ソリャあんまりだ。お飯ゑお前方がしこたまあがつてわつちハたつた一膳か二膳喰たものの二ッ割とは不承知だね役戒何云すぞいな一坐で飯盛さんしたもの。よふ喰んはお前方の勝手じやなおかいな（トやつツかへしつ是も理くとう〳〵二ッ割にして此所の拂をあしけれ）北八（ハヽヽ）い、見世物だサァ彌次さんどばゝ僧二人も早くも先にたつて出ゆきたるにうだいかねへか彌次ヲヽサ行てへがあんまり喰過てうごかれねへどうぞ。手を引てそろ〳〵立せてくれ北八エヽいくじのねへ。サァたちなせへ。彌次コレサ手荒くして呉な飯が口から出るようだ北八テモきたねへとをいふサァ〳〵たちなく（ト云つゝ彌次郎の手を取引立ればやう〳〵に立上り出かける）女おもるりとお出あされ北八アイお世話にありやしたサァ〳〵彌次さん行かねへか。どうする〳〵

はじめから人を茶にして何盃も。やたらに飯を空也寺の僧

是より又天神の社内にかへりたるが。東の門より一條通へ出る道を。しらずうか〳〵とも と來し南向の門をいでたるに思はずもかの階子を預けし茶屋の門ちかくなれば彌次郎心付きてあで〳〵先刻の階子がやつばりあそこに。立てかけてある。エヽこつちの方へ來なんだらよかつた者を。北八又跡へ戻ろふか北八なるほどあそこへ休まずに直通にしたら。ひよつと見附ッた時例の階子を持て行と云だろふしと云て跡へ戻るもごうはらだど

○彌次喰精米又飛喰割

うぞ能ちゑが有そふあものだ（トたちどまりて。しあんして居る内うまんの馬場の。借馬一匹博労が引て來たるを見るより）北八イヤアいゝとが有ぞ〳〵アノ馬の横腹の方に。くゝつゐて茶屋の前を通れば馬の影にあつて居るからよも、や見附はしめへじやァねへか　彌次郎ヲヽサ夫が能コリヤ。大でさだ〳〵（トあとより來たる借馬を見合せ居る内。やがてそばちかくなれい。二人り共並んで馬の影にかくれ行と。丁度かの梯子を預けし茶屋の前に至りて馬はたちどまりてうごかずふたりはかけぬけて茶屋ゑ見附られてはせんなしと思ひ同く馬の横腹の方へ附て立どまりゐる博勞が馬を打て）エヽ此ならずめは何をしをるのじや日が暮るはやい（ト打どもうごかずやがて馬は小便しやァ〳〵）彌次ェヽコリァ又情なゐめにあふとだ北八エヽ呼い〳〵。ソレ彌次さんお前の方へ。流るゝ彌次畜生めがとんだめよあはせる是ハ〳〵（ト飛のけば向の茶屋の門さきゑ居る女目早く見附て）モシナ〳〵こつちやで御座り升わいな。サァお這入なされ北八コリャこそ見附られた彌次コリャたまらぬ〳〵（ト一もくさんに駈出せば茶屋の亭主とんで出）コレナ梯子が御座り升わいな。ヲヽイ〳〵（トよび立れと耳にも入れず二人りはまつくろゑ成てにける）両人はやう〳〵と息をはかりにかけだして下の森を打過元の千本通にいで今宵ハ島原の廓中を見物して安見世もあらは一宿せばやと申合せて往來の人に道すがらをたづね千本下りて行程に町を離なれて東寺に至り

手折んと手をだす人ぞ鬼あらめ

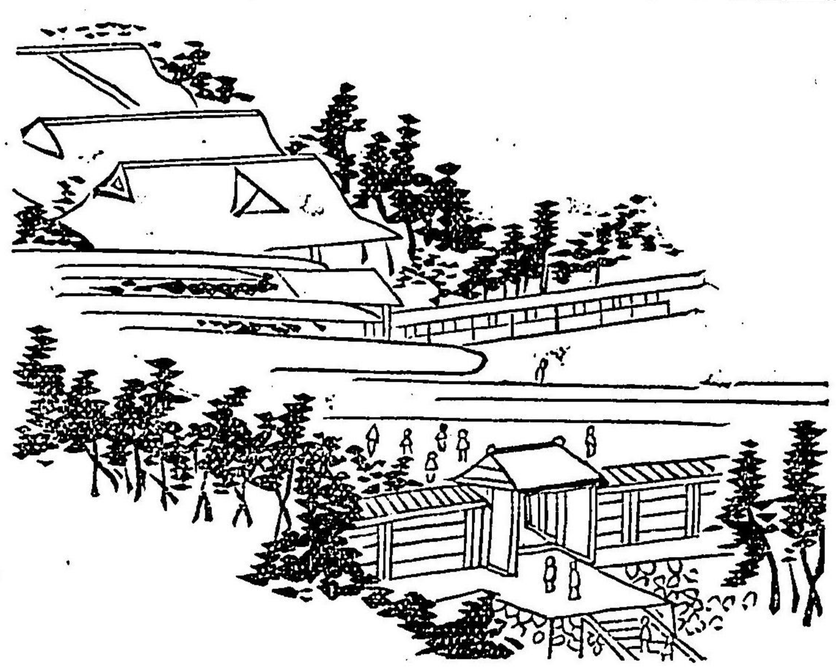
東寺わたりの花の盛りゑ

夫より壬生寺に參りて爰に薮貫門先にたてよせたるあやしの茶見世ゑ引まねれて其夜の宿と定め打臥たるがあくる日島原を見物し朱雀野より丹波街道を横切に淀の大橋ゑ至り。爰より下り船に打乗に大坂へぞ。おもむきける

○八編

押照や難波の津は。海内秀嵆の。大都會にして。諸國の賈船。木津安治の。両川口に。艫を並へ。碇をつらねて。爰に諸々の。荷物を鬻ぎ。繁昌の地いふばかりあし。殊更花の

○大坂多川船順之朝暮船頭



押二居鵜一
此所三以
狩。
有二押照一
冠辭一哩

春ハ淀川ヨ棹さして櫻の宮に遊び。網島の鮒卵に酔を催ふし夏は難波新地の納涼に螢を狩。豆茶屋ヨ腹をこやし。秋はうかむ瀬の月。冬は解船町の雪景色。四季折々の詠多かる中に。目枯ぬ花の曲中ハ。いつも盛の春の如く賑ひ。道頓堀の芝居い常も顔見せの心地して群集絶ず。かゝる名樂の地を。見殘すも本意なしとて。彼の彌次郎兵衛北ハなるもの。伏見の豐船に途中より飛乘して。早くも大坂の八軒家に至り。爰より船を上りたるは最早黄昏時にして東西をしらず。南北を辨へされば人に等問ひつゝ。長町を差て行程に。堺筋通を南に日本橋ヨ出たりければ宿引さども爰に居合せ二人を見掛て宿の相談を。しかくるに。早速きはまりもぐさよ。此長町七丁目なる分銅河内やと云ヨぞ連行ける（宿引先にかけ抜て）

サア〳〵お客樣お供して來たわいな（宿やの番頭）是はようお出なされましたおいくたり樣で御坐り升彌次ハイ同行四拾七人番頭ナニ四拾七人樣コレ〳〵おさん殿や大勢樣じや西の奥の間をうちぬいてあけさんせ。よう奇麗に掃だしたが能わいの。コレ久三お足お洗ねなさるお湯はどう云やいぬるうてもだんなゐ水ゐどうめてあけませい。早う〳〵。時にもし其四拾七人樣ハ。いとお跡かいな彌次イヤ是ハ先達て鎌倉へ發足われ〳〵兩人は是より

泉州堺の天川屋へ番頭エヽ何のこつちやいな。やつはりお二人かいなゝコレ〳〵おつんやおふふりじやといなこつちやの。お一人居ゐやしやる。せまい所にさんせおつんハイ〳〵御案内。致しましよかいな（ト此内兩人は足を洗ひ上りて見るに。此宿は當所隨一の大家にして凡そ間數七八十も有と云り。兩人女に連られて行に奥の口元の六疊斗ある小坐敷へ這入ほかに一人此間に泊り合せおることなれば番頭）御ゆるしあされませどうぞもし御究屈に。御坐りましよが。御一所になされて下さりませ（此旅人は丹波の人）だんなゐてやサア〳〵こつちやへわせさつしやい北八是ハ御免なせへ彌次モシわつちらア二三日も逗留して所々見物がしたいからお頼み申ます番頭ハイか。しこまりました。先御ゆるりと（トいひ捨て勝手へ行）丹

波コリヤ我りよたちは何所から。來よりました北八わつちらァ。江戸で御坐りますお前へは丹波わしい丹波の笹山在郷。今度高野へゆきよります。コリヤあじいな縁で相宿しより升わいな　彌次郎　兎角旅は道連お心安いがよう御坐いやす（ト此内宿の女）飯上げませうかいな（ト三膳もち來りすへるしよくじの内色々あれ共略そやがて飯も濟湯にも入て仕舞と。大あばたの女按摩いやらしき風ようてさぐり〳〵來り）お療治はよう御坐り升かいな。どうぞしてもましておくれんかいな　彌次　イヤ按摩さんかお前女だの。然も生ていらァ。北八どうだもま弥へか北八こつちから揉で遣りてへあんまヨ丶ふかし。何云じやゝら。お前さん方い。お江戸衣やな。わしやアノお江戸のお方が好じやわいな。殷さちは男らしふて。物いひじやとこが。ゑらいすぱりとして。よいわいな北八お前さつぱり。めが見へやせんか。見へると此内よとんだい丶男がゐるよ見せてへなァ　按んま　そじやあろぞいな彌次郎ナント按摩さん此男よりわつちがい丶男か。そうして年はどづちが。若い當直て見ゐせへ。當つたなら二人ながら揉で。貰ひやせうあんまソリヤいつきよ當るわいゐ北八コリヤ。面白へ。サアおいらはいくつ位だあんままちなされお前さんは廿三四北八コリヤコリヤ。さついは。男はい、男だろうねへあんまさよじやお顔はよう道具が揃ふてじや

○両個又會ニ女兵ニ財符城將ニ落陷ニ

北八かけて有てつまる者かあんまお目がゑらい。いつかなお目じやあろがな。そしてお鼻が北八高いか。低いか。あんまこふいふたら。お腹立か。しらんか慥かに獅子舞鼻じやあろぞいゐ。丹波（ハヽヽ）氣疎〳〵彌次郎おゐらはどうだあんまあなたは。こふけておるでちやゐいな。お年は四十ゞかりで。お色がくろふて。鼻の平たい髭だらげなお顔じやあろがな北八奇妙〳〵按ま　そして。ぼやけ太ようにより肥て居なさるじやあろ彌次郎イヤ遣つた〳〵おいらはひんなりとして色男北八嘘をつく。コリヤ按摩さんがかちだつ揉でやりな彌次郎約束だから仕方がねへ。爰へ來てくんゐ按摩（ヲホヽヽ）夫へ參ぜふかへ（ト彌次郎がうしろへまはり揉にかゝ）ると此うち女の菓子賣。箱をかさねて持來り）ようお泊りじやわいな。菓子んこふておくれんかへ北八ヒヤア段〳〵と出てくるは。中々い丶菓子だぞ。お前わつちらに。賣氣か菓子うり　さよじやこちやおまゐさん方に賣とうて〳〵ならんさかい。やう〳〵走り舞ふて參じたわいゐ彌次上方の女中は手か有の菓子賣手も足しもゐゐがむちやにお前さん方にほれたのじやわいゐ。そふ思ふてどうぞ菓子を買ふておくれな。ドレ茶々汲でさんぜふかへ（ト菓子箱を突出しおいて勝手へ行とそつと菓子北八エヽ顔のにくいほどしやべる奴だ（ト いひつゝ。彌次郎に目くばせしてそつと菓子の箱の下にかさねてゐる箱より。何やら菓子を五

ッ六ッ取出し。うしろへちやつとかくすと。かの按摩手を出して。此菓子をそつと引たくり袂へ入るを。北八一向にしらず。彌次郎も同く菓子三ッ四ッ取出に。勝手より人音するゆへちやつと箱を元の如くかさねて置。かの菓子は後の方へかくすを。按摩とつて是をもそつとせしめてたもとへ入るを。彌次郎も一向に夢中作左衛門也。此内菓子賣の女茶を汲で盆にのせ持來りて　サァぬくんのをあがりなされ　彌次　せつかくおめへきなさつた者をまんざらすげなくもしられめへ（ト菓子箱の内よく見る）是はいくらだ　菓子賣　ハイ〳〵四文宛じやいわいな。ソリャ。もむなねこつちやわがつて見なされ（ト幷べ立てすゝむるに。彌次も北八も）コウ待ねへむせうに喰て數がしれめへ　菓子賣　よ御坐り升何ぼなと上りなされこちや只でもあけよわいな。ノウお蛸さん　按摩　さよ志やわいな。サアよう御坐り升おつちやのお方。もみましよかいな　彌次郎　ヲヤもふしめへか　按摩　サアあなたわしがねきへよつてかしんかいな北八　ソレよしか〳〵　菓子賣　茶々も一ッ上りなさらんかいな　按摩　お鍋さん御馳走なされ此おかた〳〵。ゑらひ御心よしじやわいな。サアあなたお横に北八もう

肩はしめへか。どうぎにはしよるの　丹波　コリヤわりさま。たちのくちまつにかゝつて。ゑらふくはしん喰てのけた何ぼぞい　菓子賣　ハイ〳〵お三人様で。二百四十八文で御坐り升はいな　彌次　ヤァとんだとを云何そんなに喰物か北八はいくつだ　北八　されば。いくらで有たか。丹波　わしは四文のを五ッ喰から。ソリヤ二十やるぞ北八　そんなら跡は二人で。出すのか馬鹿〳〵しい。菓子よりか旅籠の方が安い　菓子賣　そじやて。上りなされた物をしよとがなねじや。なねかいな（ヲホ〳〵）彌次　イヤ（ヲホ〳〵）どおろじやァねへ。とんだ目にあはせる（ト小言いゝながらせんかたなく錢を拂やると此のあんまも揉で仕舞）北八　あんまさんはいくらだ　あんま　ハイおふたりでおあし一すじおくれいな　北八　ナニ五十宛かコリヤ高い〳〵（ト是もあとでは是非なく百文出し遣ると二人は立て行）彌次　上方の女にやァ。油斷がならねへ。然し菓子賣めが。おいらを能よふにしたと思つてけつかるであろふが。そういとらの皮。こつちにも。荒神様が。あらァ。馬鹿な顔ゑ。とつくに上菓子をこゝに。はへ附て。置たをしらぬやつさ（トうしろをさがすまさつきの菓子見へず。北八も同く爰に置た筈だ）とたづねるよ一向見へず。勝手）御退屈様で御坐りましよお煙花がでけました（ト置て）より茶碗とやくわんを持いで　北八　エゝ今のがあると丁度いゝのにどうしたしらん　丹波　ソリヤいんまの按ま取めか。と

○雖三人ニ喰ニ菓子ヲ不レス喰ニ其手ヲ彌次敗北或ハ菓ニ再戰之意ヲ

ていんだもんじやあろハ、ィヤ爰に忍い物がありよる（ト後ろの柳ごりをあけて）サアサアコリヤ道修町の店で貰ふてきよつた砂糖漬じや。茶の子に一ッやらつしやれ北八コリヤ有難へ彌次さんどうだ。たんとやらかしねへ丹波イニヤ。そゐゐに喰て貰ふてはならんわいこち貰れ（ト引たくりて。そう〳〵にしまふと此内女布團を引ずり來り）もふお床のべましよかいな（トそこらとりかたづける内勝手より今ひとりの女。枕布團を持來り。ほうり込で行）彌次モシ女中今そこへ來たを見ればやつぱりいんまのあんま取なり皆々肝をつぶし女は先刻の按まじやァねへかの女左樣じやいな北八どうして目が見へる女ァリヤお客さん方へ出るよ目明ではおこゝろをきが有て惡いさかい。お坐敷へはあなねよ目の見へんふりして出て玄やわいゐ。爰の内方ですぎられ升さかい。いにしなには。いつもあゐいに勝手手傳ふてじやわいな彌次ヤァ偖はおいらがことをよく當たはづだ目が見へる者を北八そんならおゐらがものした物も。物じやァかつたに違へはねへ女ヲゝおかしお前さん方の源四郎してじや菓子んじやてゝ。わたしもこなゐに貰ふたわいな（トたもとから出して見せうちわらひ勝手へ行）北八大笑ひ〳〵彌次やつぱりあつちが下つ腹に毛のねへのだハゝゝゝゝろ〳〵〳〵よ按まは取ず菓子迄も。こちに目の無ゆゐに取れた

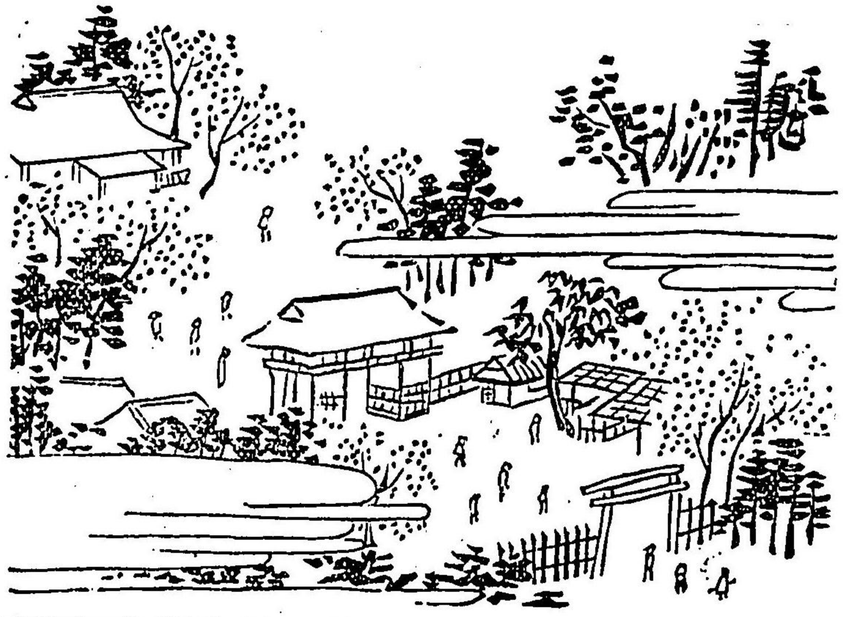
斯打興じつゝ。夫より三人とも湯殿引かぶり打ち臥たるに。丹波の人ハはや先ヌ高鼾かきいだせど。二人はいまだ。寢もやらず。彼是と咄しあふうち裏通りの畑けに犬の聲聞へ割竹の音。時の太鼓も早九ッの聲。打過る頃。北八天窓をあげコレ彌次さんお前ごそ〳〵と何をする彌次なぜか。あんまり寢られねへから。ふつと思ひ出して。コレ見や足でまんあゐ物をかきよせたは（ト夜着の中からちいさな曲物を取出して見せる）北八ヲヤそりや先刻わの人の出した砂糖漬じやァね（か彌次コリヤ聲が高い。柳ごりの脇に出て有を先刻から。にらんで置たからよ北八コウ一ッよこしねへ彌次まて〳〵（トあんどうくらく。とをければいさぬいわからずかの曲物のふたを取一ッつまんで口にかつち（曲物を引とり是もつまんで口にくしやりにちや〳〵）ヱゝ何だいつそ灰り）彌次コリヤかたい〳〵北八ドレ〳〵たちけな物だ（ペッペッ）彌次コリヤ砂糖漬じやァね。何だかをかしな匂ひがする（ト胸をわるくしてゲィ〳〵といふ聲をきゝつけ丹波の親父目をさめし此体を見るよりびつくりしはぬおき）ヤァ〳〵〳〵わり樣たち、コリヤ何しよる。わしが女房をなんぜ喰よる彌次ナニふ面の皰樣たァ。何のこつた丹波何のこつちやとは情ゐゐねわいの。ッリヤわしが知音。女房じやわいゐ。其入物のふたをよう見やしやれ（トいはれて。彌次郎とんで思あんどうの前にもちゆき。このふたの書附を見れば）彌次ハァ秋月妙光信女。ヤァ〳〵〳〵そんなら。

此曲物はおまへの噂樣の骨だな北八ナニ骨とはコリヤ。大變〳〵。どをりで胸がむかつくエヽどうしよふ丹波わり樣たちの胸の惡くあつたより。わしの胸がつヽぱつたわい。コリヤわしどもの村の。所法則で。其骨を高野へ納めに持てゆきをるので。御坐るわいの。ようまア大切なね。ほとけをなんぜ喰よつたわり樣たちは眞人間じや。ありやしよまい鬼か畜生かどしたの玄や。いや〳〵（トたもとを顏よおし當ておゐ〳〵と）エヽひづかしいこたアねへ。あまへが。先刻柳ごりをあけた時ろげ出たを知らずにゐたのはそつちの無調法。夫を砂糖漬だと思つて喰たのがこつちの麁相。ソリヤ五分〳〵に何もいさくさはねへわな丹波イヤ〳〵きかんきかん元の通よ。まどうてかへしや〳〵（トいきせいはつてなみだまじりにわめきちらせば。）北八色々ととはりいひさま〳〵なだめ。すかしてやう〳〵となつとくさせ誤りければ彌次郎も心の内おかしさまぎらかして）イヤもう。面目次第もねへのさ

人の骨喰もとゝり若いとき親のすねをかぢりたるみは

此彌次郎が口づさみに。丹波の人も心解て笑ひを催ふし漸く機嫌直りて打臥たるが程あく。一唾の夢覺て夜明ければ。勝手より起しに來たり手水つかふやいあ。膳を据るに。三人

とも喰しまひ。丹波の人ハ高野へと出て行く彌次郎兵衛北八は二三日逗留のつもりゆゑ。今日はこゝもとの名所一見せんと支度するうち番頭出てコレハお早う御坐り升。今日はどつちやへぞ。お越て御坐り升かいな。さよなら御案内の者お連ゐさるか。よう御坐りましよ彌次ホンニ夫をお頼申やす番頭かしこまりました。コレ〳〵左平治殿。鳥渡でんせ（ト勝手より案内の男を呼ぶ）あなた方が案内頼とおつしやつてじや北八モシわら草履二足買て貰ひてへの彌次イヤ一足でいゝ。おゐらは京雪駄買て來た。どうもわら草履ではみす〳〵田舍者の上方見物と見へて悪い北八ナニ旅で見へもへちまもゐる者か左平治お仕度がゑいなら出掛ましよかいな彌次サア〳〵早く參りやせう番頭女共いてお出なされませ（ト是より三人打連て此宿を出かけて）左平治ナント斯致しましよ。天王寺生玉い住吉御參詣の時に。お參り成れ今日はこつちやの方へさんせうわいな（ト長町通りを北へ。ひのうへより高津新地ヱ出まづ高津の御宮に參る。爰に昔仁德天皇の高き家に登りて見ればと詠じ給ひし旧地にして繁昌れふ斗無く）社内に豆腐田樂の茶屋參詣の人を呼サア〳〵お這入な〳〵是へ〳〵お休みゐ〳〵〳〵（留理の木戸）今じやア〳〵紙屋德兵衛天滿屋おはん。瓦屋橋白木屋の段。次は千本櫻の天川屋辨慶の腹切出語りじやア〳〵（ト目鏡のいゝたて）サア見なされ〳〵。大坂の町〳〵。嶮の這ま



で見へ渡る。近くば道頓堀の群集。あの中に坊様か何人ある。お年寄にお若衆お顔のみつちやが何ぼある。女中方の器量。不器量ほつこり買ふて喰て御座るも。濱側でしゝなさるも。橋詰の非人どもが襦袢の虱何ぼ取たといふ迄手に取様に見ゆるが奇妙。又風景を御覽なら。住吉沖。淡路島。兵庫の岬。須磨明石。大船の船頭が飯何盃喰た。何喰た角喰たも。いつ直きに。わかる。まだ〳〵ふしぎは此目鏡をお耳に當ると芝居役者の聲色。刚け拍手木のかたり〳〵。殘らず聞へて見たも同前。お鼻をよすれば大庄の鯛の匂ひ。ぷん〳〵と。あがつたも同前。只の四文では見るがた徳じや千里一ト

目の遠目鏡。是じや〳〵彌次目鏡屋さん音に聞た新町とやらも近く見へるかね目鏡屋さよ〳〵や。此お山のツイ傍に見へるわいな彌次夫じやァ近く見へるのぢやァね（遠く見へるのだ目鏡屋なぜもし彌次バテ此高津と新町との間だいたつた壹寸貳三分ほかねへもせねものを目鏡屋コリヤお前大坂の繪圖で見てかいな彌次左よう〳〵（ハヽヽ）先お宮へ參ろふハヽァいか様ぬゝお宮だ（ト三人共神前にぬかつき奉りて）

もろ〳〵の神に脊兢べしたまはゞ。さこそ高津の宮のとうとさ

是より境内の石段を西へおりたち。谷町通に出たるに。何とやら腹淋しくなりたれば。幸はひと居酒屋めきたる見せを見附て立寄彌次モシ何ぞ有やすかね（酒屋の亭主）ハイ煎殼に鳥貝鯡昆布巻じやわいな北八さつぱりわからねへ。其内味へ物なら何でもいゝ出してくんな亭主ハイ〳〵いつきにあぎよわいな彌次イヤ一升に入らぬ三合斗りたのみます北八時ぢ尾籠ながら用達にいつて來よふ。雪隱は何所だヲゝ有ぞ〳〵（ト辺んさきより向へまはりて雪隱へ這入と此内て看出たるに）彌次サア一ッはじめおせへ（案内左平治）マァあゐた。から彌次そんならお先（ヲト）ァゝいゝ酒だぞコリヤ北八。早く出ねへか酒か皆な。なくなる早く〳〵（トせりたてられ北八雪隱の